

敵討札所之靈驗
月謡秋江一節
歐洲小説黃蕃薇
三遊亭圓朝叢書
東京 金泉堂梓

097995-000-3

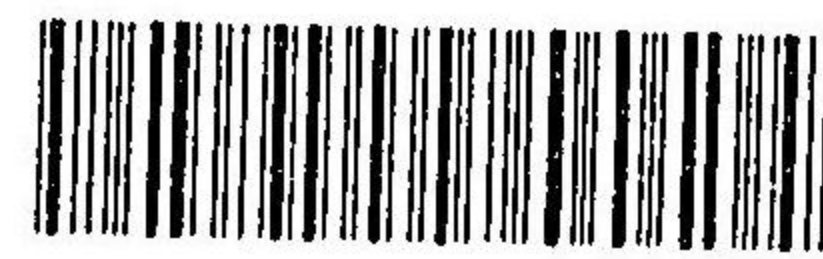
特12-84

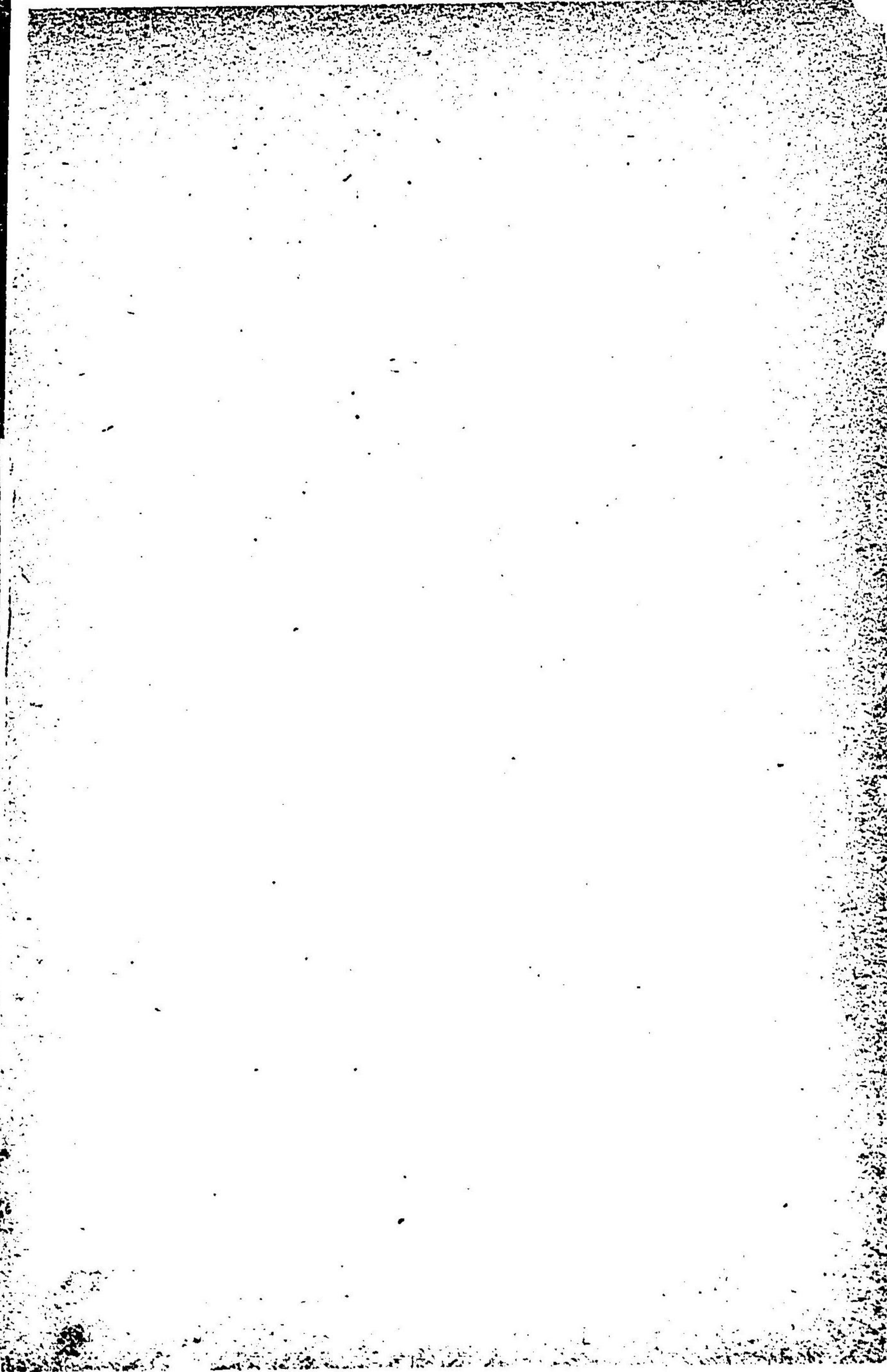
三遊亭圓朝叢書

三遊亭 圓朝/口述

M21

DBT-0188







横様の部屋若 紫織子の絆帯を重ねまして燃る様な長編帯を現は出して若い衆も手を引
 まつ向ふへ行きまます姿を又市ハ一ト目見升と二十五で血氣で御座いませるかと餘念もあ
 く見送つて居りましたが 又「どうも實小婢媚窈窕たる美人だナどうも盛なる所美人ありと
 云ふが實まないな彼位な婦人の二人とハ有まいどうも其陰翳が赤い顔をして行有様ハ
 どうも溜らぬナどうも實にハア美麗い、と想つていつて居りませと後から女郎屋の若
 衆が 若「エヘ…… 又「何マイ後からテラ」笑つて 若「如何様で御座います御座も御座
 いませうがエヘ…… 外様から故障の出ない様小御話を致しませうエヘ…… 御馴染も御座
 いませうが御手輕る様一晩か浮れハ如何でヘイ」 又「遊女屋の若者、成程是ハ何だナ大分
 申戯許り遊女屋の若者でどうも誠ハハヤヘイ」 又「遊女屋の若者、成程是ハ何だナ大分
 左右に遊女屋が見えるが至盛の所ハ承知し居るが貴公小聞は分らうが今向ふへ少し微醉
 で顔へはつれ毛がかいつて赤い顔をして男よ手を引れて待と美人があるが彼れハ何かハ遊
 女ハ但しハ堅氣の娘の様な者かハ 若「ヘエ只今ヘエ…… 御縁の深い事とあれハ手前方の
 職から二枚目をして居りませ小増と申します 又「ハア貴公の樓名ハ何と云ふ 若「ヘエ……
 樓名、エ、増田屋と申します 又「成程根津で増田屋と申せハ大分名高いと聞くが左様か
 へ増田屋で今の婦人の 若「小増と申します 又「成程増田屋で増を付けるハ神原の家來で神原
 を名乗様ももので 若「イエ左様な大した譯も御座りませんが 又「國から出たてハ何も知
 らぬが何かハ揚代金の幾干致す今の美人を一晚買ふ揚代ハ 若「ヘイ」 大概五拾疋で御座
 ますと彼お妓さんハ只今賣出して拾疋で高様で御座いますと彼の位ハ女子供衆ハ澤山

ハ御座いませんハヘイ 又「拾疋、随分直ハ高いが拾疋出して彼位ハ美人を寐さうと起
 さうと自由になるのだから實ハ金銀ハ大切な物だれ 若「エヘまづ兎も角も御上り遊ばし
 てハ如何 又「ダガ登樓もしやうが婦人を傍へ置て唯寐る譯も往かんが何か食物を取らん
 むハならんが酒と肴ハどの位ハ直段であるか 承ハつて置ふ 若「エヘ…… 御存知様で御
 座いませうと老徳被成てハ小さい臺ハ五拾疋を御座いませ大きい方ハ百疋で中ハ六百文
 位ハ成程夫でハ酒ハ別だらうナ 若「ヘイ召上りませんでも先一本ハ付升 又「百疋で肴ハ何
 位ハ成程夫でハ酒ハ別だらうナ 若「ヘイ…… 老徳でハ困りますナ大概遊女屋の臺の物ハ極つて居りま
 すハ小さい鯛が片ハらとで付合の方ハ澤山で御座いませ 又「夫ハ高價じヤアないハ越後
 の今町でハ眼の下三尺位の鯛が六十八文を買へる 若「御笑談許り被成ハ升 又「厄介ハな
 らう 若「有難う存じ升る揚んなさるヨ、アイートン」 二階へ上ると引付座敷へ通
 し升たが又市ハ黒木綿の紋付袴を着た形リを張肘をしと座つて居ると二階廻しが参りま
 して 若「イヤお出なはい 又「初めて、手前水司又市と申せ者勝手な心得ぬから何分願
 一何で御座いませるか前さん瓢箪を紅葉の枝へ附て御通んなていませしたねエ池の川へ入
 つしやつたノ御容子の好事と云つて噂をえて居たのでませよ 又「左様か前ハ當家の家内か
 ナ 若「イヤ否でませヨ私ハ二階を廻す者をませ 又「ナニ二階を廻す此二階を 若「アレサ力持
 ちやア御座いません眞正ハ小増さんをお名指ハ苛いじやア御座いませんか 又「何が苛い買
 度と思つたら登樓ナハ 若「眞正ハ外で見染て揚るのハ一とん縁ハ深いと申しませ眞正ハ

お堅過はモヨお袴をふ取なさいヨ、と云ぶうち小増が出て参りまして引付も済ませぬ
が這入升から一杯遣つて座敷も引け床となりましてたが素より田舎士あり升から小増の背
に顔を見せた許りで振られした

○ 第二席

聖朝門切ならんうちよと支度を致しまして 又「コレ、婆ア、」 婆「否だヨ婆アあんて
サ、と云ながら屏風を明く」お喚なはいましたか 又「イヤ昨夜ナ些ども小増の來ぬテ
よきどうも流行ッ妓でせから生憎お馴染が落合々サ斯う折の悪敷時ハ仕様がなにも立
込でキ 又「左様うキ兼て聞が初會ハ座敷切りと聞くと全く左様か 婆「アキ然う云た様を
もので有りませから。吉原の上等の娼妓なら座敷切りといふ事も有ま一たが他場所での
左様な事ハ有ませんが其處が國育ちで知りませんうら成程さうかと又四五日置て來ました
が又振と又二三三日置て來たが振て、振振れるが惚るといふものハ妙なもので小増が煙
草を一ふく吸付くお呑なさいといつたり亦歸りがけは脊中をぼんと叩いて「誠、濟ねへの
とヨ今度屹度來てお呉んなさいと云れるハが嬉しく思ひまして繁々通ひましたとが又市も馬
鹿でない男でございませから仕舞よハ痲癩を發して藤助と云ふ若者を喚で居り升 婆「藤助
さん行てお呉れ小増さんも時々顔も見せて遣を好のハ酷く否がるから困るヨ 又「コレ
ハ袴を出せ 婆「イヤ誠にごうも前はんは御氣の毒でキ 又「婆ア此所へ來いさうも貴公
の家ハ餘りと云へば不實でハないか一度も小増ハ快く拙者が御座居り事ハないぞ 婆「何
時でも然う云て居るので生憎と流行ッ妓だからキ前はん腹を立てハ困り升よ藤助問が惡

五ノ上

じやアねへか前てんの來る時よア御客が落合てサ濟ねへと御歸し申と跡でお噂して一
着氣を揉で居りますのサ 又「夫機事の度と聞いたが最早二度と再び來ないが田舎者にハ彼
云ふ肌合な氣象だから肌ハ許さぬと云ふ見識が有から前が來ても迎も買通せぬから廣
正と深切よ云て呉れても宜さうなものだツベコベ、馬鹿世辭を云て此後二度來ぬから
宜が其方達の餘程不實な者ださうも 婆「不實と云たッて私達の右左と云ふ譯ハ往ませ
んからサ誠自由にならぬので 藤助「へい彼お妓さんの流行妓でござい升から金で身
体を縛て仕舞升から 又「小増の身体を誰か鎖りで縛るを申か 婆「アレさ小増さん此方で
三十兩出さうと云と彼方を五十兩出さうと云て張合々するのだから誠仕儀が御座いませ
んヨ流行妓でエおア辛い物で夫だから苦界と云ふので察して氣を長く出被成ヨ 又「成程
是まで度々参つても振れる故屋舖へ歸つても同僚者か、夫見やれ迎も無駄じや結らぬ
りも廣止と云て大きき笑ハれ迎も貴公杯にハ買逐られぬ駄目と云ハれと云ハれと云ハれ自由
に成る事あら誠に残念だから幾干遣れと必らず私ハ麻り 婆「チヨ一藤助さん金づくも自由
まなればと云が、マアチエー其所ハ義理づくだからエお金をマアチ一二十兩も遣て長編
袴でも買へと云へば氣ハ毒と云て嬉しいと思つて又お前はん小前よと情の増事ハ有かも
知れませんヨ 又「婆アの云ふ事は採用らまんが藤助確と受合か 藤「それハ義理人情で儘よ
夫ハ是非小増さんがキ 又「然らば宜敷今日ハ機嫌能歸つて二十兩持て來よう。と笑つて
某日ハ屋舖へ歸つたが勤番者で他から金子を送る者もないから大事の太小を買入して二十
五金を拵らへ正直奉書の紙へ包み長い水引をうけ折敷斗を附て金二十兩小増水司又新

と書て持て参りましと直に小増遣し是から酒肴を取て機嫌飽飲で居たが其晩も又小増は
 来ないから顔色を變て怒りました毎度の通り拍手事夥多しいが怖がつて誰も参りません
 藤「一寸藤助さん往々お呉れヨ」藤「困ります手」藤「今日の中根はんが来て居るのよイ、エ
 参りも中根はんを深くなつて居て中根はんが上役だから下役の足輕みたいな人の所へ
 行ないれどヨ」藤「困ります手怒るとアノ太い腕ぶたれ升が此度の取捕ると何ナめ遣か
 知れないから驚き升ねエ」藤「私ハ怖いから御前一寸行て呉れヨ」藤「困ります手さうも
 ……御免」又「此方へ這入れ」藤「どうも實マ」又「何も最早聴かんで宜しい再度欺かれた
 小増が来られなければ来ぬで宜しい飲食の手前したのだから拂ふが今晚の揚代金殊小増
 遣へた二十金のみ今持て来て返せ不埒至極ナ奴箇様な席だから兎や角云ぬが餘り
 せせば怪からん奴金を持て来て返せ」藤「何ともさうも私共の云ふ事ハ私共の云ふ
 事の手前何と云た辨はへぬか」藤「一寸水司はん生憎今日も差合らあつて」又「黙れ婆アの云ふ
 事の採用んがコレ藤助其方の何と云と二十兩遣へせば小増の相違なく参り升と申さ
 いら男が受合て夫を反古にする奴があるか男子たるべき者が」藤「中々男子とつて然云ふ
 まの参りませんので此廊内を女の男子は遣へれるので私共の云ふ事ハ聴きせんから
 手さうも」又「コレ」藤「アイマ痛う御坐います何なさる」又「コレ能くも己れを欺むい
 此奴め」藤「アイマ…往けません遊女屋で柔術の手を出して往けません私共云ふ事
 を聽のぞの御坐いせんからと詫ても聞かれず若者の胸逆を取て拾上りました

第三席

大層ご成りますと此の事を小増が聞生意氣盛の小増廢止は宜いふ朋ぬきの形で自持落な
 姿をして二十兩の目録包を持て廊下をバツ／＼遣て来て障子を開て這入て来ました又市の
 腹を立て居たが顔を見ると人情で問の悪い顔をして居る小増「一寸又市さん何を
 助ごんの胸倉をとつてサ、此人を締殺す氣かへ遊女屋の二階へ来て力づくじやア仕儀が
 いじやアないか今聞をお金を返せとわい」又「コレサ返せと云ふ譯でいないが前
 一度も来て呉んからの事サ来てさへ呉れれば宜敷今迄毎度参つても前がつい一度も
 者に口を利す事もないから拙者のさうせ田舎武士で氣入らぬ知て居るが同僚の者にも
 外聞で有から責と側居て快く話してもしと呉れを大き宜敷が大勢打寄て欺むくから
 簡様な事を腹立紛れよしたの拙者が悪かつと小増「悪かつたじやアないよ私ハ前はん
 の様な人の嫌ひなノ前大層な事を云つて居る千金づくで自由になる様な私やア身体じや
 ないヨ二十兩ばかりの端金を千兩金でも出した様な顔をして手を叩いとり何彼まで
 しくして二階中寐られやアしさいヨ前はん返すから持と歸んおましお前はんの様な
 田舎武士の嫌ひとヨ、と云ひながら又市の膝へ投付て小増「いけ好ないヨ一臂助だよう
 と部屋着の裾をポントあはつて廊下をバツ／＼駈出して行た時ハ又市の後姿を見送て
 眞青の顔色を變へてブル／＼慄へてウーン、と藤助の腕を逆捻り上げました藤「アイマ
 貴君アイマ…夫様な亂暴な事をして困り升ねエ私杯の云ふ事を聞く妓でハ
 ありせんから」又「田舎武士の厭と云ふ素より其方遠も心得居らうよ」藤「アイマ…
 腕が折ます一寸かやさん小増さんを呼んで来てといふよアイマ／＼／＼大層ご

成りましたが、恰も此時遊興も参つて居るのが御原藩の重役中根善右衛門の嫡子善之助也云ふ者で御坐い升が留守居役の侍息でまだ二十四歳を御坐い升から隠れ忍んで来るが取巻の多勢居まして取巻「モン困るで御坐い升が太夫が是よ誘入のを知らないからの手を出して若者に握拳をきめるといふ變物も御坐い升が太夫が是よ誘入のを知らないからの手を出して夫のお馴染を知らないで通ふ位かの馬鹿さ加減の有ません貴君一寸お顔を見せると驚きまをヨ一寸鶴の一聲で向うを驚きますヨね小増さん小増「左様さ一寸顔を見せてお遣りなさいヨ」と多勢「云へれ升と底が年の往かんから直に立上りましたが黒出れ黄八丈の小袖は御納戸献上の帯の解掛りしましたのを前へ挟みながら十三間平骨の扇子を持って善之助の水司の居る部屋へ通り升又市の顔を一寸見ると重役の中根で御坐い升から其頃の下役の者へ重役は對して一言半句も答へれならぬ見識だから驚きました跡へ下つて又「コレは怪からん所で御面會する場所にて何とも面目次第も御坐らん善「コレコレ水司如何した者じや遊女屋の二階を夫様事をしつゝの往かん此所の色里で有よ左様じやアないか狂き心を和らぐる廊へ来て取るよ足らん遊女屋の若者を貴公が相手よしして如何する積りじや馬鹿な事じやアないか殊も新役で有るし度々屋敷を明て宜敷あるまい私杯の役柄で餘儀なくおれより或は權門旁々毎度足を運ぶ事も有るが貴公杯の今身の上で彼様な席へ来て遊女狂ひをする事が武田へでも知れると直に内閣小致すから歸らつしやい又「誠は面目次第も御坐いませんついで一夜参りませたは頼と不待遇で御坐つて残念よ心得朋友も逆も田舎武士が参つても齒の立ぬ杯と云へれませうら残念よ心得再度参りました所が如何は勝手

を心得ません拙者でも餘りと云へて二階中此者が拙者を欺きましてあまり心外よ心得まし...ソレ其所より立ち居ります貴君の御側より立ち居る其小増と申す婦人よ迷ひまして金を持て來と必ら申す申すから昨夜二十金才覺致して持て參とを夫を不禮も遊女の身として拙者へ對して悪口を申すのみか金を膝の上へ叩付ましたから残念よ心得彼様な事に相成りまして誠まどうも御目よ留り恐れ入升が何卒御父様へも武田様にも内々願ひます

○ 第四席

善「左様か此小増の私が久敷馴染で斯う云ふ廊下の意氣地と云て一ツ屋敷の者で私よ出て居る者が下役の貴公よへ出ないものや底が意氣地を少し傾城にも義理人情が有から私に買て居る馴染の遊女だから貴様に出ないのだから小増の事の諦めて呉れ是ハ私が馴染の婦人だから又「へエー左様で貴君の御馴染で、フウー小増「一寸水司とん私ハ大事の子深い中よ成て居る御客と云のハ此中根はんで中根はんに出て居る私がお前とん様の下役よ出られませかねエー能く考がへて御覽なといヨ出度も出られませんからサ又お前とんの様な人よ誰れが好て出るものかチエーお前顔を能く御覽アノ已惚鏡で顔をお見ヨお前鏡を見た事がないのうへ火吹達摩みたいナ顔をしてサアお前とん顔を見ると馬鹿しく成るのだよう」と云はれるから胸に込上て又市逆上あがつて此度の猶強く膝助の胸逆を取てウツンとノ上る「貴君イマイ...私をどう又「黙れ今中根様は被仰る、事を手前存じて居るか一ツ屋敷の者には出さし上役が愛しませる遊女をなせ己れよ出した「アイ...

若衆を打擲して殺す氣か痴呆た奴と左様なる事をすると武田へ云つて歸らせるがどうもコレ此手を放さぬか、と云ながら十三間の平骨の扇子を續け打もして又市の手を放しませんから月代際所を扇の要の碎れる程強く突くと額に破れて流れる血しや又市の夢中で居ましたか顔からばたり／＼血が流れるを見く又「ハア打擲し遇はし手前面部へ疵が出ました」善「左様な舉動をやるから打擲したか如何致した汝ハナ此後簡様な所へ立廻はると許さぬから左様心得ろ痴男め早く歸れ」又「何も心得ません所の田舎武士で肉坐つて一ツ屋敷の武士が簡様な所へ来て恥辱をまされを其恥辱を上役の御方が雪を下さる事と心得ましたを却つて御打擲し遇はして残念でござり升る只今歸るをござるコレ女共、袴と履の物を是へ持てト急し仕度をしてドン／＼と碎れる許りし階子を斬下りると塵止は宜いに小増を始め藪者や太鼓持まで又市の跡を付て來まして小増「アレサ御上役も逢て一言もあいからサ泣面してサ泣面ハ見よい物ぞやアないねエあの火吹連座や泣連座や、ゴ助や、とワイ／＼言はれるから猶更遊上て履物も眼も入らず紺足袋のま、外へ出ましたか恰で霜月三日の最早明近くなりなりましたが霜が降りまし故か露深之立まして一尺先も見分りませんが又市の顔は流る、血を流ると手の掌へ眞赤も付ましたから又「殘念ナ武士の面部へ疵を付られ此儘に歸られん縦令上役にもせよ憎い奴ハ中根善之進最上陣喰ハ、皿まで彼奴歸れば武田も告げ私を聞せるよ違ひない殊ハ、衆人満座の中よとと眼の重恨と面部の疵拾置がたいの中根めと七軒町の大正寺と云ふ法華寺に向ふ石置場のみ

る其石の陰に忍んで待て居る事ハ知りません中根ハ早歸りで銀助と云ふ家來に手丸の提灯を提さし黄八丈の着物は黒羽二重の羽織黒縮緬の宗十郎頭巾を冠と要の抜た扇子を顔へ當て小聲で語をうたつて歸りませ所へ物をも言さず突然水司又市一刀を放く下男の持て居る提灯を切落すと腕が折て居りますから下男の向ふの溝へ切倒され善之進ハ驚き跡へ下つて細身一刀を引抜で善「ナ、何者、と振り冠る又「ナ、最前の遺恨思ひ知らう、と云ふ若氣の至と感情小迷ひまして身を果すと云ふ是が發端で御坐います

第五席

水司又市が懇念の發しまする是が始めで御坐います若い中の色氣から兎角了簡の狂ひますもので血氣未だ定まらや之を戒しむる色小在りと申しませが頗る別嬪が膝も凭れて「一杯お飲んださいヨ、と云られると下戸でも茶碗でグーと我慢して飲まして煩らふ様な事が有ますぐ惚抜て居る者よハ嫌れ殊小面部を打破られ其頃武家が頭ハ疵が出来ると屋敷の門を跨いで歸られないものをござい升た又市の無分別も中根善之進を一刀兩断し斬て拾毒食ハ、皿まで舐れと懐中物をも盗取り小増遣りませた處の二十兩の金ハ有し是を持て又市の越中國へ逐電致しました此方の翌朝も成ましてもお歸りがあいと云ふので下男が迎ひに参り升と七軒町で簡様／＼と云ふ始末まづ死骸を引取り檢視沙汰殊に上役此事で涉坐い升ら内聞の計ひもえとも重役の耳へ此事が聞に部屋住の身の上でも中根善之進何者とも知れや殺害され不束の至りと云ふので父善右衛門ハ百日の間醫居致して罷在れと云ふ御沙汰で御坐い升から翌年相成り漸く醫居が免ましとされども最う五十の板を懸して

上 二十ノ

上 善行衛門大さきも氣力も衰へ娘も照と云ふが侍坐いまして年十九に成りますから
善行衛門「一寸おまへへ 善行衛門「遊ばせ 善行衛門「三月木の事善行衛門が遅く歸り
大分お歸りがお遅う御坐い升ら何處かへ御立寄と存じまして 善行衛門「少しお話しが有
が 善行衛門「斯う云ふ譯だか豫てお前も知ての通り昨年悴が彼云ふ譯も成て私も最
勤の辛いし大さきも氣力も衰へたから照に何を者も養子をして隠居し樂が致さう
ないが養子を致さんでと思つて居る所が幸ひと武田の次男重二郎が養子となさる様も相
お極つたヨ 善行衛門「チャマア夫のどうも此上も善い事を御坐いませる屋敷中でも親孝行で武
と云ひ學問と云ひあんな方御坐いません評判の能い方で御坐りますね 善行衛門「夫と彼れ
武田流の軍學を能くし劍術の眞影流の銘人文學も出來役立ますが親母に育られ氣が練れ
て居て如何にも武藝と云ひ學問と云ひ老年の者も及ばぬ賢い彼の位の養子の澤山有るま
此上もない有難い事をノウウ早く照をお呼なさい 善行衛門「ハイお照ヤ一寸此處へお出親父様
御坐成つたよサア此處へお出 御重役でも榊原様で平生の餘り宜い形のしあい御家風
下役の者へ内職 許し居るが、なれども銘仙の粗い縞の小袖は派手やかき帯を止め
て文金の高髷で白粉の屋敷だから常の薄う御坐い升が十九ヤ二十ハ色盛り標致好の娘
お照親父の前へ兩手を突て 照「お歸り遊ばせ 善行衛門「此方へお出今阿母様も話
をしたがお兄様の去年あの始末も前も早く養子を致度と思つたが親の慈目で何卒サア心
掛けのよい氣を心得て居つたが武田の重二郎が當家へ養子來て呉れる様も來から話し

上 三十ノ

はして置いたが漸く今日話したが調つたから阿母様と相談して善い急いで結納の取換せを我
度が媒妁人の高橋を以てする積りで嫁入の衣裳や何かお前の好みもあらう斯う云ふ物が欲
しい欄笄しの斯う云ふのとか立派な事へ入らぬが能く阿母様と相談して其上を先方へも申
込むから宜いかへ 照「ハイ親父様私に養子を遊ばす事の最う少しお見合せ成て 善行衛門「見合
せる其様なこと有りません何で見合せるのだへ 照「ハイ私くしはまだ貴方養子の早う御
座いませ夫れ他人が這入りませと親父さま阿母さまも孝行も出來ません様も成ますから
私しも心配で御座いますから何卒最う四五年お待ち遊ばして 善行衛門「其様を分らぬ事を云つて
の往けません早く養子をして初孫の顔を見せなければ成りません 善行衛門「眞正な養子をして
前の身が定まれば親父様も私も安心する双方安心させるのが孝行だヨ……定ま貴方何時
迄も子供の様で御座いませ……あんな能い養子の御座いませんヨ家へ被爲入つてもアノ様
ふしい方本當に此上もないお前傍侍を事たよ 善行衛門「サア、ハイと返辭をすと直に結納
を取換せるら 照「ハイ私しハアノ池の端の辨天様へ養子を致す事を三年の間願掛をし
て禁ました 善行衛門「其様を分らぬ事を言ふの困り升 辨天へ行て然う云て來い願掛けの致し
たが親の勘めだからお願を破ると云て來い夫で罰を當を至極分らぬ辨天と申すものだ其
様な分らぬ辨天なら罰の當やうも知るまいから心配の有ませんよコレ何時まで子供の様な
事を云て何なりませ私に約束して今更替へ出來ません直様返事を御爲なさいコレ照
善行衛門「

妻「もた然う御立腹を仰しやつても往きません……何時までもお前子供の様で養子を見る
と云ふもの怖い様と思ふものだけども私も當家へ縁付た時こんな不機嫌な顔で恥かし
い事と否うながら来ましたが又た良人となれど夫婦の愛情の別で親父様阿母様も云
れぬ事も相談が出来て結局頼母しい者だよアイと云言ヨク泣のかへ善ナ泣と何
事泣といふ事有りません何だ妻「まア其様にも怒遊ばそナ、と無理手を取て娘の
居間へ連れて行種々言合めたが唯泣く許り居て返答を致しませんの屋鋪内の下役小島
山平と云ふ二十六歳より升美男と疾から夫婦約束をして居るままた遠くして近き色情
れ道で御座い升密會する處が別に御座いませんから舊來家小奉公を致して居りましたおき
んと云ふ女中が上野町又園子屋をして居るの此家の二階を山平と密會するの是れが心
配で御座い升からさきんれ所へ手紙を出し升と此方へおきんが山平を呼び出しまして二階
で三鉄輪で話しをして居り升「どうも先達て有難う御座います貴方おん心配を被
成て困り升ヨお忙がまい所を御呼立やましたの困つと事が出来まして山「毎度厄介
ま成りまして氣の毒でノウ今日急入人だから何事かと思つて来たのだがどう云ふ譯だ
きん「どう云ふたつて貴方困りませよ何様したら宜うらうと存じましてお照さまに御兩親
様から急し御養子を遊ばせと被仰るので様様の否だと言つて辨天様へ禁たと被仰つたさう
で御座り升が親父様が聴かぬので一端約束したから變替の出来ぬと云ふので仕方がないか
ら私の養子をする氣のない何様も事が有つても自分が約束したから何處迄も強情を張
りだが親父様が腹を切るの何のと云ふから寧ろ身を投て死で仕舞はうか杯と小さいお見

の様な事を被仰るので困り升よ何か云へば直又自害をするの杯と詰らんとを言ふので困
まを私の思案小餘り升から貴方をお喚申しとれで山「アウ成程さうして何方うら御養子を
きん「お嬢様の被仰るに白島様ふい言のぬ方が宜いと被仰いませがアノ武田重二郎様チ
夫れあのいやノ氣の詰る方方で私も傍奉公して居るうち見ままたが偏屈な嫌に堅苦しい
嫌な人で實困つと譯で御座い升けまごも嫌と言切る譯も往きませんとら眞心配して
被入いませ山「お照さん……此山平の江戸詰り成まして間がない事では迄引立を兼りま
したの實ハ武田の重左衛門様の御恩で御座り升其御家の御二男様が御養子の約束も成つて
居るものを貴嬢が否と被仰れば何故と背くと夫より事が願はまければ拙者の屋敷を逐出さ
れる事も成り升私の身仕方がない事で御座い升が貴嬢様の御尊父も濟ぬ事何卒是迄
御約束の致ましが何卒親御の意を背くハ不幸なり貴嬢も世間へ濟ぬ事成り升から只今
迄の事の水も遊ばして何卒貴嬢武田から御養子を被成つて下さい實ハ只今まで私の御恩し
申したの國表を出立ませ時男子出産して今年二歳も成り升國ハの妻子が御座い升れで照
二、と娘の驚きまえてシートと白島山平の顔を見て居り升たが胸小迫つてワツと許して
泣倒れませたきん「貴方奥様が有の、チャお兒さん方御二人まだ若いのよチャ然うも御
座いませるかチ……御嬢さん白島様が涉迷惑も成り升から御嫌でも御座いませうけれども
思ひ切つて貴嬢お嫌でも御養子を遊ばせナ此事が知れると物堅い旦那様から金も金だ長
らく勤めて居ながら娘を二階で密會をさせるとは不埒な女だと被仰つて私が切られるかも
知れませんよチ被ア云ふ御氣象ですからチ御養子を去る置て時々お逢遊ばせヨチ然う

すりやア知れやアしませんよアノ釜浦様の御新造様みたいナ彼云ふ事も有り升から宜きやア有りません然う遊ませヨ山誠は手前も夢の昔しと諦め升から申シお嬢様不實な者と思召す御座りませうが此白島山平を可憐想と思召すあら貴嬢親御様の被仰る通り武田から御養子を被成つて下さい只今も金の申す通り御聴濟がなければ止を得ず手前も切腹でも一なればならん譯で「貴方ア切腹被成ると被仰るし御嬢様の自害杯と困りませんから夫れよお國と奥様もお子様も有事の私ハ少も知りません最う身を切られるより辛う御座り升けれども貴方の御言葉で御座り升から背かき武田から養子致え升と云ひながらワーンと泣き倒れました

第七席

金も山平も安心して「能く被仰いました夫で何うでも成りませ又チエ時々も遊遊ばす工夫も附きませからと、漸く身上の相談してお照の宅へ歸つて得心の上武田重二郎を養子とした處がお照の嫌で嫌ぬいて同衾を致せません家付の我儘娘重二郎の學問も疑て居り升から襖を隔て深更るまで書見を致しませお照ハ夜着を冠つて向ふをむいて寐て仕舞ますあれども武田重二郎の智恵者で汚座い升から私を嫌ふナと思ひながらも屋敷の前が有るから照ヤ〜と誠ハ夫婦中の宜ひ様として見せ升から兩親の安心致して居り升うち段々月日は立升とお照ハ重二郎の養子よ来る前小最う身重よ成つて居り升から九月の月へ還入つて五月目もお腹が膨き成ります若い中ハ有りうちで汚座い升からア〜淫奔の出来ま

せんがので汚座い升お照の懐妊と気が付きましたから何したら宜からう何か目掛り相談を爲度と山平へ細々と手紙を認め今日あたり金が來たら金持せてやらうと帯の間へ挿んで居りましたが何處へ振落しましたか見はせせんから又細々と冬を認めお金も渡し夫から直よる金より山平へ届けましたので九月二十日圓子茶屋へ打寄たら此時ハ山平の眞實よ成りませた「モシ白島様實は驚きましたヨお嬢さんの同衾を遊ばさないの、夫れだらう往けやアまません同衾を成れば少し位お月が間違つて居ても儲着しますヨ何したつて指の先位ぬの似て居り升から何をも出来ませのを嫌で嫌抜いて同衾をしないので隠し様が有ませんからサ押して云へば仕方がないから私ハ自害して死に私ハ二度と夫り持たない親が悪い無理持てたから當然と被仰丈で仕方が有ませんヨ山「露顯して止を得ない何うしても割腹致す迄の事で「貴方ハ又其んな事を云て、仕様が汚座いません夫じやア相談の纏まり様が汚座いませんと、彼れの是の云居り升と折悪しく其晩養子武田重二郎の傳助と云ふ下男を連れて小津輕の屋敷へ行て兩國を渡つて歸り掛けよ止みません長重「大分傳助道路が溼泥ノウウ傳「先程降りましたが宜い塩梅は歸り掛けよ止みません長重「間だ待遠で有つたらう傳「イエモウ貴方お勞れで汚座いませう汚指退出から御用多で被入て彼方此方とお歩行よ成つてお歸り遊ばしても直よ寐なられませんと宜敷が矢張お歸りが有ると御新造様と同じ様は御兩親が話しをしる杯と被仰るとお枕元で何か世間話しを遊ばして御機嫌を取つてお歸り遊ばしても、一と口召上つて寛くお氣晴しハ出来ません誠よ恐れ入りましたナ重「何も恐れ入事ハない私ハ僥倖たノウウ幼年の時母よ育ちられても



母が邪慥よししないが氣詰りて有つたけれど當家へ養子よ来てからの男御が彼の通り能い
 方で此上も赤い仕合で 傳「へエ私ハ舊來奉公致し升が旦那様も新造様も成校事を云ひな
 い汚方で誠私しも仕合せで實云ふ方で汚座いませから、筒様な事を申しては恐れ入
 升が若新造様へは少しも汚奉公遊ばさない世間を汚存じがない方を汚座い升から貴方
 が汚座の處へ汚兩親様の汚機嫌を取つて汚長く被爲入る時よハ新造様が最うお勞れた
 からと能いやう云つて居間よ連れ申してお好きな物で一抔献る様よお氣が付くと宜敷い
 が餘り遅くお歸りよ成るのが汚意よ入らぬのか知れませんがツント腹を立た様よお歸りが
 有つともろくお言葉も掛けない事が有りませからナ 重「イヤ然うとない汚新造ハ奉公
 せぬよ似合ぬ中よ能く心付くヨ 傳「へエ……何うも私も舊來奉公致し升が貴方様ハ誠よ
 何うも何とも濟まぬ事で實よ恐れ入つた事で私ハ心配致し升がダカヲト申して黙して居て
 も何うせ知れ升からナ 重「何を 傳「へエー誠よ何うも恐れ入て申上げられませぬが實ハ貴
 方様よ對して御新造様がナ何うも何う云ふ者も誠よ恐れ入り升ナ 重「大分恐れ入るが何だ
 い 傳「へエ……申上げませんければ他から知れませからナ却つて汚家名を汚す様よ成り升
 から汚兩親様も……また貴方の名義を汚す一大事な事で汚坐い升から外の汚方様なら申上
 ませんが貴方様で汚座い升から何うか内聞願ひ底の處ハ世間に知れぬうち汚工夫が付き
 升様よ参りませうかと存じ升が何うか汚内聞よ何うも何とも恐れ入りまして 重「恐れ入つ
 て許りでハ頼と何と分らんが他の事と違つて家名よ障ると、私が身ハ何うでも宜しいが
 中根の苗字よ障つてハ濟ぬが何じやか言つて呉れ、ヨ、傳助

○第八席

傳「實ハ申上様の御座いませんが最う往來も止切れたら申上升が汚新造様の意よ怪しか
 らん密夫を拵へ遊ばして密會を致し升れで 重「アウ虚を言へ左様な虚をつくな決して左様
 事ハ有ません世間の悪口だらうから取擧るよ私に來ましてうら御新造ハ些ども他へ出
 と事ハないぞ辨天へ參詣も行ふも小女が付き決して何處へも行た事ハない 傳「夫が有ので
 へエ……實に忍入升がナ不埒至極のハ金と申す舊來勤めて居りました團子茶屋ハ金へ
 イ彼奴が悪いのでへイ奉公して一ツ鍋の飯を喰ました女で汚坐い升から能く私ハ存じ居
 升が口ハペラ〜饒舌が彼奴が不人情を怪からん奴で御機嫌を自分の家の二階で男と密會
 をさせて幾干うシキを取る如何よも心得違ひた奴で 重「ソリヤア誰がヨ誰が左様成る事を
 云ふ相手ハ何者か 傳「相手ハ夫ハ何も白島山平と云ふ彼の下役の山平で私も外の方なら云
 ひませんが貴方様だから男汚様の汚耳に這入ぬ様よお計ひが附うと思つて申し升が何も
 恐入ませ 重「虚を言へ白島山平ハ義氣正敷男で役ハ下だが重役よ優る立派な男や他人の
 女房と不義致す様な左様な不埒者でない 傳「夫が誠よ有るので實ハ昨日ナ證據を拾つて持て
 居り升が開封致してハ相濟ませんが拾置れませんから心配して開封致しましと山平へ送
 る絶書を拾ひましと 重「ドチ見せろ 傳「何か汚立腹で御座いませうが内聞のお計らひを
 重「見せろドレもつと提灯を上ろ、と重二郎絶書を開て繰返し二度許り讀ましと 重「傳助
 傳「へエー重「少くも存せぬで知ぬ事を有たが能く知して呉と 傳「何も恐入ませ夫だらうら
 貴方様がお歸りよ成ても汚新造様が快よく汚酒の一口も上げませんので何も驚ろき升ナ

十二ノ上

重「此等の容子でハ懐妊致して居るナ 傳「ヘエー何も怪まからん事もケスナ 重「園子屋は金の宅よ今晩密會を致して居るな 傳「ヘエー被入い升か 重「己れが行ふ 傳「貴方被入つても内聞れお計らひを 重「痴呆た事を云ふな武士たる者が女房を他人に取られて刀の手前へ此儘でハ濟されぬから兩人の居處へ踏込み一刀切て捨て生首を引提て汚兩親様へ家事不取締の申し譯を致せから案内致せ 傳「是ハ何も飛た事を言ました是ハ何も忍入まいたナ外様なれば言ませんが貴方様で御座い升から内聞出来る事と心得て飛た事を申しました 重「飛た事と申して捨置れるものう行くと、云ハれ眞青も成てブルブル顫て傳助地平へ腫が着ませんでヒヨコノ歩行ながら案内をするうら園子屋の金宅の路次まで参りました 重「コレノ其處まで待て居れ町家を騒がしてハ濟ぬから 傳「何う御手打ハ御勘辨なすつて 重「黙れ提灯を濟て夫ハ拍へ居れ 傳「ヘエー、重二郎ハ傳助を路次の表まで待して自分一人で裏口の腰障子へぼん澹燈光が差から小聲で 重「お金さんの宅ハ此方かへと云ふと二階ハ三人で相談をして居りましたが 重「ハハ魚政かへ……イ、エ此頃出来た魚屋を御座い升から器物が少くないれでお刺身を持って来ると直ハ跡で甘藷を入れるから皿を返しと呉れろと申して取来升れでと、金ハ魚屋と間違で 重「少く待てお出よと、階子段を下りて 重「魚政かへ今お待つと、障子を開て見ると魚屋とハ思ハ外重二郎が刀を引提てズ！と這入り 重「コレ無ダ二階ハ参つて居るなら一寸逢てして呉よ 重「イ、エ御新造様ハ此方へハ被爲入ません 重「被爲入ませんたつて参つて居るハ相違ない是ハ駒下駄が有でないか 重「アノ夫

ハ先刻アノ被爲入まして夫ハアノ雨が降て駒下駄をハ住けなから草履を貸してと被仰いまして 重「馬鹿ナ痴呆た事を云ふナ達せんと云ハバ直ハ二階へ通るが 重「ハハハ何卒眞平御免遊ばして何ぞ御勘辨遊ばして御新造様が御悪いのでハ御坐いません皆な金が悪いので御座い升から何卒 重「何だ袖へ縫つてどう致せ放さんか、エいと袖を拂つて長刀を引提て二階へドン！と重二郎駈上り升是から如何相成り升か一寸と息致して

第九席

引續きまして汚鴨も入ますが世に中に腹を立ますは誠ハ人の身の害小成りませものハ御座いません殊も此れ赫ツと怒り升と毛孔が開いて風をひくと汚醫師が申升が何う云ふ譯か又極く笑ふれも毒どと申します又泣入て倒れて仕舞ふ様小愁傷致すのも養生も害が有ると申します入湯致しませも鳩尾まで這入て肩ハ濡れて成らぬ、物を喰てから入湯してハ成らぬ、年中水を浴て居るが宜と申し升が嫌な事を忍ぶのも馴れるとさのみつらいものでハ御座りませぬ何事も勘忍致そのハ極く身の養生なれども堪忍の致し難いことハ女房が密夫を拵へまして良人を欺し終て他で密會する事が知れと時ハ腹を立ぬ者ハ千人一人も御座いませぬ武田重二郎ハ中根の家へ養子も来てから照ダ同衾を爲ないのハ何か譯が有らうと考へを起して居りませ處へ家來傳助が是と證據の姿を見せさから常と違つて不埒至極ナ奴サア案内しろと云ふ傳助も飛た事を云つたと思つても今さら仕方が有りません重二郎ハ園子屋の金の家へ裏口うら這入た時ハ金の驚きまえて 重「何うか私ハ悪いから汚様様をお助け成つて下さいと袖ハ縫るを振切てドン！と引提げ刀で二階へ上りま

十二ノ上

した時、白島山平も照も唯だ憐れ致してよもや重二郎が来候と思ひぬから勝は先れ
 つて心配し何う致そう寧ろその事二人共死んで仕舞ふと云て居る處へ本夫が来たので
 左右へ離れてビツマリ疊へ頭を摺付て山平も照も顔を擧得ません金のは最う屹度斬る
 と思ひ怖らるがら上つて来て「向卒、汚勘辨成つて下さい、汚黒ひで御坐います、重、マア
 静、致せ左様騒いで往かん世間で何事かと思ひれるエ、何も騒ぐ事はない……
 コレサお照も前何故其様驚きなさる私が来この疊へ頭を摺付け顔を擧得ぬが何と心
 得て左様恐れて居るのか何うも何とも頼と私に分りません……山平殿夫れで何と心
 挨拶も出来ぬから頭を擧ぐ下さい……金、静、致して下家の締りを能くして置くが能いぞ
 ヨウ賊でも這入ると往らぬ、ハ、誠に何も何ともお詫の致方も汚坐いませぬお嬢様が
 何も私しが舊來奉公を致し他に行く處もないから金ヤ家を貸せと被仰つた譯でも御坐いま
 せん世間見ずに入つしやい升から人の目様に掛つて成りませぬと私しがお招申たのが初
 めて、何卒、御勘辨をまつと、重、コレサ静、しろうヨウ何と分りませぬが夫れじやア何
 か對座で居る處へ私が上つて来たから山平殿と不義濫行でもして居ると心得て私が立腹し
 て此處へ上つて来た故對座で居た上からの中譯の逆も立たぬサア濟ぬ事をしたと云ふので
 左様驚きなされたか、左様か、然うとらう然うとらう驚く譯はない誠にさき貴様
 の迷惑だ……ノウ山平殿役こそ卑いが威儀正しき其許が中々恒の心掛けで申し品行も宜し
 く柔和温順も人で他人の女房と不義杯をウン……ナア爲る様ナ左様ナ非義非道の事を致す
 人さあいなア……が對座で居つたが通りで有た男女七歳より席を同じふせせで申し譯が

立ぬと心得て山平殿も恐れ入つて居らる、様子、照も亦濟ぬ何う言譯しても身のあかりの
 立つまい不義と云ひれても詮方がない身小覺わぬいけれども是れ二人で居たのが通り
 殘念な事と心得て其様泣入つて居る事か何とも誠氣の毒ナ飛た處へ私が上つて来たノ
 マア云ふ譯の決してあいなウさん、ハ、ハ、決して夫れはさう云ふアノ其様なマア
 モ譯でハ御坐いませんから

○第十席

重、どからノチ私が養子に來ぬ前、照の心掛の實、感心云ひす語らず自然と知れ升なト
 やすの昨年霜月三日に汚兄様の何者とも知れ殺害され如何にも殘念と心得御兩親ハ考体
 あり武士の家、生れ女ながらも仇を討ぬと云ふ事、いかに心掛ても何も敵手の立派な武士
 であり女の細腕を討事ならず誰を助太刀と頼まう信切な人のいかに思ふ處へ近しく出
 入を致す山平殿殊ふ心底も正敷信實な人と見込だら兄の仇討も出立仕度と助太刀を頼ん
 だの、有らうが山平殿ハ私ハ然うハ往かん汚養子前、大切の娘汚を私が若い身そらで女
 を連れて行譯ふハ往かん兩親の頼みがあければ往かん杯と申されて迎も汚用ひがないのを
 不止得助太刀をして下さいと照が再度貴公と頼んだハ實ハ奇物な事で頼まれてもまさか女
 を連れて行譯ふも往かす此方ハ只管頼むと云ふ是ハ何も山平殿も實に困つた譯だが私が改
 めて汚頼申す譯ハないが山平殿中根善之進殿を討たハ水司又市と拙者ハ考へる彼の日逐
 能して行衛知れず落書だらけの扇子が善之進殿の死骸の側小落つて有つたが其扇子ハ部屋で
 又市が持つ居た事を拙者の承知して居るから敵ハ私の考へで又市ハ相違なし汚屋敷へ立

知る彼云ふ悪心な奴殊に腕前が宜しいから何な事を仕出すかも知ん故小拙者が改めて貴
 公に頼むの何か秘密も成て御國表へ参つて貴公が何か又市を取押へて呉んか……照る前
 何處迄も又市を探索して討んければならぬが私から山平殿は一緒に行て下さいと何れも養子
 に来て問もなし頼む譯の表向往かんから前親父様阿母様への中譯も私も武士の家へ
 生れ女ながら敵討を致度故池の端の辨天様へ兄の仇を討ぬうち決て良人を持たせんと
 命掛ての心願をある處へ達て養子をしろと被仰から養子をしろと重二郎と未だ同衾を
 致しませんの是迄私しと思立た事を果さずば何うも私心は濟みません神も誓つた
 事もあり仇討も出立致す不孝の段の何様も御詫致す無沙汰で家出致す重く不埒の御寄
 去下さいと文面が私に教へるから私の云ふ通り書きなさい又山平殿……貴公は俱
 行つて下さいと云われぬ山平殿の國表へ参つて彼奴を取調べ助太刀をして照る仇
 討をえて歸る時貴公も共其の所へ行合幸ひ助太刀して本意を遂させしと云ては歸り
 なれば貴公の家へ何か潰さぬ様も致さう重二郎刀も掛ても致すから二人へ改めて頼む譯に
 往かんが然うして仇を討たせて望を叶へて遣て下さい……お前の奉公した事がないから
 親父様親母様も我儘を云ふが山平殿の親切あれども長旅の事我儘な事を云て山平殿の目見
 捨られぬやう小中能うナニサも捨られての仇の討ち亦是から先ハ長い旅水も異り氣候も
 違ふから話らん物を食して腹を傷ぬ様よしなさい左様じゃアあいか何でも身を大切に
 歸つて来て呉れんけれと困り升を縦令アハ被仰が二人で居るから密通と思召し違ひない
 密通もせぬ然う思はれての残念と刃物三昧でもすると親父様親母様も密通と思召し違ひない

必らずとも道中よて齋い物を食して腹もあたらぬ様よしなさるが宜いノチも照る、五月
 なるお照の身重の腹を重二郎に持て居り升扇でソツト、突れた時のハーンと照る有難様
 と思はす聲が出て泣伏ました

第十一 席

山平も面目なく「山何共申譯の御座らぬ重く不埒至極な事拙者……重イ、ヤ少しも不埒な
 事ハ御座らん國表に於て又市が何な事を爲るか知れん万一重役を欺むき大事と小事より起
 る譬喩の通りで拾置れん……親父様阿母様へも遺書を認めるが能い、硯箱を持て来ナ
 「ハイ 重」硯箱を早く「ハイ 重」何んだ是ハ松魚節箱の「ハイ、と漸や之硯箱
 を取寄て紙筆を把らせましてもお照の紙の上ハ涙をボロ／＼流し升ら墨がよじみ幾度も
 書損をい漸く重二郎の云ふ儘に書終り封を封く致しませしと重「是れハ私ハ阿母様の何時も
 大切に遊ばす彼の手箱の中へ入て置く……きん、何も長い間た度照が来てお前の家でも
 迷惑だらう主人の娘が貸て呉れと云ふものを出来ぬとハ義理づくで往かんシ親切な世話を
 して呉れ忝ない多分は禮を仕度歸り掛て有るからノチ是ハ誠心計りだが世話なつた
 恩を謝るから「何う致しまして私ハ夫れを戴いてハ濃ません何か大丈夫ハ重イ、ヤ
 其替り頼みがあるが今日私ハ来々照と山平殿は頼んで旅立をさせた事ハコレ程も口外して
 呉れてハ困る少しも云てハ成らぬヨ口外して他から知れ、お前より外ハ知る者ハないか
 ら據なくお前を手に掛けて殺さなければならんヨ、きん「ハイ、どう致しましてヤ
 しません 重「じゃア宜敷サア山平殿、照早く表へ出ささ、宜敷から先ハ立て出ささ。

二人の何事も只だ有難いと面目ないで前後不覺のようになつて重二郎の云ふ儘に裏へ掛る盜所口の腰障子を明け重「大きに厄介な成た……サア心配しなくも宜い出ささい」照「ハイ……金や長る世話も成ました」夫「サア直ぐ遠い田舎へ破爲入さまか親類にア、被仰つて下さるから本當に敵を討て出ささいヨ」照「誠は面目次第も御座いませぬ重「口を利て往かんサア」ト二人を連れて出ると傳助の提灯を持って通路に待て居りまして「誠は何も能く御勘辨なまつて重「コレ静な致せ兩人を手討に致し他を騒がしむの宜敷ないから傳「ハイ……重「人知まぬ處へ行て兩人とも討果せから袂を押へて遣さぬ様も傳「ヘエ……宜敷重「コレ提灯を腰へさせ傳「ハイ……と兩人の袂を押へて重二郎も從つて池の端辨天通りから穴の稻荷の前へ参りますと重「コレコレ最う往來も止切れたナ傳「ヘエー何ぞ御勘辨の出来ませ事なれば願ひ度私ハ斯う云ふ事と心得ませんで重「静な致せ照「山平、不埒至極な奴兼て覺悟を有らう夫れへ直れ、と云ひながらスタツと長いのを披ましたから二人の彼ア云て出たが是で手討にされる事かと覺悟をして兩手を合せ願を伸して居る重「女から先づ先へ斬なければならん傳助廣小路の方から人が来やアしないう傳「イヤ、エ、と覗かふ傳助の素顔を見せ打ましたら傳助の能い面の皮重「ア、イヤ驚かんでも宜しい主人の事を有る事無い事告口を致す傳助、家も害を爲す奴此處で切殺せば誰も知る者いぬ試切か何か遣つこのだろふで済んで仕舞ふ、と小菊の紙を出しと鮮血を拭ひ箱に納め有合せの金子を出して重「多分持参すれば宜かつたが今迄心算なかつた故はんれ持合せで二十金ある路金の足しよも成るまいが、是を前が仇を討て

頭つて呉んで私が一生涯不孝者終らんければならん前の家も絶てのちらん照も實も道に背く女と云へれるもお前の心一ツで有るぞよ……我儘者だが何卒面倒を見て被下儀願申すぞ山「ア、忝あう御坐ると、重二郎の心底何とも申様も御座いませんから貰ひまおた旅費を載さませ重「壯健で行て参れヨ、とチャラ／＼雪駄穿で行のを二人の兩手を合せて泣ながら見送ります重二郎の深い了簡が有事で其儘屋舖へ歸りましたと二人の何しても仇を討てん歸られません是から仇討出立に相成り升が一寸一息つきまして

○第十二席

諸お話の兩頭に分れまして水司又市の戀の遺恨も中根善之進を討て立退きました本へと云ば増田屋の小増と云ふ別嬪から婦人に逢て何んな堅い人でも騷動が出来升ものでガ此小増ハ餘程勤めに掛つて能く取れた女と見えて其事を跡で聞て小増「彼の時私が彼云ふ事をした故斯う云ふ事も成たのだらう中根さんハ可憐な事をした氣の毒ナと悔しきまして見世を引居り升から朋輩ハ「悔しきまして客を取る氣もなく情のある様な振を弄るも外見あげてお遣んなさい、と勘めらま悔しして客を取る氣もなく情のある様な振を弄るも外見かハ知れませんが皆来てハ悔を云ふ處が翌年に成て風を來た客ハ湯島六丁目藤屋七兵衛と云ふ商人糸紙を御そ良い身代で其頃此人ハ女房が死去して子供が二人有なして傳で居るから仲間の者が參會の崩れ「根津へ行て遊んで傍覽成んか恰も櫻時で惣門うち金花魁の姿で八文字を踏のハなか／＼品が能く吉原も跣足で美魔敷から行と御覽をさいと誘引れて行と惡縁と云ふものハ妙ナもので増田屋の小増ハ藤屋七兵衛の敵討に出る藤屋七兵衛の年の二

と云つて子廣がつて居るから裁縫物を踏だら突飛して愛を打て頭へ疵が出来た。正「云た云たけれど、た大い疵が有る氣が注ねへで居た夫で汝黙つて居たか親父も云ねへり。正「云た云たけれど、も阿母が旨く云そアノお前の着物を繕居ると踏だから往ない云たら故意と踏だから繕物を引張つたら滑つて轉倒さつて然云つて虚言をつくノ先の阿母が存命で居ると能んだれどもお婆さんの處へ逃げて行くと思つた連てツツ吳子エか。正「アノ子廣焦死する様ナもんだから憫然想よ、汝も食はせベエと思つて柿ヲ持て来たぞ。正「アノ子廣焦が来ても自分で砂糖を入れて塩を入まて搔廻として手隠して喫て私しよの喫させあいの柿も子皆な心安い人に遣て坊よハ一ツしか呉ないノ遊くつて往ないのを呉れるノ。親父に汝云が能い。正「云たつて往けない種な虚言ヲついて云告から親父の本當と思つてアノ阿母の義理が有るのだから大事おしなけれを成らない、柔和すれば増長する今から夫をア往ねねへとエチ一處になつて親父が拳骨で打て痛いア。婆「アレエ一處になつて、呆れたア本當よア能え七兵衛殿よ我達で汝丈のお婆さんで連て行く田舎だアから食物不ねへが不自由なせねへ十四五よなれば立派な處へ奉公遣つて藤屋の別家を出させるか然うでなければ我が方の別家エさせるから一處へ行か。正「行度ヤアだから田舎で食物無つても阿母よ捨られるより能から行よ。七「何方も出なすつた……チャお出なさい榮二郎お茶を持て来て御婆さんよ上げな田舎の人だから餅菓子の方が能から……能くお出なすつたチ、噂許り致して居まして此方等から一寸上らなれば成らんですが何分聞ケ敷いので、痛を空られたいも、不沙汰許りませア此方等へ。婆「ハイ御免なさいへ御無沙汰アして何時も

繁昌を聞きしとが、文吉も上らんでのならねへてエ云ひますが秋初の川が多いと参り損なつて濟ねへてエ噂許りも、お前さんも壯健を。七「誠よ能くお出なすつて帝釋様へ御許りも行ふと思つて歸掛けふる寄り中さうとお梅も話をして居たが……お梅「アチャ能入つじやいまして能く田舎の人の重い物を背負て子エ。婆「ハイ御無沙汰ハイ家が屋敷内よ實りました柿で重とも有が何うかア。婆「被たたら孫よ呉れベエト孫よ食ひしとエ許りで重エも厭ハ申引提て来まよ……ハア最う構ハ申飯も食て来まよたから途中で足イ勞れるから蕎麥ア食ベエと思つて兩國まで来て蕎麥ア食たから腹がくちい構つて下さるナ……七兵衛さん私參つて相談致しますが惣領の正太郎の私ガ方へ引取から。七「何で何云ふ譯で

第十四席

「何云ふ譯もなへ我が方へ来てエて云だ我が方へ置度ハねへが前嫌ア留守藤家のこと、御存知御坐んねエが悪戯ハ果すかハ知らねへが頭是がねへ十ふも足ねへ正太郎だから少一位の事の勘辨しと下さへ。七「アレサお婆さん極を云て居せ来ると愚痴を云が私の子だもの奉公人も付て居るハチ……正太ハ又田舎のお婆さんに何か言告たナ。正「何も言告やアしあいの婆さんが彼地へ連て行てエから行てエヤ。七「行度と。婆「何いふ譯で大事の親父をまづ捨て我が方の田舎へ来てエ不自由してとも兒心よも思ふハ能くたんベエと思ふからお與なさへ縁切でお與なさへ。七「其な馬鹿ナ事を云てハ往ません。婆「ナゼ其なら縁略よ育るヨ。七「鹿略よ育ハしませんヨ。梅「旦那……正太郎が言告たのをお婆さんの然と思つて居のでせう私だつても頭是がないから夫ハ彼も我儘を致升が御憐れ育るとハ出来ません佛様の前

も有升から私も来ての身の上で私が邪慳も育る様なと有ませんヨ
 エ、コレが願の疵の何したナセ様側から突落しとる女郎だアから子を持た事が無から子
 の可愛いと知升めへが貴女に子が出来て御覽さへ一ツでも打くとハ出来なへヨ辛いか
 ら見心よも我ア方へ行度と云のた我ハ正太を此處へハ置れましぬエよ
 七「お婆さん何處迄
 も正太の連て行と云ガ家督させ様と云ので何有とも遣ぬてエを伺える
 七「遣ぬと云へを命
 掛けても連て往やすべエ打たり擲エたりして疵を付る様な内へハ置かまやしねエジヤア
 御坐んねエか何處へ出てもお代官様へ出ても連て行とアハア
 七「其な事を云て……正太手
 前お婆さんの方へ行度か
 正「行度ヤ
 七「ソレ見さへヨ能云た何あつても縁切で
 七「其な
 ら上ませう其替り何でせぬ前さんの處との絶交でせぬ
 七「絶交でも何でも連歸りやそ
 エ「行通しませんヨ
 七「當然、我ア方誰が来べエお前さんの様ナ女房が死で一両忌も
 經ねエ中女郎ヲ買て子供泣を掛る様な人で何な事が有ともお前さんの側へハ参りせん
 七「碌な物も喰せぬへハア
 梅「ア、云と云て正太が言告るからでせよ
 七「何云たつて是
 が皆な知て居らア何だサア正太来いと中田舎のお婆さんで何と云ても聴せんトウ
 強情で正太郎を背負て連て歸たサア一ツ災害が出来升と夫からトッ
 拍子と恐く成まを

第十五席

聖年湯島六丁目の藤屋火事と申して自宅から出火で土蔵二戸前焼落ち自火だから元の通り
 建るとも出来ません麻布へ轉まよとが夫から九ヶ年過ぎまると寛政四壬子年麻布火
 火でござり升市兵衛町の火事丸焼と成りまして忽ちの間土蔵を落し災難がある引續き

商法上を損許り致して忽ち微祿して只今の商人方と異つて其頃ハ落るも早く借財も
 狂方が無いから分散して夫婦の中に十歳に成り升る繼と云ふ娘を連れ行と處もなく越中
 の國躬水郡高岡と云ふ處は萬助と云ふ以前は奉公人が達者居ると云うは是を便つて行き
 大工町と云ふ片側町を片側へ寺許りある處へ荒物店を出し詰らぬ物を賣つて商ひ致す中
 へお梅も段々馴れまして外又致方も無いから人仕事を致し升祿の出来ませんが前町の寺
 院が多からる寺の仕事をしまま和尚さんの着物を縫たり納所部屋洗濯したり漸くと
 細休煙を立まして居り升うちお話しハ早いもので最此高岡へ来ましてから三年も成升が
 大工町は宗慈寺と云ふ真言宗の和尚さんハ永禪と申して年三十七で御坐い升此人ハ職も
 子の宜い和尚さんと云ふ檀家の者れ扱ひが宜敷から信じて疊を替へる本堂の障子を張替る
 諸處を脩繕する杯皆檀家の者が各番致す田舎寺を大黒女の一人位ハ置ぐ此の和尚ハ障
 子の能い人故仕事ハお梅を頼て七兵衛が来る調子能くし
 永「お前の以前大家と云ふが
 實の能い人故仕事ハお梅を頼て七兵衛が来る調子能くし
 永「お前の以前大家と云ふが
 災害に遭て微祿して困るとらう資本ハ澤山の出来ぬが十兩か廿兩も貸う、と云て金を貸す
 苦し紛れに借ると返せないから云譯へ行くと
 永「最う十兩も持て行な、と三四十兩も借財
 が出来ましとからお梅ハ大事にしてハお寺へ手傳ひハ行能く勤め升恰と九月節句まへ鼠木
 綿の着物を縫上て持て行く人ハ居ないから臺所から上と
 梅「アノ眞達さん、庄吉さん
 居ないの、何方も入つしやいませんか
 永「誰ぞや
 梅「ハイ、お梅さんか此方へ来
 さい
 梅「ハイ、誠無沙汰致しました
 永「イ、ヤ最う何うも最う出来とかへ早いノウ今
 エ皆使遣つたが眞達も庄吉も居ないで徒然じやア有し夫は雨が降て来た故
 梅「イ、大

した雨でも御坐いませんで来る様で又晴さうを御坐い升よ 永「然かへ權家の者も来ぬ
だら一人一杯遣つて居とのよチ、着物が最う出来たり能う出来た 梅「御着悪う御坐いま
せうが…御着悪ければ又縫直し升から着て御覽なさいまし 永「能う出来た一盃酌で呉ん
かへ何ぼう坊主も酒の酌の女子が能文妙なものだ出家よあつても女子の断念出来ぬが何
うも自然よ有もれを出家しても諦められぬと云が女子の何うも妙も感じが違ふ 梅「旨い
とを被仰ると貴僧此間の松魚節味咄子彼の知まませんから又煮て来ませう 永「彼か、旨か
つと彼能わノチ…一盃遣りなさい、と一盃飲でお梅に献する梅が飲で私尙又献す其中酒
の酔が廻つて来まして 永「眞達の歸りませんワ大門迄遣つたが、お梅さんお前もア一昨
年から前町へ来て彼様マア夫婦暮しで能く稼さるるが七兵衛さん以前大家比人て
が運悪く田舎へ来てナア氣の毒じやナレド此高岡の家數も八千軒もある處で良い舟付の處
まやがクレマモ江戸御府内居と者何處へ行つても自由の足りぬものじや應不自由の處
し升よよ…お梅はん私をお前忘れたかへ覺れて居まいノウ

第十六席

梅「ハイ覺てと被仰るの 永「私の顔を忘れたかへ十三年も逢ぬからナア 梅「然で御坐い升か
シヤア旦那江戸へ被入りましたと有ノ 永「お前へ以前根津の増田屋の小塔と云ふ女郎と
チ 梅「アレ不思議ナ旦那何して知升ノ 永「何したつて夫へ知る忘もしない十三年跡九月の
月末からお前の處へ私も足を近く通た私の水司又市だが忘たうへ 梅「チヤマア向も旦那然
う被仰れと覺て居ますヨと付けれどもお頭が變たから些とも口かまはせんよ…何事もチエ

永「何もたつて私の忘のせんせお前此處へ来ると直ぐ知た若いうち惚たから知れるも運
私の頭ア割こみして此の宗慈寺へ直つて住職して最う九年じやアが斯なつてから今まで女
子の勿論、腥物も食ぬも皆お前故じやア 梅「私故とハ 永「忘れやアしまいお前が簡潔じや
ア榊原藩の中根善之進の問夫じやアからと云ふて金を私に勝へ叩き付てナ忘やアしまい
「アレ昔の事を云々の困り升チ年の往ない中へ下らない者で女郎子供とい能く云たもので
冥利が悪いとて其冥利で今の斯遣て斯云ふ處へ来て貧乏の世代ワクノ一するも昔の罰と
悪く居り升よ 永「恰もアノそれ忘やアせんで彼時叩付られた許をなない多勢で悪口云ハれ
田舎武士と云て手前杯が女子を買つても惚られ様と思ふの押が強い杯と云て重役の權を奮て
中根が打擲して扇子の要るナ面部を打破れたを残念と思て私の七軒町は曲角で待伏してあ
の朝善之進を一刀ふ切たのハ私じやアセ 梅「アレまあドチモ 永「能わか斯う打明た話じや
が切て仕舞て眼が醒めてア、飛んだ事を爲とと思とが最う爲てまはい是非がない連も屋敷
よハ居れない外に知己がないから風と思ひ付き此處ハ伯父が住職して居るから金まで盗ん
で高飛し頭を刺こかして改心するから弟子ふしてと云て成ぬと云を達て頼み斯ふ遣て今で
ハ住職よなつて十三年も納衣を着て居るもお前故じやない人殺したのもお前故じや
「何もチエ然うで何もチエマア何もチエ元ハ私が悪い許りで中根さんも然云ふとふあり
作りを仕しましたチエ 永「七兵衛さんハ知るまいが金を貸もお前故だ是迄出家を遂ても
前を見ず私の煩惱が發つて出家ハ遠られませんせ 梅「お前さん…アレ、ナニチなさる往
ませんよ眞達さんハ歸ると往ませんマレ 永「私も最う隠居しても能えじやアその職事

有ても此處の離れやアせんや後住を直して裏路の寂しい處へ隠居家ア建て大黒女一人位あつても能えじやア七兵衛さんが得心なれば何でもなる此方へ来て金も澤山貯る居るが嫌かへ私ハ前故斯う遣く人を殺しし出家ふなり前が又来て迷せざる罪じやアないか、とグット手を引る梅の脊中へ手を掛けて膝を突寄せ時は梅ハア、嫌と云ふら人を殺す位の悪僧さん事をするか知れぬ何うかして此處を切抜け様と心配致すが此の挨拶何なり升が一寸一息つきまして

第十七席

○第十七席
藤屋の女房お梅ハ十三年振で圖らずも永禪和尚小遊近まして始めの程ハ憎らしい坊主と思ひましとあれども本夫が借財も有升から一角遁れと思ひましたも固より汚れた身体ゆゑ何かして欺果せて遁れ様と言くるめて居りませ中よ度々参るを彼方をも親切に致し升も惚て居り升から何事もお梅の云ふ通りに行届さ本夫ハ窮して居升から固より不實意れ女を見れば永禪和尚ハ情は牽かれて宗慈寺へ日泊を致し様に成ましたがお梅ハ年三十に成升から少しまがれて見え升が色ある花ハ匂ひ失すの聲へ殊以前媚妓を致まご身ごさい升から周旋ハ能永禪和尚の法衣を縫ひ直すと申して九月から十月の中旬まで泊り切で家ハお梅と云ふ十二才よなる娘計りで一日も歸つて来ませんで誠不都合だから藤屋七兵衛ハ腹立紛れ寺へ来て見ると臺所も誰も居りません 七「庄吉さん……留守でげすか……御免なせへ」と納所部屋へ上つと 七「開ても宜うがすか……チャ眞達さんも誰も居ない何處へお出被成……」且那様御留守でげすかお梅ハ居りませんか……納所部屋から段々裏から本堂の

方へ来るも本堂の後ろよ一寸した小座敷が御座いまを此處にお梅と二人で對坐ひ畜生ゆといふ四ツ足の置火燵でチン／＼鴨さか驚たう小鍋立の興しみ酒、肴ツと侍聴を弄るとお梅だうら七兵衛ハムツと致しまそのも道理身代を傾け此様遠國へ来て苦勞するも此久ゆゑ實は斯う云ふ淫婦とハ知なんだ不實な奴と痴癖が混上げ直ぐ飛込んで頭髪を把てト云ふ舞も往きません坊主ですうら鐵鍋の様ハ兩方の耳でも把るか鼻でも刺るか既飛込掛りましたがイヤ／＼お梅も眞逆永禪和尚ハ惚れた譯でも無らう此和尚ハ借金もあり身代の爲に致と事かど惚て遠くから差配人が雪隠へ這入と様ハエヘン／＼、咳拂ひして 七「御免なさい 永」チ、誰かと思うたら七兵衛さん此方へお這入なさい 七「ハイ、無沙汰を致しましたお梅が毎度御厄介な成まして 永「イ、ヤお前も不自由だらうが綿入物が澤山有るので着物を直すもナアあまり年暮の節季よなる困るから今の中にと云ふてナ斯う遣て精出して呉る私も今日ハ好都合よ寺に居て今も氣が勞るから一杯と云ふて居たが能い處へ來さノチ相手欲やの處へ幸ひなやア、ノチサア一杯サア此方へ這入なさい 七「ハイ……有難ふござい升お梅時々家へ歸つて呉んなノウ子供許り殘して見世を開放しよて頑是ねへお許りでハ困るだらうじやアねハカ此方様へ来て居ても能い家を空屋でハ困るうら云ふの梅「ア、だからナ最う澤山お仕事もないから私ハ一寸歸らうと思つたが、あれどもねエ綿入物も致して置うと思つて二三日お仕舞になると思つて一時ハ悠張つて居るサ嗚呼不自由だらうチ 七「不自由だつて此方様でも仕事ハ夜も能やあナ晝のうち見世を開放しよしと年も往ねエ子供を置て来て居てハ困るからナ夫に此等でハ夜も能やあナ晝のうち見世を開放しよし

夜繁仕事よしぬへナ登の家で見世番をして夜丈け此等様へ来ぬへナ我も困るからヨ
 ア、夫の然うじやア寺の夜で宜いまア結らん物じやアが一杯還りあさい 七「有難う……此
 座敷の今まで存じませんでしたたが此様な小座敷のあいと思つて居ましたへエ此頃手
 入で成程斯う云ふ處がなければ不自由でせう子大層な庭の容子が違ひましたナ 七「ア、故
 處も墓場が有から参詣人が有で墓参りの方小見えぬ様に垣根して團つこのを 七「成程左
 邊で墓場から覗かれての困りませう子旦那の薬喰ひと云ふが此の頃の大層草肉を喰ひま
 す草肉を食たつて坊様が縛られる譯でもないうち子エ當然で滋味物の喰た方が能ふ
 事子 七「ハイ實のナ時々養ひ喰じや魚喰たて何も咎はないが佛の云た事じやアから喰
 ぬ事に斯う絶て居るが喰たからつて何も其道違ふてエ譯でないのヨ 七「然でせう子是
 ら然でせう些どの精分を付なければ成ません子旦那今日御馳走成ます積りで 七「左様
 ども子 七「實の旦那願ひが有ませう御前さんとも拜借致しましたし其上此様な事を云て
 世話で替女町へ行まはが旅籠屋も有升から些どの商ひも替女町丈けマア小間物の賣まを
 行度と思ひ升のサ就くの小間物を仕込度く存じ升が資本が有ませんから拜借のあるは新つ
 てハ濟ませんの澤山入りませんマア五十兩有れば山中の温泉場へ行て商ひ少し利があ
 るば金澤を品物を仕入て来る大きい方の商ひの今迄覺えが有ますので元私ハお梅も知
 て居ませう奉公人の十四五人も使つた身の上で此女ハ今の嬰アですが若い中よ了斷違ひを

して此女が来たからと云ふ譯でも有ませんが此様も零落して斯う云ふ處へ引込み運の器い
 ので致る事なす事損をり願ふ旦那濟ま子エが御最後大手は五十兩貸て呉なさいな

○第十八席

永「貸て遣うともお前が資本するおとば貸ませう宜の宜が然う云ふ事ハ殺り商議しな
 ければならん何の様も相談しやう……サ、酒が無くあつたが折角七兵衛さんが来てのじ
 や酒があげを咄しも出来ぬお梅さん御苦勞ながら門前で肴が悪いから重箱を持て替女
 町へ往て佳肴を買て七兵衛さんハ涉馳走して……お前速くも替女町か旅籠町へ往て来て
 呉れんか速も美味ものハ近邊ハないからウ 梅「シャア往て来ませう 七「往て来ぬへ
 馳走も成るのだから……旦那へお梅も追々婆アも成りましたがあの通りの奴で子亦た私も
 万助より他ハ馴染がないので心細ふござい升お梅も此方へ来るのを樂しみに居り升且
 那可愛がつて遣て彼様を奴でも一寸泥水へ這入た奴でチツウ小利口な事をいふが人間の
 餘り怜憐でないが子モ旦那那相手によけれを差上升せが上る譯にも往きませんか子
 私しも苦勞を腹一杯爲た人間ですから旦那が私を最負ふして下されを話合ひで貴儂ハ隠居
 でも被成て子エ隠居料を取樂に出来る身の上成つたら其時にやア不自由ならぬ梅
 の仕事ふ上ツ切にして構えぬへといふ心さ 永「ソリヤ真逆他人の女房を借て僕く譯ハ
 往かんが仕事も出来る大黒女の一人も僱度が他見が悪いから不自由の詮方がさいヨ 七「モ
 ン夫もハお前さん仕事だから乾度差上升ヨ夫もお梅ハお前さんハ惚れ居り升せ子エ宗
 尊寺の旦那様ハ何も御苦勞成つた方だから遠ふあれて御頭ハ毛が有つたら何うたらうも

んぞと云ひ升せ 永「コリヤ其様を詰らぬと云ふと 七「夫れハ女郎の癖が有り升から
 浮氣も無理ハ無いのです最う酒ハ有りませんか 永「今来るが私ハ子エ酒を飲と酒運動を爲
 ちけまば往ぬから腹こな一を爲るお前見てゐいで、と藁草履を穿て神事端折をして庭へ下
 りましとが和尚様の神事端折ハ丸帯の間へ裾を上うら挟んで後ろ鉢巻をして本堂の裏の物
 置から薪割の柄の長いのを持て来てボカンノと薪を割り始めましたが恰も十月の十五日
 小春風で暖かい日でございます 七「旦那妙ナ事を被成子 永「イヤ庄吉ハ怠惰で往かぬか
 ら私ダ折る割るのさ酒を飲んと時の消化宜いヨ 七「成程是れハ宜うございませう既足で
 土を踏と養生だと云升が旦那が薪を割のですか 永「七兵衛さん薪炭を使はんか檀家から持
 て来るが炭ハ大分良ハ炭やア来て見なんせ……此方に下駄が有るが 七「何處下駄が
 永「ソレ其處に見なさい 七「成程是れハ面白い妙ナ形で旦那の姿が能い子エ何うも貴僧
 飾なし方丈様とか旦那様とか云はれる人ハ薪を割てエイなア面白いや 永「七兵衛さん先
 刻お前私ハ訝ウー云掛れたが前ハ梅とんと私と訝し事でも有ると思つて疑つて居や
 アせぬか 七「旦那モシ私が疑るも何もねへ貴僧が隠居被成ばお梅を上切りにしても宜いの
 で疾うに當人も其心が有のだから其替りよぬエ貴僧 永「ナイノ私ハお前さんのナ女房を
 買ひ切り致といと何時頼みました 七「たのまねへと、頼んても能じやアねへか吸酒して
 ハお氣ふ入とませんかエ 永「コレ私も一箇寺の住職の身の上納所坊主との違ふがエ夫ハお
 前はんがお梅さんと私ダ訝しいと云ふてハ本夫ある身で此儘ハ捨置れんが 七「捨置れん
 たつてお前さんも分りませんお梅ハお前さんと何う成つて居ると云のハ眼が有升かお知

てハ居ますが何も苦勞人の藤屋七兵衛知らぬへで居る氣遣ひハねへのさ 永「コリヤ私ハ覺
 えあいなぞ 七「エ、ヤ何う有ても 永「そんな事をした覺にないワ、と大聲を揚げて云ふよと
 早く柄の長い大割りと云ふ薪割で七兵衛ハ頭上を力任せメウーと打つと 七「ウー、
 と云つ、虚空を掴んで身を顛としたなりで、唯だ一打と致ましたは是が悪い事を致そと已
 れの罪を隠さうと思ふのを又悪事を重ねるれでござい升から微少の悪事も致すもので有ま
 せん微少の悪事でも隠さうと思つて又重ねる又其罪を隠さうと思つてハ悪事を次第ノハ
 重ねて猶亦た悪事ハ陥入り升毛筋程でも人の悪い事ハ出来ませんものでござい升永藤和尙
 ハ毒喰は皿まで舐れと死骸をゴロノ轉がして本堂の床下へ薪割と突込升のハ今ハ本公人
 が歸つて来ると成らぬと忙いで床下へ深く突入れました

第十九席

お繼と云七兵衛ハ娘ハ今年十三もあり升が孝心者でござい升阿母が居りませんに又親父
 が見にませんから吃度宗慈寺様へ行と居るので有ふと自分も何時も此寺へ参り升と和尚に
 物を買つて可愛がられるから度々参り升ので勝手存して居り升から 一親父様ハ居りま
 せんり阿母さんハ、と納所部屋を探しても居りませんすると本堂の次が開て居り升から其
 處へ来ると草履が有升から庭へ下升て 一「チャ和尚様阿母さんハ居りませんか親父様ハ、
 と屈身云升たが女の子ハ能く頭を新う横よして下を覗く様よ一て口を利もれで御坐い升
 が永藤ハ只見ると飛だ處へ来た年の往ぬが伶俐な娘コリヤ見となと思つたら物をも云ハ
 永藤和尚柄の長い薪割を頼上と選願とが人を殺さうと云ふ權事何ともどうも怖いから

出陣とある時、梅が歸つて来て、「マア旦那何様成さヨ外見悪いヨ、永「チナ能い處へ来た
 梅「モシ何ですヨお繼ハキエ」と云つて驅つて往き、たが貴僧もみつともないヨ、跣足でサ、永
 「一寸お前此處へ來ナ……お梅さんお繼が逃たりら最う是迄じゃア詮方がないサ、私も最
 早命いなしお前も同罪じやアでナア七兵衛さんのお前と私の間を知て五十兩金の無心ニツ
 三ツ云合たが知られてハ、一大事新割でお前の本夫を打殺しなせ、梅「マレマアお前さん何だ
 つてね、永「サア、殺を氣もなかつたが是も佛説で云ふ因縁じやアお前さん迷つたか
 らじやアお前の藤屋七兵衛さんを大事と思ふ餘り私の云ふ事も聽たらうがお繼が斬て来て
 床下を覗いて親父様のこと云たから見たと思ふて追驅たがら繼を欺して共に打殺し私と一處
 へ逃延て遠い處へ身を隠さるか否じやアと云へば、貳心おやアお前も打殺さなければならん、梅
 「何だつてマア、其様を事を云つてお繼のお前さんが可愛がるから繼へ見たとツてよも
 中貴僧が親父を殺したとハ氣が付くまいと思ひ升から其處がまだ子供だから分る氣遣ハ有
 ません、ま私が篤くは彼子の胸を聞きますからサ、永「じやアお前が連れて來れば宜、梅「マアお
 梅なさい、當人を連れて來て全く見たあら詮方もないが見るれば殺さなくつても宜じやア
 ないか、永「知らぬければ宜がア、お前の實の子じや有まいか、梅「三ツ三ツの時夜ら養
 育して繼子も可愛いと思つて目を掛ましたから彼の子も實母の様にするうら私も何か
 助けたりござい升ワアレマア何よでもするから待て下さいヨ、と話を爲て居る處へ寺男が
 歸つて來て、庄吉「ハ、只今歸りました、永「サ、歸つたか、男「ハ、エー彼方様へ参り升と何れ

此方から出向られましと云つて御相談致しませとソリヤハ何事も此方から出向れまして
 と簡様に去ばしと申されましと宜しく仰有ましとじやと、永「サ、手前あのナニ何へ行て
 大佛前へ行てナ常陸屋の主人に夜よあつたら一寸和尚が出て相談が有からと云て、早く行
 て、男「ハイ左様か行て参ませと、永「お梅早く先へ歸リナ、梅「ジャア私ハ先へ歸りませ、永「
 潜よ今宵忍んでお前の處へ行ぜ、梅「ソウして死骸ハ、永「シイ死骸で庭が鮮血だらけに成て
 るから泥の處ハ知れぬやう小取片付て置たナそれ、梅の下へ彼様よ入て置たから知やアせ
 ん、江戸と違つて犬ハ居す埋めるハマア跡でも宜お前の先へ歸リナ、梅「ハイ、と云ませが
 る梅ハ此處に長居もしませんのハ、腰に疵持ちや笹原走るの聲へ直門前へ出まして是か
 らお繼を探して歩行ました何が何處へ行とか頓と知れなかつたが漸く片原町の宗圓寺と云ふ
 禪宗寺から運て來ました此宗圓寺は和尚さんハ老人をござい升からお繼を可愛がり升ので
 此寺に隠れて居りましたれを連れて歸り、梅「マアお前何處へ行て居たかと思つて方々探
 たよ、繼「ハイ宗圓寺様へ行て居たのでござい升ワ、梅「何でお前逃出したのだよ、繼「あの阿
 母さん怖こと宗慈寺の和尚様が薪割を提て殺して仕舞う手怖くつて一生懸命逃たけれ
 行處がないから宗圓寺様へ逃込と、梅「お前本當じやアないよ、恐時したヨ調戲たのだサ、繼
 「イ、エ、調戲でないノ、一生懸命の顔で怖事、梅「一生懸命だつてお前を可愛がつて、
 供物や何か被下る旦那様だもの、ホンノ酒の上だヨ、繼「然う、私しやキ親父様を探しよ往
 たノ

梅「親父様へアノ御商ひも隙だからアノ金澤うら山中の温泉場の方へ商なひも往て殊に依
 たら大坂へ廻つて買出しを致度からと云て些と許り宗慈寺様から子資本を拜借されたのだヨ
 其うして買出し旁々御商なひも往とから半年や一年で帰らないかも知れないヨ其替と澤
 山仕入で以前の半分も成ればお繼ふも着物も拵らへて遣られると云てお前が可愛いから
 だ子「然う親父様が半年も歸らないと私一人を寐るノ梅「宜じやあいか私が抱て寐る
 から「嬉敷事子、アノ他處の子と異て私の幼少時うら親父様と許り一處に寐ましたワ阿
 母さんと一處に寐られるなら何時までも親父様の歸らぬいでも宜いの梅「然うかへ私と寐
 られば親父様の歸らないも嬉敷とお思ひかへ然う云ひとと誠なる前がア憫然でナ
 ニ可愛く成て子とんるふ私が嬉しいか知れないよ本當に幼稚うちから抱て寐度けれども何
 とか隔て居る中で我が抱て寝ると親父さん云られたが前の方から抱つて寝度と云ふの
 の眞に私の可愛いヨ「私も本當に嬉敷の梅「アノ前私が御膳立するから前佛様へ御
 線香を上ると親父様へイエナニ先祖様へと、お梅の憫然と思ひ升から膳立をして常と異
 て柔和な繼ふ夕飯を喫させ跡で臺所を片付け仕舞ひ梅「お繼お前表口の締りをあしヨ
 ハイ、とお繼の表口の戸締を爲様と致し升ると表口から永禪和尚が忍んで参りましヨ
 お梅「ハイ今開ます旦那でござい升かへと表口を開る永禪が這入を見るとお繼の驚
 きまして「ア、レ、と鐵切聲で既足でバヌ〜と逃出し升の「永「ア！喫驚した何しや
 イ梅「今お前さんの顔を見てお繼が逃出しこの「永「サ、左様かお繼の最前の事何じや
 死骸を隠した事の惨憺だから見たぞ有ふ梅「イ、エ見ませんヨ「永「イヤ見たじや梅「見や

アしませんヨお前さんの心配して被爲入大丈夫ですよ「永「然うかへ梅「親父様の聞升
 から親父様の山中の温泉場から上方へ往たから一二年歸らぬいと云たら私小抱つて寐られ
 いば歸らないも宜と云升親父様の何處へ往たと聞く位とから知りませんヨ「永「知らぬか
 梅「大丈夫でござい升知る氣遣ないと私の見抜たから御安心被成よ、と云ふので是から本
 夫が無から毎晩藤屋の家へ永禪和尚忍で來くの密會を致しはを眞棒が曲り升と附て居る者
 が昔な曲り升眞達と云ふ弟子坊主が曲り庄吉と云ふ寺男が曲る旅魚屋の傳次と云ふ者が此
 寺へ來て納所部屋でソロ〜天下の御禁の賭博を爲る怪からぬ事眞達ハ少しも知らぬの
 子謝られて爲ると負る「傳「眞達さん申儀じやね〜オイヤお前金を返さなくつチャア往けねへ
 眞「今無ヨ「傳「今無つチャア困るじやアねへか「眞「無ものを無理も取うて云も無理じや
 アなへか〜とら〜と事云をるナ「傳「無たつてお前我が受れば拂ひを附なければ成ねへ眞
 「今無から袈裟文庫を抵當に預ける「傳「コウ袈裟文庫杯已ちが抵當に預つても仕様がねへ眞
 「是が無てハ法事往ふも困るから是をア拂ふと預つて「傳「其様事を云て困るヨ、オイヤ
 眞達さん一寸聞ね〜ア此處へ來ねアと次の間へ連れて往きまえて「コウお前和尚も借ねへ
 眞「師匠だつて貸しな〜「傳「貸ヨ眞「イヤ此間私が一兩貸やさませと云たら何ふ入るて
 ヲ怖しい眼して白眼だよ貸せんとぞ「傳「お前往けね〜和尚の弱い足元を見られて居るぞお
 前知らぬへのか藤屋の本夫の留守で和尚の毎晩まけ込居る一箇寺に住職が女犯をア遠
 島よなる已ア二度見たぞ「眞「じやア藤屋の女房と好通事やつて居るか「傳「やつて居るヨ已
 ア見たよ「眞「夫のハヤ世も知らぬじや「傳「斯う言へば彼處へ往てお前が金を貸てと云へ

は否應をまよは貸ふやアねへか... 成程、じやア種が師匠... 借して居る... 其の... 貸と云へば直きよ三十兩位の貸ヨる前さん... 裏口の戸の筋穴から...

第二十一席

梅「誰だへ... 鳥渡開て下さいませ... 居ないア云へ... 梅「ア、旦那此方よ... 障子建て置け宜いよ... 今歸るヨ... 飛石が斯う成つたとか何と云へば...

宜くして置じや... 永「イヤ直きに歸りませ... 呉さんなさせ... 永「此奴此間三兩貸せて... 上の十兩杯と汝が身よ何で金が入る... 百の布施で坪が明かへ貸れぬウーン... 此方へ来てお梅はんとチエ何よ事もないじや...

運入まじしと「引用」云ふ聲も驚きました。族魚屋の傳次ハ斯う云ふ聲も度々山會て
馴て居るから塙錢を引擡つて逃去。庄吉も逃出し眞達も往處がないから庫裏から庭へ飛下
り物置へ這入て隠れ升と族魚屋の傳次ハ本堂へ出まじしが勝手を知らんから木魚も願き前
へのめぐる機みは鐵燈籠を笑飛し圓柱で頭を打ちまして經机の上へ尻餅をつく須彌段へ駈け
上ると大日如來が轉覆かへる御位牌ハ「マヌ」落て參るガラ／＼と云ふ騒ぎ。庄吉ハ無
闇本堂の縁の下へ這込み升傳次ハ馴れて居るから逃ました。庄吉ハ怖く様の下へ段々と
這入り升と先に誰か逃込で居るから其人の帯へ掴まる。捕縛の上手な源藏と申す者が潜つ
て入り庄吉の帯を捕へて源「サア出ろ」ト引出す。庄「コリヤハイ迎も」トモハヤ私ハ
見居たので。自分の掴へて居る帯を放せば宜い。先の人の帯を繋かりと捉へて居たから
ズル／＼と共引摺られて出るのを見ると顔色變じて血染七兵衛の死骸が出ますと云
ふ是から永禪和尚惡事露顯のゑ話し一寸一息つきまして

○ 第二十二席

お話ハ兩頭分れまじし大工町の藤屋七兵衛の宅へ毎夜參りまして永禪和尚が梅と淫樂
を居りますスルと恰も眞夜中の頃、表口の方から來ましたのハ眞達と申す納所坊主……ト
ツ／＼眞「お梅はん」一寸明てお呉なさい。梅「ハイ……旦那、眞達は來まじしヨ。永
「ア、來やアがつこか居ないてエー云へ、ナニ、イー來ぬてエー云へヨ。梅「ア、眞達さん
何の御用も御坐い升か。眞「旦那はお目掛り度いのでげすが何卒一寸和尙さん小逢して
呉なさい。梅「旦那ハア今夜ハ此方より出被成ませんヨ。眞「其な事を言ても來て居るのハ

知つてるから往ません宵もお目に掛つて此方泊つても宜いと云たのだから永「ジャア仕
方がよい明けて遣れと云ふので仕儀かないから梅が立つて裏口の雨戸を明ますると眞達
ハスット冠り神事端折をして既足で飛込で來ました。永「何じやさうしと。眞「お梅はん
跡をヒツマリ締てる呉なさい、足が泥も成てるから此雜巾で拭升からナ。永「何う爲ヨツた
じやア深更に至てまア其既足も其機ナ姿で此所へ來ると云ふ事が有かナ困つた者じやア此
所へ來い、何した。眞「和尙さん最前ナア私ア替女町で藝者買つて金が足りないから貴借
十兩貸してお呉なさいまじしとまア願ひ申しましたがあの金と云ふものハ實ハ其藝者や女
郎を買つたのでないの。實ハ其庄吉の部屋でナ賭博が始まつて居ります所へ迂濶手を出
して負た穴塞れ金で傍坐います。永「此奴惡い奴じやアア己は出家の身の上で賭博を爲ると
ハ怪しからんエー何じやア其穴塞の金を私借るとい何う云ふ心得をやア。眞「夫ハ重
悪いがナあれから歸つて庄吉の部屋で賭博して居りますと其處へ二番町の町會所から手が
這入たので。永「ソレ見ろえらい事小成た寺へ手の這入ると云ふハ此上もない恥ナ事じやア
ないか。アア何うした。眞「私も慌てナ庭の物置の中へ隠れまして薪の間に身を潜めて居り
ますると庄吉め本堂の縁の下へ逃て這ひ込を見ると先小一人隠れて居る奴が「ア、其
處も身を潜めて寝つて居ります所へ庄吉が其奴の帯へ一心よかじり付て居る所へ「ア、其
と引用聞が這入つて來て庄吉の帯を取て「ア、と引出すと庄吉が手を放せを宜し手を放
さぬで居たから先に這入た奴と一所引ずり出され來る庄吉ハ直縛られて仕舞ひ又此
れハ何者も顔を搦いと頭髮を取引起せと若し……此處ナ家の夫の七兵衛さんの死骸が出

たのシヤが 永「エへ何……死骸其まの……」と云うして出た 眞「何して出たも無い物じや
 貴僧ハ此所ナカ梅とんと深い中ニ成テ七兵衛さんが在テハ邪魔成から云ふので貴方七
 兵衛さんを殺シて椽の下へ隠シておやロウ隠ささいでも可いじやアあいかエー其うじやない
 か直ぐ庄吉ハ縛られて二番町の町會所へ送られ私ハ物置の中ニ隠れて居て見付からあか
 ったから漸う這ひ出しと皆出た跡で情つと抜出して此所まで来たのでゲスが私ガ思頭ぐ
 づしとると直ニ捕まります捕まつて打叩され見れば庄吉ハ知らぬでも私ハ貴僧が樂しん
 で居る事ハ知て居るから義理ハ濟ぬと思ひながら打れてハ痛いから實ハ師匠の永禪和尚
 ハお梅さんと悪い事を爲す居リ升夫故七兵衛さんを殺して椽の下へ隠したので坐しませ
 うと私が云たら貴僧も直ニ縛まつて行て死刑受んでハなるまいが其じやないか 永「フウイン
 眞「フウインじやない斯してお呉なさい私ハ遠い所へ身を隠し升うら旅銀をお呉なさい三十
 兩お呉なさい 永「夫リアア能く知らして呉れた眞達悪い事ハ出来ぬ物じやナ 眞「出来ぬ
 たつて殺ささいでも宜じやないが縦令殺さても墓場へでも埋れば知やアせんのだじや 眞「庄吉
 もも汝も隠し汝等ハ居ぬ折ハ理様と思つて少しの間と凌ぎに椽の下へ入ると絶や人が來
 るし汝や庄吉が絶はず側ニ居るから見られてハ成ぬと思つて據るなく床下へ入た儘にして
 置たが私の失策じやナ 眞「失策でも宜いが旅銀をお呉なさいヨ 永「旅銀だつて今此處に無
 いからナ其旅銀を隠して有る所から持て來るが死人が出たので其所へ張番でも付きやまな
 いか 眞「張番所ろろない手先の者も怖い怖いと思つて庄吉を縛つて皆附いて行て仕舞て
 も居ませんワ 永「お梅何をブルブル探へる事ハないソナニ潜然泣いたつて仕様が無い退
 往て來るから

れ七兵衛さんの布子をお貸ナ左様して何か帯でも三尺でも宜から貸ナ已れハ一寸程も金を持
 て來るから少し待てる其間もさうせ山越へ逃おけれ成ぬから草鞋ハ紐を付て付皮包で
 も宜から桐飯を拵らへて松魚節も入るからナ食物の仕度して梅干杯も詰て置け已れハ一寸
 往て來るから

○第二十三席

永禪和尚も最う是迄と諦め透電致きより外ハないと思得ましたから覗きの手拭ひで頬冠り
 を致し七兵衛の布子を着て三尺をゆめダクした股引を穿きましてドウダ氣が利いてる
 とらふと裾をからげて大工町の裏道へ出まして寺の門へ可畏く這入つて見ると一向人が
 居る様子も傍坐りませんから勝手を知つた庭傳ひは卵塔場へ廻つて自分の居間へ参り隠し
 て有ました所の金包を取出して丁度百六拾金許り有まそのを是を懐中へ入れて情を抜け出
 して來ました又 擘も三年置心と申せ譬への通りで二十五才の折も逃て來ました其時大
 刀の方ハ長くつて往ぬから幾何か賣拂つたが小刀が一本残つて居りましたから眞逆の時
 の用心よと思つて短かいの一本差して可畏く藤屋七兵衛の宅へ歸つて來ました
 ア早く急げと云ふのでお梅ハ男の様な姿も致しませんでした自分も頭ハハグルリと米屋破り
 手拭ひを巻き付て皆姿を變へましたが眞達も其の跡からスット冠リを致ま兼て袈裟文
 庫を預けて有るが是ハ又た何處へ行とも役立と思つて其文庫をヒツ存負てセツセと逃げ
 出しまし是から富山へ掛つて行ける道順あれども富山へ行までハ追分から堪へ關所が
 坐し升からぬれから道を斜に切れて立山を北見見て段々といすの宮から大森川

へ掛つて飛彈の高山越を致す心でござい升から神通川の川上の渡りを越ねる其頃の渡り
 の僅か八丈で今から考へると誠な廉い價で御坐ります無暗に騒通しは断りして五里足ら
 ぬの道で御坐い升が可畏が一生命懸命持足は笹原走ると草臥を忘れて夜通を無暗に逃げて
 恰ど大沓へ掛つて來升ると神通川の水音がドウードツと聞ゆる山から雲が吹出し升とバ
 ーと巽が額へ當りませ 永「ア、一寒い大分遅れた様子シヤナ真達はまだ來ぬかナ
 真達ヨウー」真「チーイ 永「早う來んかナア」真「來うと云たてもナアお梅はんが歩行
 けんと云ふから手を引張つたり腰を押さするので共に草臥るがナ迎もく足も腰も痛ん
 でドウモ歩行ぬぬので 永「健かりして歩行かんで往らぬシヤアないう 梅「歩行かぬシヤ
 往ぬと云たつゝお前さん休みもしないで延べ續けよ歩行くのだもの何様して歩行けや
 ませんヨ 永「シラリと夜が明け掛つて來てモウ茫やり人顔が見える様も成て來るが此の巽の
 吹ッかけでパツマリと往來の止つて居るが今も渡しが開いて渡しを渡つて此處へ來る者
 が有れば何でも三人だと何様姿を隠しても坊主頭の後ろから見れば毛の無の分るから真達
 手前ハナア三拾兩金遣るがナア此處から別れて一人で行で呉れ我れハる梅を連れ高山越
 をする積りだから 真「私も其方が宜いのをばす斯う遣つて三人で歩行くと私ハる梅こんを
 勞り貴僧ハ無暗に騒るうら歩行けやアしないドウモ私ハ草臥て往ぬ夫シヤア三十兩ハ吳ん
 なさい其方が私ハ僥倖シヤ 永「ウン然うう今金を遣るから若し渡し口の方から此方へ人
 も來ると何も成ぬから摸様を見て居て呉れ金の勘定をするからヨウ封を切て算へる間だ向
 ぶを見ろ居ろヨ 真「まだ渡しの開ヤア致ません此處の吹かけで向ふから渡つて來ヤア致

升まい、と真達が迂濶り渡し口を眼を着けて居り升ると腰に帯を居りまゝとる重ね厚の
 刀を抜より早くアスリツと肩先深く滾せ升とゴロリ横に倒れましたが真達ハ一生懸命
 ヤアお師匠さん私を殺せ氣じやあどドン／＼と死物狂ひに縋り付いて來る奴を 永「
 ヨー知れた事ちや靜かにしろ、と鳩尾の邊りをドン／＼と突き升る突かれ仰向に倒れる處
 を乗掛つと勒死を刺しました處が側へ居りましたと梅ハ驚いてペタ／＼と腰の拔と様草
 原へ坐りまして 梅「旦那 永「エー確かりセエ 梅「確かりセエと言つてお前さん酷い事
 するシヤないか真達さんを殺せなら殺すと云てお呉れなら宜いに突然で私ハ腰が抜たヨ 永「サ
 「エーモウ宜や其様な意氣地のない事で成かど真達の着物を鮮血を拭つて鞆納め 永「サ
 ア來い、と無暗に手を引渡場へ参り少しの手當を遣つて渡りを越ね此所から笹澤の原
 いぼり谷片掛湯の谷と六里半餘の道で御坐りますは是れハ本當の宿屋でない其頃ハ百姓家で
 りますから湯の谷の利助と云ふ家へ泊りました是れハ本當の宿屋でない其頃ハ百姓家で
 人を留めまして此處で 永「お梅厭でも有うけれども天窓を割と呉れエ何うも女を連れて行
 けを足が付くから、と厭がるお梅を無理無体な勸めて天窓を割らせまゝとが年ハまだ三十
 で滅相美しいお比丘様が出來ましたと當人も厭でハあらうが矢張身が怖いから致し方がない
 永「サ幸ひ下は若く居る我の無地の着物が有から是を内揚を去て着るが宜い、と云ふので
 是から永禪和尚は着物を直してお梅が着て其上に真達の持居りました文庫中より法衣
 を出して着端折を高く取つて袈裟を掛けさせ又袈裟文庫を頭陀袋の横にして頭を掛させ先
 これを宜いと云ふれを俄りよる比丘尼様が一人出來ました

○第二十四庸

永禪の精の着物も坊主天窓へ米屋被りを致し小長いのを一本帯し是れから湯の谷を出ま
 したが其れ頃百疋も出しませを何うやら斯うやら書付を拵へて呉れませすからか又寺まで往
 く處の關所の金さへ遣れを越られたもので御坐りませ漸く金を關所を越ぬかゞぞへ出て
 小豆澤杉原靴三河原と五里少く餘れ道を來て足も疲勞居ります殊も飛彈の難處が多くて
 歩行けませんから三河原の又九郎と云ふ家へ宿を取りました 永「マア此處の静かて宜い殊
 も夫婦とも誠に心切な者有るから暫らく此處に足を留め様シヤアないか我も天窓の毛の
 長く生へる迄の居なければ成らぬ此處なれば決して知れる氣遣ひの有るまい汝も割たて頭
 宜い併し此處の食ひ物が無いが是れから古河町へ往けを米も有るから米を買て又酒や味
 噌醬油などの手當をしよ 梅「夫じやア然うして呉んなさい、と云ふので多分又手當を遣
 つく米や酒醬油を買ひ遣るから是は大した客様と又九郎爺が悦びまして米を買つと
 り何うして來年迄居ても差支へない様成ました其中彼の邊の雪が倍々降て來升ると嫌
 入れ往來が止り升る事で恰も足溜りふの都合が好いと云て九月廿二日うち致して十一月
 の三日れ日まで泊つて居りましたが段々と天窓の毛も生へるが、けれども急よの生への致
 ません宿屋の亭主の氣が利居居て年々とつ居るが多分に手當をして呉るから有難い客
 だと云て何か御馳走を致度と山へ往て小鹿を一疋撃て來まして 又「チイ婆さん、又「ア
 何だへ 又「小鹿を一疋撃て來たヨ 又「何處で 又「アノ雪崩口でナ何も客様は愛想がぬ

へから温まる様は是を上度いものだ我が調理るから前味噌で溜りを拵らへと燗鍋の仕度
 をして呉んな、と是から亭主が料理をしてチヤンと膳立も出來ませたから六疊の部屋へ來
 て破れ障子を明て 又「ハイ御免 永「イヤ亭主 又「誠は續いてる寒い事で御坐います、
 なれども澤山も降ませんでマア宜う御坐い升が是から最月月末なつて度々雪が降り升る
 と道も止り升がまア、今年ハ雪が少ないので仕合を御坐り升噫日御徒然で御坐いませ
 う 永「イヤ、最う種々御世話成りまして夫此厄様が坂道を足を痛めて歩行けぬと云ふ
 こと殊小寒さの寒しするから氣の毒ながら來年の三月までの御厄介をヤア 又「ハイ有難い
 事で御坐いませ毎日婆アともハア然う中て居りませ貴方が汚泊りで汚坐い升から斯う遣
 つて米の御飯の御餘りや上酒が戴いて居られる如斯様有難い事ハ汚座いませんと云て婆ア
 も悦こんで居り升何卒なんなら二三年も御滞留被成て下されを猶宜いと存じ升ナンア此山
 家で何れも汚座いませんが鹿を一疋撃て參りまして調理しましたが何卒鹿を一杯召上つてア
 ノ何ですか比丘尼様の鹿ハ召上りませんか 永「イヤ、何じや、夫ハ、何共、マア、一体ハ食
 されぬのじやけれ共ナア旅行中の仕方がない却つて寒氣を凌ぐ爲に勤めて食せる位だから
 薬喰ハ宜いワナ 又「左様でござるか鹿ハ木實や清らかな草を好んで喰ふと申す事で鹿ハ肉
 の魚よりも深いから召上れ御婦人ハ尚御藥を御座います……チイ婆アさん何を待て來て
 ソレ是へ打込みねエソレ其鹿を燻てナ、ボツ、と燃しナ……サア召上りませ、此方の肉
 が柔かなので汚座い升からサア汚比丘様 梅「有難う存じ升マア本當に斯う長之の世話成
 升とも思ひませんでした餘り御夫婦は汚手當が宜いから還泊る氣成りました 又「何處し

ましてモウ如斯く御座る何も御役より立ちませんから何卒御座り無様な中しませし
 も家もない山の中で御座り開から外小仕方も御座りません何卒何時迄も被為入て下さるは
 仕合でも爺も一層蔭で御座り居り升ヨ……爺さん御座り手を被成ヨ 又「サア此御座り召
 上りませ夫から鍋ハ一ツしか御座りませんか取分けて上ませう 永「イヤ昔此處ハ一所ハ
 方が宜いから 又「左様をばすか種々又爺婆アの昔話も御座り開から少しの御座り酒の古
 せうと思ひまして……婆さんどうも美しい酒だノ宜からふさうだへ、エー此御座り酒の古
 河町へ往なければならぬで又醬油が好いから甘い子一是で子旦那様江戸の様な佳い味も
 造つたヌレを打込で獸肉屋の様グツグツ遣れば甘いが夫丈の事ハイヤませんどうも是で
 ハ甘くハないが是へ味を入るもあかしのから止ませう……へエハ盃を戴き升私も若
 い時分ハ随分大酒も致しましたがモウ年を取てハ直小酔ますナア夫でも毎晩酒鍋一杯
 位ハづハ遣らかし升と献酬の話しを致ながら酒宴をし居りましたが其内に段々爺
 婆さんハ微酔小成りなす 永「何といふ前方ハ何も山ハ中居る人ハ異ハ又言葉遣ハ
 も分るうら此度苦勞人の果じやだらう万事に能く届くと云ふて噂をし居る事だが生園ハ
 何處だチ 又「エー旦那様御座り成りましたから斯様事を伺い升が貴方ハ元ハ御座り家様で御
 座り升ヨエ 永「私ハ出家じゃア無い 又「へエー左様でゲスウへ貴方ハ其頭髪が段々延び升
 けれども元御出家様ではから段々か生髮被成るのでハあいかと存じませう 永「ナニ私ハ百
 姓だが旅をやる時ハハムシヤクシヤして鬱陶しいから剃るのぢや夫ハ寺へ奉公をして居る
 から天窓を剃る事ハハトント持ハぬえやア 又「へエー左様で比丘尼様の此頃御座り

成たのでゲスナ 永「エーイヤ……ナニ然う云ふ譯じやアないのぢや 又「へエ左様でげん
 成ハ尤も幼少の時分から云ふ譯じやアないが七八年跡から少く因縁有て御出家ハ被
 成やつたじや 又「へエー左様を私共の家ハ御出家様が時々泊り小成りなすつたし御座り成
 御座り爺で御座り蓋を取分けて召上り升ナ貴方も此間を遣りなすつたし御座り成
 まるがハ比丘尼様の方ハさう云ふ事をなさる所を見ませんから夫で貴方ハ御出家ハ比丘尼
 様の此頃御座りと思ひまして 永「夫ハ門前ハ小僧習ハね經を誦する寺ハ居ると自然と覺て
 御座り見たいのぢや又此方ハ御出家様やアモウ旅へ出ると經を誦する寺ハ居ると自然と覺て
 いふ壁へじやアのう 又「然うで御座りますかナ私ハ又御苦勞ハ果じやア無いかと思つて
 ノウ婆アさん 婆「お止しよヒチナドクハ間ハ無いよ鬱陶敷思召すヨ 又「アモハ互ハ昔
 ハ……旦那様私ハ子エ鳥渡氣がさすの然う云ふ事を云ひ升が此婆アを連れて私しが逃げ
 ける時ハヤア此婆アが若い時分ハの栗坊主ハ致まして子エ私しも天窓を剃るかまへ逃
 れた事有子、エー是ハ昔話ハ御座りますか子一爺さんお止しヨ話らない事を言出す
 子廣まなヨ 又「ナニイヤ旦那の御座り御座り爺婆アの昔話話したから御座り事ハ何も
 ねへじやねへり

第二十五 席

又「旦那此婆アの元根津の増田屋で小澤と云た女郎を御座りませう 婆「お座りヨ爺さん 又「
 イ、ヤナ昔ハ驚を啼きて止まらな事もある……今ハ如斯く干婆アで見ると影も有ません
 が子是れも二十三四の時分ハ中ハ鳥渡薄手の女で一寸其の氣象が宜うおした事時々

今日の噂さねへヨと部屋着や弁などを買入れてサウソウを煮込んで呉れろと云ふからソイ恍惚て遊ぶ氣になり爪弾ぐらぬの静かに遣ると云ふ中々粹な事を爲た女で御座います。お廣一ヨウ詰らない事を言つて間が悪いやね恥かしいヨ。又恥かしいも無いものどモウ恥かしいの通り過て居るワ。永「オヤ左様かへ何でも然うシヤらうと思つた中々前苦勞人の果であければあの取廻しの出来ぬと思つたア、左様かへ一旦泥水も這入た事がなければナア。梅「オヤ然うカキ長く御厄介も成て見ると私にどうも御當地の方シヤないを實の思つて居ました然うで座い升か不思議なものどチー増田屋も、どうも妙だチ、然うチ「イウモ妙さの夫シヤアお前何かへ江戸の者かへ。又「イ、エ私ハチー旦那様富山稻荷町の加賀屋平六と云ふ荒物御用で江戸のふ前さん下谷茅町の富山様のお屋敷が座い升から出雲様へ御機嫌伺ひに参りまして下谷に宿を取つて居る時見物か〜根津へ往て引張られて登樓との線さチ一所が此奴中々手管が有つて歸さぬからトウ〜夫が前さん。騷樂の初りでひさいぬ遺ひましたけれども此奴の氣象が宜いものだから借金どらけで漸々年季が増して長いが私の機嫌者でも女房もして呉れないかと云ひ升から本當かと云ふと本當と云ふ升から借金が有ての迎も往ぬから連れて逃げ様と無分別にも相談をしたのが丁度三十七の時すよ夫から前さん連れて逃げたんだ國よ女房子が有れば無茶苦茶此奴を引張つて逃げましたが年季の長い借金有から退手の掛るのを恐れて逃げて〜飛州路へ掛つても間に合ぬから此奴を棄つ坊主として私も坊主も成つて〜飛州路へ逃げて〜此のヨ「永「フワン然うかへ。又「夫が前さん面白い話して〜ウモ高山にも近瀬居られ

あいで段々廻つて落合の渡しを越えて此三河原と云ふ此所の家へ泊つたのが不思議の縁で博座い升先又九郎と云ふ夫婦が有て夫が私に泊つて翌日立たうかと思ふと寒さの時分でお有が誠々天の罰で人が高い給金を出して抱へて居る女郎を引渡つて逃げた盗賊の罪と云ふ女房子を置放しました罰が一所も報つて来て私ハ女房の發の字を受けた見え〜痲病も痔も来ましたこれ又二度めの半床病も来て發足が出來ませんで此所の爺婆も厄介も成つて居りますと先の又九郎夫婦が誠々深切二人の看病をして呉れ其深切が有難いと思つて稍半年も此所も居りまして漸く二人の病氣が癒ると此所の爺婆が煩らひ付て迎も助からぬへ橋も成と其時私共を枕邊へ喚んで誠々不思議な縁を前の方へ長く泊つと下すつたが私ハモウ迎も助からぬへドウモ前の方へ駈落者の様だが段々月日も経つと跡から退手も掛らぬ様子何所か是ら指して行所が有升かと云ふから私共何所も行所ないが〜越後の方へでも行かうと思ふと云ふと夫なら澤山も有ません金の僅かだが此後の山の焚木の家物だから山の藪を取ても夫婦が食つて行くに澤山ある又此所を斯すまば此所で動物が獲れる冬の凌ぎの所〜とヌッパリ教へて猪私の家よの身寄もなし婆アも就くまで居るから私が命のない後ハお前さん私を親と思つて香花を手向け此所ナ家の絶ぬ様よ〜お吳なさらんかと云ふ頼みの遺言をし〜死んだのデすらと婆ア様も父續いて看病疲れかして病氣もなり其死ぬ前も何分頼むと言つて死んだから前々披露もして有たので近邊の者も皆得心して爺さん婆さんを身送つたからツイ其儘〜〜つたり二代目又九郎夫婦も成たの事博座い升貴方拾を今年で二十三年も成が住む都と云ふ聲の響りも寂を食つて此所よ

新う遣つて潜んで居升が子一随分苦勞を致しましたよ。永「然うか子一苦勞の果ぢやから萬
 一届く譯ぢやのうアモお神さんと眞實思ひ合ての中じやから斯うして此山の中に住で居る
 との情合だ子。又「情合だつて婆アさんも私も厭だつたが外に行所がなし詮方がないから居
 たので。永「シヤア富山の稻荷町で良い商人で有たらうが女房子の傍前此所も居ることを
 知らぬかへ此飛彈への富山の方の者が減多よ來ないから知らぬぢやなア。又「エー夫れハ
 私家が家を出てうら行衛が知れぬと云て本妻が心配して死なり夫から續いて家の潰れる様
 譯で悴が一人ありましたが其悴平太郎と云ふ者の仕様はなかつてどうく。お寺様か何かへ
 買ひれて仕舞つたと云ふ事をばんやと聞て居りましたが妙事去年富山の薬屋ソレも前
 さん返魂丹を賣る清兵衛さんと云ふ人が家へ來て一晩泊つて段々話を聞きました所が私共
 の悴ハ妙ナ譯で子一良い出家に成れさうで御座いますして越中の國高岡大工町にある宗慈
 寺と云ふ寺の納所へ成て立派ナ衣を來て居るさうで。永「ハア夫れハ妙な事だナア大工町の
 宗慈寺と云ふハ眞言寺シヤアないか。又「ハイ眞言寺で。永「其所も前の悴が出家を遂ぐ居
 るのかへ。又「ハイ名ハ何と云たナア婆アさんお前知つて居るかア、サウヨ……イ、ヤ眞
 達と云ふ名の納所で御座います。永「左様か、とシロリと横眼でお梅と顔を見合した許り
 ギンク、胸よこたへて流石の惡徒永禪和尚も是の飛た所へ泊つたと思ました。

○ 第二十六席

又「夫で婆アさんの云ふれハ前の事をあやまつて尋ねて行たら宜からうと云ひ升が何だ
 が今更親子とも云ひ難いと云ふれハ女房子を打遣て女郎を連れて断落する身は落度本人が

和尚さんとか納所とか云のれる身の上成たからと云て今私が親父だと云ても顔を知り升
 まいし殊も本人の出家で堅固な所へ向たか氣が詰つて往けませぬれども其話を聞いて
 一度尋ねて行度とハ思つて心掛てハ居り升が縱令是で死にましよ所が旦那様何で座い升
 まア其れ本人が坊主で御座い升うら死だと云ふ事を風の便りに聞いて木當の親と思へば死
 だ後でも悪いとハ思ひ升まいから御經ハ一遍位かハ讀て呉るかと思つて夫を樂みよ致して
 居る譯で。永「成程然うかへ。又「ヘエ……誠ハ長ッ話を致しまして。婆「本當も退屈様で
 此方へお出でヨウ。又「宜ヤナ。婆「誠ハ御邪魔さまで……サア此方へお出でヨウ又飲たけ
 ばお呑りナ、と手を曳いてお澤と云ふ婆アさんが父九郎を連せて部屋へ参りました跡も
 「旦那様。永「エー梅「モウ此所も居られないからお立ヨ早くお立ヨ。永「發足と云ふも
 直立つ譯ハ往かん。梅「往かぬたつてお前さん可畏ぢやア無いか此所ハ劍の中よ退入て
 居る様ナ心持がして眞達の親父と云ふ事が知きてハ。永「コレハ黙止てる明日直ハ發足と
 既に考付まやアしないかと腰に疵シヤ此間も頼んで置たが廣瀬の追分を越える手形を梅
 らへて買つて急にハ立ぬ振をしよ二三日の中ハ惜ツと發足とし徳ぢやア無いか。梅「何かし
 てお呉んなさい私の怖いから、と其晩ハ寐ましよ翌朝ハ成升と金を遣て曉着て何か斯か
 廣瀬の追分を越える手形を梅らへて買ひ明日立うか明後日ハ仕儀かと狐鼠と仕度をして
 居り升ると毎日申の刻下りに成ましよ時を下つて参つとのハ越中富山の反魂丹を賣る藥屋
 さん、富山の藥屋さんハ風呂敷包を背負のよ結目を堅之縛りませんで兩肩の脇へ一寸挟み

まして先をパツリと垂て居り升懐中よの七刀をのんで居る位ぬ心掛て怪し者ら来るを
 負て居る包を放し置く懐中の七刀を引抜と云ふ事だ始終山國を歩行くから油断のまかせん
 よく旅馴れて居る者を御座り升一休飛弾の醫師と藥屋が少あいので藥が能く賣れますから
 寒のも厭はずなされ下りて來まじろ 藥屋清「ヤア誘免なさいませ 又「ヤア是の珍ら敷
 去年泊りの清兵衛さんがお出被成たサア奥へお通り被成いイヤ何も能く 清「誠小是のは
 や去年の來ましてエー長へ事御厄介子成居りみしたイヤもう二度と再び山坂を越えて斯う
 云ふ所への家をまよまいと思ふて居りみすが又懲と二人連れで來ました……ヤア婆様此前の
 御厄介よ成みしたモウ逆も〜此山の下りの樂だ登りと云うら足も腫もめきり〜と歌
 してヤアアウモ草臥ままた迎も〜 又「今夜の御泊りでせう 清「イヤ然うでない今日の
 責て落合まで行積で 又「婆さん今日の落合まで被入てエが仕方が無いなうマア今夜の
 泊りなさいナ此頃ハ米が有升夫は良酒も有升から御泊りなさいお宿分をー升りら 清「イ
 ヤ然うの往きませぬ何でも彼でも落合まで未だ日も高いから行積りで 又「夫の仕方が無い
 ナア然うでせうがマア一杯飲で 清「イヤヤヤ 又「其様事を云とすまコレ婆アさん早く一杯
 ……婆さん出被成いしました去年の誠ハ御早くをしたつて昨宵もお噂をして居りました
 又「清兵衛さん去年の泊りの時ハ私の悴ハ高岡の大江町の宗慈寺に云ふ寺に這入る弟子よ成
 て居ると云ふ貴方の話有たが眞確と云ふ悴ハ健康で居り升かナ 清「イヤ何も是やはや
 夫を言う〜と思つて來さがる前さん餘り草臥たので忘れて仕舞さがるイヤ眞確さんの事
 歌マのえらい事なりました 又「へ〜どうか成みし〜か 清「イヤもうらちのつかあ

事よ成みしたと云ふ譯ハ前橋宗慈寺の永禪和尚と云ふ者のえらい惡徒で有みそト前町の
 藤屋七兵衛と云ふ荒物屋が有て其女房れお梅と云ふの惡へ事を爲たと思ひなさせ永禪
 和尚とお梅と姦通をして居りみして七兵衛が在てハ邪魔小成と云て夫の七兵衛を薪割で打
 殺し本堂の椽の下へ隠した所が惡へ事ハ出來ぬものヤナア眞棒が狂ひ曲たからマア寺男
 から前さんの子ぢやア有るけれども眞達さんまでも惡へ事に染りまして夫から前橋此
 頃寺で賭博を爲まそと 又「賭博をフウリン〜成程 清「所が前橋二番町の小川橋から探
 索が眉て居るもんぢやから直ま手が這入て手が這入と寺男の庄吉と云ふ者が前橋本堂の
 床下へ逃げた所が先ハ嘘 七兵衛の死骸が隠して在るのを死骸の知らい寺男の庄吉が
 先へ誰か逃込で床下小此通りチャ〜と罪て居りみそと思つて帯の所へ鏡生大事お前橋
 取付て居りみすとサするとお前橋出ろ〜と云ふので役人が來る庄吉の帯を取て引を引
 すと藤屋の夫ハ死骸が出たと思ひなさせサア是ハウサンな寺もある博賭ごころでない床
 下から死骸が出る所を見ると屹度調へを爲さければ成ぬト御役所まで參れと忽地キリ〜
 ツと縛めらとて庄吉が引れみしたトもう事が破れろと思つて永禪和尚が藤屋の女房の手を
 取て逃た時ハ前橋の湯子息の眞達殿も一所に逃たよ相違ないのぢやが夫ハ此世の生涯で
 大奮の渡えを越ゆる渡口の所よイヤ最うハヤ見影もない姿で誠ハ情ない夫ハ〜逆も〜
 向とも云ひ様のあい姿ハ斬殺されて居りみしたと 又「エー悴が切殺されて 清「イヤもう何
 とも 又「誰が殺しました

清「跡で小川邊が段々御調へよ成た所が、石名奉行様だから永禪和尚が膳屋の女房を梅を
 連れ逃げる時の事を知て居るから是を生しう置いて、露顯する本を云て斬て逃けたと違
 ひ無いと云ふので足を付とが今よ知れぬと云ひますワ 又「夫はア何うも有難う存じます
 お前さんごの通り掛りで寄て下さらなければ私ハ本が殺された事も知らず仕舞は夫夫ハ
 何時れ事で御座いましたか 清「エーとエーッツイ先月十九日の晩方で有ましたか 又「十九
 日の明方…其うとハ知りませんでノウア婆さん昨宵餘り寒いからと云つて山へ鹿を打
 往まして漸く能い塩梅よ一疋の小鹿を打てン縛つて鐵砲で撞いで來ましたとが其親鹿で有
 りませう峯にウロウロ哀れを聲をまう鳴まいて小鹿を探して居る容子で其時親鹿も打ふと
 思ひましたは何だか蟲が知らして子を探し暗いて居るから哀れを事と思つて打すは歸つて
 來ましたが四ツ足でせへもア、遣つて子を打ればウロウロして獵人の傍までも山を下つ
 て探しま來るのよ人間の身の上でたつた一人の悴を置て通ると云ふハア、若い時分ハ無分
 別な事とつた…ノウア婆さん…昨宵婆アと話しをして居りましたが誠よ有難う御座い
 ます死ありました日知れまそれと線香の一本も上げ念佛の一遍も唱へられま有難う御
 座い升ア、誠よ何も…何と云つたつて一人の子よも會へず貴方が去年お出下すつてお話
 ですから雪でも解たら尋ねて行くと存て婆アさんとも然う申して居りました 清「エー私
 シヤもう直に歸せませう誠よ飛た事を耳に入てお氣の毒と思ひ升が言ぬでも成ませんか
 ち詮方なしよ知らせやしと譯で能くマア念佛ども唱へてお遣りなされ私シヤ歸り升から
 又「じやア歸りよハ乾度お寄成て 清「ハハ乾度寄つて御厄介よ成り升ヨ左様おれを 婆ア

清「大けは御坊を致しました左様ならと 又「お前さん山手
 の方へ依つて出ささいませんと道が惡う御座い升よ崩れ掛つた所が有升から何時も云う
 通りよチーアノ寄生木の出た大樹れ方に就てお出被成いヨ…ア、まア思ひ掛なく清兵衛
 様がお出被成つて一晩お泊り申して緩くり話を聞度がお急ぎを見て、イもう影も見
 なく成たノウア婆アさん悴の殺されたのハ十九日の明方大沓の浦口だつとノウア婆さん 婆ア
 アイ 又「奥よ泊つて居る客人ハ已れ所へ幾日に泊つたつてナ 婆「彼の先月月の恰も二十日
 の晩よ泊りました 又「二十日…エー十九日ハ明方川を渡つて湯の谷泊りを被仰つたが
 丁度二十日己の所へお泊りと…婆アさんあの御比丘様の名ハお梅と云ふ名じやないか
 婆「何ぞか惠梅様…と云つたりまたお梅を呼び被仰る事も有るヨ 又「ハ、ア、何でも此
 頃頭髪を剃た比丘様よ違ひない毛の生へるまで足溜り小己れ家へ泊つて居るのだ彼奴等二
 人が永禪和尚よお梅かも知れねへせノウア婆アさん 婆「夫ア何とも云へないヨ 又「酒をつ
 け 婆「酒をつけたつてお前へ 又「宜うらつけろ表口の戸締りをスッパリして仕舞へ一す
 明られねへ様よしん張をかつて仕舞ひナ酒をつけれ 婆「酒をつけたつてお前さん無理酒
 を飲んで往けぬいヨ無理酒ハ身体の中らから悴が死だからつてもやけ酒ハ往けぬいヨ
 又「モウ死だつても構ふものか身体の中つたつてヨイ、に成て打倒れて死だつて何も此
 の世よ思ひ置く事ハない然うじやないかお前ハ己が死だつて一生食ふよ困る様な事ハねへ
 うら心配し被成る己ハモウ何も此の世の中よ樂しとねへうら酒をつけれ、と燗鍋で酒を
 温めかんの出來るも待ないから茶碗をグイグイと五六杯引うれて年ハ五十九で御座い升が

中々きかない爺父欄向掛つた鐵炮を下して玉込を致しましたから、爺さん前向をす
るのだへ又鹿でも打に往のうへ、又「エー黙つて居る婆さん己れハ奥へ行て掛合てナ向所ま
でも彼奴等二人は白状させる積りだがキヤアとかパーとか云つて逃げめへ物でもねへ若し
逃げ掛つたら手前ハ此細口うら駈出して落合の渡しへ知らせろ此方ハ山手だから逃げる
氣遣ひハないエー心配するナ、と山刀を帯して片手ハ鐵砲を提げ窮ひ足で來て紙障子
手を掛けまして情ツと明けて永禪和尚とる梅の居ります所の部屋へ參つて是れから掛合
成りませ所ろ一寸一息つきまして

敵討札所の靈驗上之巻終

又九郎ハ年五十九で御坐い升が中々強氣の爺で鐵砲の筒口を押し握つて情つと破れ障子を
明ると此方ハ狐鼠ノ荷拵へを致して居る處へ這入つて來ましたから悟られまいと荷を脇
へ片付乍ら永「誰シヤ」又「ヘイ爺で御坐い升」永「チャ是ハノ」サア此方へ這入りなさい
未だ寐すかいノウ」又「まだ貴方がたも寐で御坐いませんか」永「寐様と思つても寒うて寐
らまぬいでまだ起て居ました」又「ヘイ早速お聞申し度い事が有て參りましたが貴方がたの
お國ハ何地で御坐い升か」永「ウーン何じや私ハ大聖寺の者シヤ」又「大聖寺へエー大聖寺
シヤア有升まい貴方がたハ越中の高岡のお人で御坐いませうがナ」永「ウーン否私ハ大聖寺
ハ藥師堂の尼様のお供をして來た者シヤア何で高岡の者とお前が疑つて云ひ被成か」又「お
隠し被成ても往ねへ貴方ハ高岡の大工町宗慈寺と云ふ眞言寺の和尚様で永禪さんと被仰る
たらう子」永「何を言ふれじや其様な話らぬ事を夫ハ覺はない何う云ふ事で私を其う云ふか
知らぬけきども夫ハ人違ひだらう」又「隠しても往ません……其方の惠梅様と云ふハ比丘尼
様ハ前町の藤屋と云ふ荒物屋の七兵衛さんのお内儀で梅さんと云ひませうナ」永「何を結
らぬ事飛だ間違ひで……お前の事をアナイを事を云ふ梅」マア何もチーどう云ふマアその
間違だか知れませんが、けれども子其んを何も其私共ハ尼れ身の上で居る者を荒物屋ハ女
房あんて、ア何云ふ何り子……お前さん」永「サア何云ふ譯で其様な事をサア誰か其様事を
言たへ父「隠シチャア」往けねへ貴方ハ一箇寺住職の身の上で此ハ梅さんと姦通をする而已
さら本夫の七兵衛が邪魔成と云ので斬割で打殺して梅の下へ隠した事が博奕の毘羅か

ら露れて居られぬので、梅さんの手を引いて逃げて来た。時、私の悴の真達と何處でも別れなすつた。永「コレ何を云ふ、何を云ふの。シャ思ひ掛ない事を云て真達を、夫れ丸で人違ひ。シャア無いか。何を云ふ。譯シヤ真達さんと云ふの。昨宵話に聞か私に知りませぬが。又「善惚チヤア往けねへ。前さん研白地たつて種が上つて居るから。役も立ねへ。真達を連れて逃げて足手纏ひだから。神通川の上大沓の渡口で悴を殺して逃たら逃たを言て仕舞なせ。ヘナイ。隠したつても役も立ねへ。永「何も是の思ひがけない事を言て。ア其様な事を言て何もドヤ何云ふ。理屈で其様な事を云ふか。……此う悪梅様。梅「本當に何とつて其様な事を云ひ升か。私共の身も覺ねれない事を言掛られて。何も何云ふ譯で、其何だう、夫が實よ、それへ。前へ何云ふ譯で。又「何云ふ譯だつても往りねへ。種が上つて居るから。隠さずよ云へ。云へ。云へ。詮方がねへ。前方二人をフン縛つて。落合の役所へ引ても。白状させずには置ぬへ。ア云のねへ。か云のあければ了簡が有る。ナイ云のねへ。か、と云のれ。此此の永禪和尚も是の悪が顯れた。ワイ最う是迄と思つて。爺イ婆を切殺して逃るより外はない。遺中差の胴鐵を膝の元へ引寄せて。半身構へ。成て坐り居合で。抜く了簡柄へ手をかけ。身構る爺も持て。参つた。鐵砲をグンと片手に膝に側へ引寄せて。鐵機よ手を掛けて。スハと云とら。打果さうと云ふので。斯う身構ました。互ひは龍虎の争ひと云ふか。呼吸の止る様よ。ウーンと脱合まじ。時、側へ居る。梅の顔は。探へく。少しも口を利く事も出来ませぬ。永禪の不圖。後ろより火繩は光るのを見て、此奴飛道具を持って来たと思ふから。スーンと飛掛り。抜打し。胸に當り。へ切付ました。

○ 第廿九章

又「ヤア斬キアがつたナ、と鐵機を引いて。ドソと打つ。永禪和尚の身をかりすと。運の宜い奴。玉の肩を反れて。アツツと破壁を打貫て。落る。又九郎の已れ斬りアがつた。なと空鐵砲を持て。永禪和尚に打て掛るを引ッ外。去て。永「猪口才な事を成るな、と肩先深く斬下り。ばした。疵へて居るし。刃物の長し。又九郎横倒れ。又九郎のを見て。婆アハ逃出さうと。上總戸へ手を掛ました。たが餘り。締りを嚴重にして。御坐いまして。鎖棒を取つ。鎖輪を外す間も。御坐いませぬ。處へ永禪の逃られ。と溜らぬと思ひました。から土間へ。駈下りて。後から一刀婆ア。ふ激せ掛、横倒れ。よなる處を踏掛つて。止息を差たが。梅の疊の上へ。俯伏し。成つ。聲も出ませぬ。ブルブル。保へ。居りました。處へ見相變て。鮮血だらけの胴鐵を引提て。上つて。來ました。永「ア、危い事。シヤツツと。梅「ハイ。永「確かりせ。梅「確かりせ。へ。つて。私ハ。背から逃標を思つてる。處に鐵砲の音を聞て。今度許りの本當に死だ。様ナ心持。成ました。ヨ。永「毒喰ハ。皿まで。取れ。だ。止を得ぬ。エー。悪い事ハ出来ぬもの。シャ。怖いもの。を。ア。無いう。梅「本當に怖い事。チ。永「此處。泊つたのが。何して。足が附いたか。モウ。此處。長う。足を留めて。居る事ハ。出来ぬ。瀧瀬の。追分。を。越ゆる。丈の。手形が。有る。から。差支へない。が。今夜。此處を。逃げて。仕舞う。と。死骸ハ。有し。夜中。山路。越られ。ない。から。今夜。ハ。此處。よ。寐やう。梅「怖く。つて。寐られ。や。ア。し。ませぬ。永「今夜。ハ。誰も。尋ね。て。來。ヤ。ア。せん。から。梅「死骸ハ。何。を。る。の。永「宜。ワ、と。又。九郎。夫婦。の。死骸。を。ゴ。ロ。ノ。土間。へ。轉が。して。鐵砲。を持。つて。來。て。爺。婆。ア。の。死骸。を。椽。の。下。へ。入。ま。し。と。が。能く。死骸。を。椽。の。下。へ。入。る。奴。で。是。から。流血。の。掃除。を。致。し。ツ。ウ。ノ。敷。残り。の。酒。を。飲。で。永。禪。和。尚。の。屍。を。か。い。と。寐。ま。し。と。が。實。小。悪。魔。ナ。奴。で。有。ま。す。翌。朝。身。仕。度。を。して。何。喚。ぬ。顔。で。此。處。を。出。ま。し。た。が。出。と。急。ぎ。ま。し。て。

四ノ下

宜遠梅に廣瀬の波を越て最う是迄來ば宜と思ふと倍々雪の降る候に向つて行事も出来ま
せんから人知れぬ千鳥村と云處へ參つて水無瀬の神社の片傍の隠れ家に身を潜め翌年雪も
解け二月の月末は越後地へ掛つて來ます芦屋より平湯驛へ出で大峠を越し信州松本へ出ま
して稻荷山より野尻夫より越後の國關川へ出て高田を横に見て岡田村より水澤へ出まして
川口と云ふ處は僥倖無住の藥師堂が有と云ふので是へ惠梅比丘尼を入れた又市が寺男も成
つて居て御經を教へて居る其中に尼の段々覺て居る經を讀様なるを村方から麥或ひは稗
などを持て來て呉るから貰ふ物を喰つて漸く此所へ身を潜めて居るうち又市も頭髪が生へ
る寺男の姿もあり片方坊主馴れて出家らしく口もきく様になし此處は正掛三年の間居り
升うら誰有つて知る者の御坐いません爰も話の兩頭に分れまして寛政九年八月十日の事
を御坐い升が信州水内郡白鳥村と申す處が御坐い升是へ飯山の在で山村で御坐い升大瀬村
と云ふ處に不動様が有まして其側は掛茶屋が有て是へ腰を掛く居りませ武士の少し羊羹色
で有升が黒れ羽織を着る大小を差て紺足袋の中抜の草履を穿き煙草を吞で居り升を
此前を通り升る娘は年頃二十一二と御坐い升が色のクツキり白い山家へ似合ぬ人柄の能い
女で誠々柔和やかなの姿で前を通つて頻りに不動様を拜みる百度を踏で居り升、武士の餘念
もなく彼の娘の姿を見居り升が百度だらち中々長う御坐い升自分も用が有のよ出掛け
ようとも致しませんでる百度の濟むまで娘が止まり來たをするのを見居り升を彼方へ掉此方へ
掉か百度の歩行く通り左右へ頭を廻して遂に仕舞まで見居りました武士「ア、美しい
ナ、婆ア今彼の不動様へる百度を上て居た彼の女の何處の女だのウ

第三十席

五ノ下

婆「ハイ彼的ア何で御坐りやすヨ彼の白鳥村の者を御坐りやをぞ能く問が有と參詣し
一參りやすが彼的ア信心者で御坐りやして何でも廿八日よハ暴風雨が有つても欠さないで
御坐りやすしてナアヒヤア 武士「宜い女だ子 婆「ヒヤア此處等よハア澤山へは女で御坐
りやすよヒヤア 武士「何處の何者の娘かナ 婆「何だか知しやしねへが武士の娘で有やすが
涙人してヒヤア此の山村へ引込だ者シヤアハと評判致して居りやすヒヤア 武士「ハア左様か
ノウ 男「一寸く旦那へ、と後ろへ腰を掛く居ました俠の男木綿の小辨慶の單衣も廣袖の
半天を被つて居る年三十五六の色の淺黒い氣の利の男でござい升 武士「イヤお前ハナニと
んと心付ぬを何處へ居でかナ 男「此衝立の後ろに有合物で一杯やつ居り升へ一碌な物の
有ませんが此家の婆アさんの奇麗好で芋を煮ても牛房を煮ても中々加減が上手でケス夫ふ
奇麗好だから喰心が宜う御坐い升 武士「ハ、ア貴公何だ子言葉の容子でハ江戸御出生の儀
子だ子 男「ヘイ旦那も江戸兒の様な御言葉遣ひでケス子 武士「久しく山國へ來て居て田舎
者も成ました 男「今の娘を美しい女だと賞讃ておいで被成たが彼れハ白鳥村の何で元ハ武
士だと云ひ升が何云ふ譯か伯父が有と云ふので姉弟で伯父の世話も成て居升が弟ハ十六七
で御坐い升が色の白い好い男で女の様で御坐い升夫で姉弟で遣つて居るれだが彼位好のハ澤
山とハ有ませんナ 武士「ハ、ア貴公ハ御存知か 男「ヘイ私ハ白鳥村の廣瀬親分の厄介で
傳次と申す元ハ魚屋で御坐い升が江戸を喰詰て如斯處へ這入て山の背を歩行廻り極りが悪
くつて成ねへダ金が出來ませんシヤア江戸へ歸へる事も出來ません身の上で 武士「ハ、ア

六ノ下

左様かへシヤア彼の婦人を御存知で傳「へい朝晩顔を見合升から子 武士「ア一左様かへ貴
 公些と遊びに來て被下らんかへ私の桑永村だから傳「シヤア隣り村で造作ア御坐いません
 武士「拙者も江戸ッ兒で、江戸府内で産れた者小逢ふと江戸ッ兒ハ了簡が小さいせへか懐
 かしくて親類の様な心持が爲まをヨ傳「其うです變な言葉の奴許り居升から貴方の様ナ方
 逢ふと氣丈夫でげず閑暇で遊んで居り升から何時でも参り升 武士「何だへ拙者宅へ是を
 御縁としてナ拙者ハ柳田典藏と申す武者だが何やら斯うやら村方の兒童を相手よして暮
 して居り升傳「何で、何方の御藩でげす典「ナニ元ハ神田橋近邊に居た者だ櫻井監物の用
 人役をも勤めた者の悴だが放蕩を致して府内にも居られぬで斯う云ふ處へ参る位だから
 別して野暮な事ハ言ハぬが兎も角も一緒に、直き近い細川を渡ると直ぐと傳「御一緒に参
 りませう、とズウ〜數奴でヒヨコ〜付て來ました典「サア此方へ這入なさい……庄吉
 今御客様をお連申したから庄「ハイ大層お早く御歸りで今日ハ此様は御早く御歸りのある
 まいと思つて居ました……サア此方等へ御客様御這入をさい傳「へい是ハ何も御免なさい
 ……チャ庄吉さんか庄「ヤ是ア傳次さんかイ、ヤア是ハ何とや何も傳「何また思ひ掛けねへ
 庄「何時も變も無うて目出度有ますト傳「イヤア何うも、何とも彼とも、お前にも逢度
 かつとが彼時から行端がねへので典「庄吉手前ハ馴染か

○第三十一席

庄「イヤ馴染だつて互ひに打明て持つちもない事を爲した身の上で……マア無事で宜いを傳
 「何時此地へ來たのだへ庄「何時といふとお前も此方へ何時來たであつたすと傳「イヤ何

も私もからきし形ハねへので仕様が無いから來とんだ……庄「旦那妙なもので是ハ本當
 眞の友達で錢が無けりやア貸て遣らう己らが持合せが有と貸うと云ふ中では有ますと傳「聞
 分此人の部屋で煙ぶつた事も有のでねへ典「左様かへ兎も角も是から有合物で何か調
 てと云つて一杯始めると傳次ハ改めて手を突き傳「私ア旅魚屋の傳次と申す者で何か御最
 賃も被成て……大層机など有升子典「ア、田舎の様々やらんでハ成んから出來ハい
 村方の子供などを集めてナ夫に以前少しばかり易學を學んだからナ賣卜をやる夫又と
 少しハ藥屋の様な事も心得て居るから醫師の眞似もするテ傳「へい手習の師匠ハ醫師よ
 賣卜ハ藥屋でケスカ是ハ大丈夫でケスどうも結構な御住居ですナ典「田舎でハ種々な事を
 遣らぬでハ往かぬ荒物屋ハ荒物はかりと極てハ往かぬ傳「妙でケスナ典「サア御酌を致
 ませう傳「へい……有難う典「蔬菜などが召上れ傳「頂戴致し升……庄吉さん久し振で酌を
 して呉ねへ何も懐かしいナア何して來とかなア庄「本當と思ひ掛なくエヤハヤ恥かしいナ
 何してお前も此處へ來たか傳「旦那可笑事が有は有ものサ此人ハ子越中の高岡で宗慈寺と
 云ふ寺に居りました寺男で子賭博をして可笑事が有やした……今でハ過去つた事だが彼ハ
 何あつたエ庄「何とつて何よも彼も酷い目遣たせ私ア様下下隠れて然うしてお前と
 死んだと知らぬから先逃た奴が隠れて居ると思ふとから其奴の帯を掴んでチャ〜と
 隠れて居るとサア出るサア出るサア出る云ふので帯を取て引かざるからスル〜と引摺れて出る
 とアノ一件が出たので傳「旦那モウ過去つたから構はねへが此人ハ死人と知らず帯を掴
 まつて出ると死人が出たので遠くボクが割て縛られて往きました庄「スト彼から其帯を

七ノ下

八ノ下

で永禪和尚が逃げたので逃げる時藤屋の女房と奥達を連れて逃げたのが奥達を途中で見殺して逃げたので奥達も死んで口なしで罪を負ふて仕舞ひ此方小川様情深い役人で調へも軽く成て出る事が出たが一端人殺しと賭博騒ぎが出来たから誰あつて一緒飯イ喰者もないから是非迎も仕様がぬへと色々考へ何處か外へ行くと少許の銀を貰ふて流れて此處へ来て不思議な縁で今旦那の厄介になつて居るや傳「旦那…寺の坊主が前町荒物屋の女房と好通をいやアがつて亭主を殺して堂の縁の下へ死人を隠して置たのサ處で其死人は此奴が掴まつと出ると云ふ可笑話したが彼の時我の一生懸命本堂へ逃げつたが本堂の様子が分らぬへから木魚は蹴躓いてガラ／＼音がしたので驚いて跡から返断るのかと思つたが然うじやアないので又逃げ様とをるもガラ／＼と位牌が轉がると落る騒ぎ何う彼か逃げましたがいまだに經机の角で向脛を打た疵の裏さ寒さよの痛くつて成らぬへ庄一掃かねへ事有となう傳「夫が此處を逢ふと思はなかつたが互ひも苦勞人の果だ典「時改まつて貴公は御頼み申し度い事が有が、今の婦人の主はないのか傳「エー主はないタツタ姉弟二人で弟は十六七で美い男サ此弟の姉さん孝行姉の弟孝行で二人ざりてを典「親のないのか傳「ないので、伯父さんの厄介も成て機を織たり糸を繰たり彼の位お稼ぐ者有ませんが柔和て子人柄が宜いやになまッ世辭を云ふのでないからあれが宜う御座い升典「拙者も當地へ来て何やら斯うやら斯うやつて家を持て聊か田畑を持機も成て村方でも向うか居り着て呉ると云ふのど永住致さよの妻がなけりア成ぬが貴公今の婦人は手藝が有なれば話しをして拙者の處に妻に致度が何だろ話して貴公が媒

介人までも橋渡ししよ成て貰ひ受けて呉れれば多分は出る出来んが貴公も二十金進上致さ其金を遣つて仕舞て往ぬけれも貴公も左様して居るより村外れで荒物店でも出して一軒の主も成て女房子でも持つ様になれば親類交際も永く往き通ひも出来るから傳「有難うが私も斯う遣て愚頭付て居ても仕様がぬへから女房も遣去し致さまたが、是の下谷の上野町小居り升が音信も致しませんので向ふでも諦めて今更の團子を拵へて遣つて居る相ですが其う成て有難い力に成て下されば二十兩藏かゝつても宜い併し苦しい處だから下されば貰ひます夫の有難い私が話せば造作なく出来るも相違有ませんから行つて話しをさせよう典「早いが宜いが傳「エ！ナ直往ませう、と廢止を宜い直し柳田典藏の處を出て是から娘れ處へ掛合に参る是が間違の端緒此娘お山の前申し上た白鳥山平の娘を弟の山之助と申して親山平の十六年前から行衛知れやな母の亡くなつて此白鳥村の伯父の世話も成て居る升が是から姉弟が大難に遣ます話し一寸一息つきまして

第三十二席

九ノ下
おやま山之助の姉弟の白鳥山平が江戸詰に成まじらうら行衛知れずより母の心配致して病死致した時のおやまが八歳山之助が三歳でござり升から年の往きません二人の子供の家滅れる譯でないが白鳥村の伯父多右衛門が引取伯父の手許で十五ヶ年の間だ養育を受て成人致しまして姉は二十二才弟は十七で小造りな華者な男でまご前髪たちを御座い升姉も島田を居り升が堅い氣象で姉弟して瓢と親父様がお歸りれ有と時伺とすに元服まで済むいと云ふのを二十二で大島田も結て居ると申す眞實正しい者で互ひも姉弟が力と思ひ



合ひまして山之助ハ馬を牽き或ひハ人の牛を牽ぎ来て山歩行をして鹿菜を積んで歸る姉ハ織物をしとり糸を繰たりして間隙ハ御座いませんが少し閑が有れば大瀬村の不働様へ親父の生死行衛が知れ升様ふと信心して姉弟二人中陸間敷して暮して居りませ門口から旅魚屋の傳次がヒヨコノ頓首をして傳「ハイ御免なさい山の助「ハイお出なさい傳「今日の結好な天氣で山「ハイ何方様で傳「ハイ私も久敷此方等に居り升から顔ハ知つて居りませ私ハ廣藏親分の處に居る傳次と云ふ魚屋で御座い升が親分の厄介者で山「ヘエいさうで御座い升か傳「ドウモ感心でテす姉さんを大事に被成つて御中が宜つて實に姉弟で斯う陸間敷行く家ハねへてエ村中の評判で御座い升よヘエ御免なさいヨ「さアお掛けなさい何か御用を御座い升か傳「ヘ一姉さんアチ一蕪から棒ヲ斯事申してハ極りテ怒り御座い升が頼まれとから前さんの胸丈を聞に來ましたがアノ大瀬の不働様へ御百度を踏よ被爲入い升子「やま「ハイ傳「今日御百度を踏で歸ん被成時張張の居酒屋をソレ御存じでげしやう子詰らねへ物を賣る彼處に子腰を掛て居た黒の羽織を着て大小を差し色の淺黒い月額の生けた八柄の宜い旦那を御覽被成たカ「やま「ハイ私ハ何と急ぎましたから薩張存じません傳「彼の方ハ元御使番を勤めた櫻井監物の家來で柳田典藏と被仰る大した者當時ハ桑名川村へ來て手習の師匠で醫師をして夫れで賣卜をする三點張と立派ナ家入遣入つて居て是がら退く田地でも買ふと云ふれたが一人の身上をハ不自由勝だから傳次女房を持度が百姓の娘でハ否だが聞けと何か此方の姉さんハ元武士の御嬢さんで今ハ御運が悪くつて山家へ遣入つて居る容子だが彼の姉さんを嫁買へ度ハ傳次も前ハ同じ村に居るなら相

談して貰ひてエと頼まませよ一とが其うすれば弟御嬢ハ一緒に引取り先方で世話をしやうと云ふ前さんも弟様も仕合せで此一もねへ結好を前さんの爲を思つて私ハ相談來たんどが早速お話しも成る様善ハ急げだが何でげせう「誠ハ御深切ハ有難う御座い升が私しの身の上ハ伯父お任して居り升から伯父さへ得心なれば私しハ何でも宜いので傳「ヘエー伯父さん彼の多右衛門さんでげすかヘエー然うで堅い方を長い茶の羽織を着て居る御人か子時達ませアノ伯父さんさへ得心なれば宜しいノ、宜しい、左様なら直に伯父の處へ行まして傳「ヘ一御免なさい多「ハイ何處から、サア此方へ傳「ヘエ私ハ廣藏親分の處に居り升傳次でエ不調法者で多「左様で御ざりやすか御近處に居りましても碌ハ御言葉も交しませんで何分不調法者で此後とも御心安く願ひませ傳「ヘエ私も何分御心易く願ひます就てハ子今姉さんの處へ往つたのをげすが……貴方ハハ姪御様で有升子多「ヘエおやまお傳「ヘ一姪御様逢うお話しをした處が伯父さんさへ得心なれを宜いと云ふ嫁の口が出來たので誠に良口で桑名川村の柳田典藏と云ふ大した立派ナ武士だが運が悪いと云ひおがら此地へ來て田地や何かも餘程有り又た是から段々殖さうと云ふ賣卜ハ手習の師匠ハ醫師の三點張と云ふ此位ハ結構な事ハ有ませんが彼處へ御遣被成てハ何うで、弟御がるみ引取と云ふので随分御爲もある處を御座い升が多「おやまが貴方ハ御挨拶すよ伯父が得心なれば構はぬと言ましと傳「エー言ひませと多「何も自分でハ御断りが仕憎いから大概の事ハ私の處へ行って相談爲く呉れとまづ遁辭言升曰彼のハナア兎てもハ無駄で御座いませ傳「ヘエ一何と云ふ譯で

二十ノ下 第三十三席

多「イエ十六年跡は親父が行衛知れぬ成て今も死だか生たか知れぬ音も沙汰もねへで御座い升が万一親父が存生で歸つと時の親父も一言の話もしないで盤を取らぬ嫁も行って濟ぬと云て姉弟で彼遺元服もせず居り升位で御座りやすから何所から何と音でも目で御座りやす盤でも取て遣り度の中左様言たつて聽アしませんから傳「夫シヤア親父が歸らぬへでの相談の出来ませんろ多「へエ親父が歸れば直に相談が出来升が歸らぬうち駄目で御座りやしてヒヤア傳「失望ました手左様なら、と茫然歸つて來て傳「へエ往て來ました典「イヤモウ侍て居ました傳「へエ典「何も手前ハ辨舌が宜し何かの調子ダ宜いから先方で得心するなら多分ハ御禮の出来ぬが直にウソと得心の上からハ夫禮の儀とがまア當座十金差上る積り目録包よして茲に有の傳「へエ一からどうも仕様がねへチ願ふ何も往けません幾何金を包んども仕様がねへあれ典「何云ふ譯を傳「何たつて往せん願ふ咄し無一だねへ親父が十六年跡に行衛知れぬ成さから親父は歸らぬうちハ嫁もも行ぬ盤も取らぬ元服もしねへ親父は聽ねへうちよしてハ濟ぬてエ彼れハ變り者もケエ往けませんよへ典「往ぬと云ふのか傳「エ一往ねへと云ふのをケケ典「左様か仕様がな

二十ノ下

心得をチャンと金も包を置たが仕方がない是迄の事だ傳「から何も仕様がねへ變り者もびそナお前さんの云ふ通り白髪の島田のいなからねへ何も仕様がな手何も典「貴公私の名前を先方へ言ますまいチエ傳「私の左様言ましたヨ柳田典「様と云ふ手習の師匠も易を立て斯とスツカリ喧列立たの典「夫ハ困り升子姓名を打明して呉れそハ愧入るシヤアないか傳「マツテ餘程受けが宜からうと思つて弁べたの典「夫れハ往かぬ先方と縁談が調ふか否を聞て詳しとハ云こんる然るべき爲になる家位の手を云つてお前行くかはい参り升とばんやりも言たらソツソツ姓名を打明て言ても宜が極らぬうちから姓名を打明てハ困り升ナ何も最う少し何か事柄の解る御方かと思つたら存外考へがあかつた……宜敷く實ハ荒物屋の見世も貴公に出させ様と思つて二三十金の資本を入れた簡を媒介親と願まんければ成ぬと思ひまして……最う少し万事に届く方と思つたが冒頭ハ姓名を明されてハ困り升子實ハ恥入る傳「然う怒つたつて往ません旦那旦那、怒つチャ往けません斯う仕儀シヤア御座いませんか種々私も路々考へたが私の云ふ事を聽て然うお前さん言て仕舞てハ往けねへアレサ夫な事をアソソ怒つたつて往させん何も氣を長く爲ければ成ねへ彼娘ハ不動様へ又お参りよ來ませう其處まで貴方を見ねへだから先刻私が話しを聽て見ると斯う云ふ黒の羽織を着てコレの方を御覽かと言たら急いだから存知ませんと云ふから彼娘に貴方を見せ度いや貴方チ、二十二まで獨身を居るのだから十九や二十まで盛男欲やを居るけれども貴方をスーッととして美男と知らず矢張村落の百姓と思つて居るから願だ云ふふも知れねへからお前さんの色白黒の羽織を着て、夫が見せ度まだ貴人

よ運ないからと娘が達さへそれば直だから御達なさい典「達ふたつて夫程否てエ者を達
よの往ません傳「夫の工夫で前さんと二人で例の茶見世へ行って旨くもねへ碌を物のねへ
が美酒を持って行て一杯遣つて御立のうちに居るれた子夫で娘が百度を踏で歸る所を引張
込でる前さんがチャウ世辭を言つて一杯飲でる呉れと盃をさして調子の好い事を云ふと
娘「ア、程れ宜い人さア、云ふ方から嫁入行度とオーと斯う胸も浮んだ時よ手を採て斯う
酔た紛れ遣つ仕舞が宜い此奴の宜い是の早い夫と、伯父さん掛合ふからイケ無いが當
人よ貴方を見せ度へ是が私の急度往うと思つ居る典「だけれども何かどうも赤面の至り
だナ無暗は舞人を引張込で宜敷かねへ

第三十 四 席

傳「宜敷たつて前さんの様ナ人の近村よ有ヤアしませんでしたから前さんを見せ度い鳥渡
斯う大修飾も着物も着替髪も奇麗よして子典「何も何だか宜敷かねへ旨く往かねへ傳「宜
敷てエ是の諱ねへ明日遣りませう、と悪い奴も有ものを柳田典蔵も自惚が強いから典「
チャア往ませう、と翌日の彼の大滝村へ怪しい黒の羽織を引掛て菟張の茶屋へ來て酒肴
を並べ御立れ影で傳次が様子を窺つて居るとおやまが參つて頻るる百度を踏み取急いで
らうとせると飛出して傳「姉さんやま「ハイ傳「此間はやま「ハイ此間ハ誠ハ傳「此間話
した子柳田の旦那が彼處で一杯飲で居るが一寸前さん小逢度を云てやま「有難う御座い
升が私ハ急ぎ升から傳「御急でせうが其様を等ちやア往けねへ此間子旦那にお頼れ
事ハ往けねへと云ふと手前ハ行きもしねエで座と云て疑ぐられ居る結らねへから前

さん嫌でも一寸上つて傳次さん此間ハ早うでしたと云へを宜い然うそれば私が行てエ
のが通じるのだから彼處へ往て一寸私ハ挨拶する文やま「往けませんヨ傳「往けねへてエ
私が困るから野暮な事を云はす御出なさい、と無理ハ引摺込だから仕方なしヒヨロ
と膝を崩ら上り口へ手を突と髻を持って押し升から厭々上つて來るを柳田典蔵ハ嬉し
い顔でハッ赤くなりお世辭を云ふも間が惡かつたか反身も成て無闇に扇子を額を叩き
口も利すに扇子を振り廻しどりしてキョトとして變な壁梅で有升から傳「旦那旦那、お
運を申じまえた此方へ愚頭して居るの往ねへ姉さん御挨拶をサ典「是ハ何も誠
ま、何か御信心参りよお出の處を簡様ある處へ御招立申して甚だ御迷惑ハ次第で有うと申
した處が何か御迷惑でも御酒を飲ぬなれば御膳でも上度と思つ一寸是へ何も恐入ます一
寸只御酒の往ますまいからチャア御膳を、と云ふのを傳次の聞て傳「往けねへ其んな事
許り云つて困るなめかして居て一寸姉さん盃を酌を致し升からやま「何を被成
お前さん方ハ何を被成たで御座い升へ私の様な馬鹿で御座い升けれも貴郎方ハ何も
親近よ成つと事もない方が無理遣ハ此様な處へ手を持って否が通者を引張込で人の用の坊
を酒を飲ぬなんテ私ハ酒は相手をやる様な宿屋や料理茶屋の女との違ひます餘り
人を馬鹿よしと事を被升た傳「旦那、腹を立ちやア往ねへ...姉さん然う言ちやアから何
も仕様ねへ夫ハ然うだが子姉さん人の云ふ事を聞被成よ此旦那ハ早く言へる前さん
ハ惚たんと旦那、黙止て其方小居させへ前さん口を出しちやア往けねへ黙止て
天窓を叩いてお屏でなさい...姉さん人ハ云ふ事を聞よ此間伯父さんへ掛合とのだ宜か

へ處が夫れの親父が居ねへので元服もせすふ待て居ると云ふ話したから其事を柳田さん
私話と夫の御尤だてんで今日も柳田さんか前さんを招き呉れと云たので八のい全
私の下簡で旦那の誠な感心な娘だと云ふのでどうも十六年も音信をしない親父を待て夫程
までよ、元服もせすも思ふその實も孝行な事だから嫁が厭なら宜敷が實も其志探に傳次
情惚るじやアねべかと斯う云ふ旦那の心持で誠な尤だから其う云ふ事ならせめと云ふ
一ツも献酬えて親近な成度と云ふので決て引張返ん何斯うする云ふ譯じやないが
前さんが得心して嫁なれば弟も引取て世話をする云ふ實も仕合だからウツと言たら
宜じやアないやア何をウツと云ふので御坐い升へ私の身の上伯父も傳「夫の伯父
さんよ剛た遠辭を伯父さんよ侍付ると云ふ事知つてるやま「知て居るなれば何も被仰
もんも宜じやア有りせんか私も今の浪人して居り升げれども矢張以前少く御状
持を頂きました者れ娘を御坐います貴郎がの御酒のふ相手を致し燃な譯者や旅稼の婿
嫁さぬ道ひます餘りせせを失禮を知らぬ馬鹿く敷いふ方だ

第三十五席

傳「オレ夫シヤア姉さん、おが手法困るやどうも然うお前さん言つて仕舞てハ……何と
云ひ機が有と云ふたものな何も困るや左様ぢやアやま「左様ぢやアつと考がへて御覽な
さける前さん頼まれたな知らないが此處へ改爲入る方ハ大小を差した立派な武家様で
ハの娘を知りもれぬ無理遣よ引搦込んで飲もしない者よ蓋をさしと如何成彼
方ハ本當に馬鹿と云て私も武士の家へ生れたが武家の夫様亂暴な馬鹿な擧助ハ爲せ

ません餘り馬鹿な事でも呆れて愛相も願相も盡果た鐵面皮人だ典「ナニ鐵面皮と何だ馬鹿
や、敷と何だ否なら否で宜敷無理な嫁も買はふと云ふ譯でないや手前がやま「鐵面皮
から鐵面皮と申しまじし袖を汚放しなさいと袖を引張のをやま「お放しなさいと立上
りながら振切つて百度の箆を引と投付ると柳田典藏の面部へ中つたから痛う御坐います
ハツと面を押へて居るうち戸外へ駈出ししました典「傳次と傳「ヘエー何も彼の通りで
任權さねへ典「だらうら住ねと云ふふ無理遣よ連れ出して内なら仕様も無いが斯う云
ふ茶見世へ參つと恥を興へるとの怪しからん事傳「お前さん其う怒つチャア往ねへ典「貴
様の居る我が家へ来るナ傳「夫様な事を言ひ往ねへ旦那腹を立てハ往けません婆アが
娘の跡を退けたが居ないから最う仕方がないら前さん腹を立チャア往けません底の處女
も兼令向ふか惚て居ても氣障だヨお廢ヨと振拂ふのハ娘ツ子の情で殊ハ二十二まで何だ
つて島田で居る様な變り者だから氣短かよ何斯うと云ふなアから最う色をしと事もない様
で極りが悪いぢやア有りませんか何でも氣長に往なれば往けません旦那斯ういませう典
「モウ手前云ふ事ハ聽うぬ種やれ事を云て箆を投付て傳「箆なんぢの何でも無い此前張
倒されて溝へ落た人も有るさうで子一斯うなさい娘を何かえてソと他處へ連れて行ふ典「
連れて行て何来る傳「何すると云つてマアお聞なさい何處かへ夜運出して酷い様だ私
一人で行ねへギアヤア言はねへ様は猿轡でも箱と庄吉と二人で葉山へ擔いで行て芝
原の奇麗な人の來ねへ處でサテ姉さんは惚て居る者を能く此間ハ大浦村で恥を掻いた
や殿まで仕舞ふと云ふのが可敷くつて殺せねへ若し云ふ事を聽ぬ時ハ武士が立ぬぞか男

が立ぬと云て何をも女房に成て呉れ否てエーは仕方がねへから腕を押へても抱て来るも
 何うだ夫より心得して知れない様よと云へば命が惜いから造作アねへ夫から家へ連れて
 来て得心づくで前さん抱て寐チャア向て来宜がすか夫で娘の方で屹度惚れる子一初め
 男の味を覺て真にあア云ふ人あらと先方うら惚れく伯父さん嫁入遣つてヨウと先方から
 言ふヨウ一ウー然う旨く往かへ傳一夫の大丈夫往き升ともと夫から容子を窺つて居る
 八月の十五日の白鳥村の鎮守の祭禮で今日屹度来る相違ない向かして擔さ出さうと
 から附て居ると晝の中用が有から物見遊山も出ず不動様へ参りに行丈で夜ふ入て晝
 之助と二人で祭禮とら見て来よう云て来ると突然竹藪の茂みから駈出して来くおや
 まを擔ぎ上げてドン／＼林の小路へ駈上りまゝた事で御坐いますから山之助の盜賊
 揚帯……と呼で既足で追驅ると山之助の典蔵は胸をドンと突れままたから田の中へ
 仰向し轉がり落ち升其中でドン／＼と路を走ると葉廣山まで擔いで駈上りまゝ折ら雨がサ
 ア／＼と降出して来ましたが其中をドン／＼滑る路を漸くと登りまして芝原へおやまを
 引摺て三人で取巻くトマン秋の空の曇り易く忽地雲ハ晴れ樹の間を漏れる月影三人の
 顔を睨み詰るおやまは口惜から身を擧げて芝原へ這倒れました

傳一ウー姑さん泣たつて往ねへ、オ、前本當に今日斯遣て擔上とのハ酷い、盜賊引と
 思ふたらうが然うでない實ハ旦那が又だ惚れたんだか前が駈をボント投付て否だと云つた
 のハ向うも堅い娘だ感心とあんが女を女房買のあいで、我が一とん口を出したのが恥だ

○第三十六席

から親父さんの歸つた時の様も説をする……擔上たのハ酷いが話しを爲たいうらの
 事だが是から柳田の旦那の處へ行つて……ナニ泊めやアしさい鳥渡彼處で酒の相手をして
 ナ、否てへは仕方がねへ私の中へ這入つて旦那は濟ねへ、濟ねへら二人で腕を押へ足を
 押へて居ても否でも應でも旦那は思ひを遂させなくチャアならねへ然うシャアねへか左儀
 先れはる前得心ゆくでなく疵を付られて他へ縁付事も出来ねへ夫よりハウンと云て得心さ
 へすれば弟御も仕合旦那も斯な舉動を爲度ハねへが前ガア一云ふ氣性だから仕方がね
 へヨウ後生と、ヨウ夫で連れて来れたんだ私困るからウンと云て、ヨウ後生だからウンと
 云て呉んねへやま「サア殺して仕舞ひ何も怖敷悪徒と徒黨を去て山へ連れて来て強淫を
 する氣か舌を噛も人も肌身を汚されるものかサア殺して仕舞へ傳「夫じやア仕舞がねへ
 ナイ其様ナ事を……前が否だと云へば手足を押へても強姦せやま「強姦は舌を噛切て典
 ナニ傳「旦那腹を立ての往ねへナイ姉さん前谷だと云へば仕方がない無理遣手
 取り升るとやま「何を、放せエと手は嘴付き升から傳「往けねへ此女兒、ナイ庄吉さん、遣
 て仕舞へと仰向し押轉し庄吉の足を押へるやま「ヒ一殺して仕舞へ殺せ、と云ふ聲ハ綱
 を響きまます、後ろの三峯堂の中雨止をして居る行脚の旅僧今一人ハ供と見えて昔の深い
 三道笠は廻ハし合羽で柄前へ皮を巻いと鐵棒への銅金よ手を掛け千草木綿の股引よ甲掛草
 鞋穿を旅馴た委明荷を脇に置き一人ハ鼠の頭陀を頼り掛け白い脚半に甲掛草鞋男「ア、氣
 の毒ナ助け遣らんと飛出まましたのハ前申し上りました水司又市の永禪和尚彼の川口の藥
 師堂よ寺男も成て居ると尼様よ寺男が御經を教へて居るあれは寺男が本當の坊主の鼻で有

身を段々高くなり薄氣味が悪いから川口を去て越後から倉下道を出て山越をして信濃路へ掛つて葉廣山の根方を通り掛ると村雨に逢ひ少々の間雨止と三峯堂へ這入て居ると雨も止みましたから仕度をして出様と思ふ處へ、人殺し、殺して仕舞へと云ふ女の鎌切り聲ゆゑッカ、と躍出まゑと又市の物をも言ひき娘の腕を押へて居ました傳次の襟髪を取て引倒し足を押へて居た庄吉の顔を土足で蹴倒し升すると柳田典蔵の驚ろき何者だと長いのを引抜て振上る此方も透さず道中差をスラリと引抜き又「何者とい何々悪い奴等だ軟弱女を連れて来て汝等が何か強姦と云ふのかヒイ」泣く者を不憚る奴だ旅だから許してやるサツ」と行け免や角う云へば承知致さぬがサツ」と行け傳「ア、痛へ突然無間と獄アがつて飛ぶ奴だ手前の譯を知るゆへに已等の句引でも何でもねへ此女兒よの譯が有る旦那に濟ねへ廉が有から此方が爲になる様も納得させ様と思つて居るのよキキ云やアおるから嚇しよ押へるのどお前の何も知らねへで何も没緊要所へ邪魔アまやアがるナ旅の者だおぬかまやアがる手前へと月影で顔を見合ると互ひも見忘れさせぬ又市も傳次も見た横サと思ふと庄吉の宗慈寺に舊米奉公して居りましたから永禪和尚の顔を能く知て居り升から庄「エー」貴方の高間の永禪様永「庄吉か庄「永禪様か、此時の又市も驚ろきまして此奴等の吾身上を知て居る上からの助けて置て二人は難儀と思ひ永禪和尚と聲を掛られるや否や持つて居る刀で庄吉の肩へ深く切り付ける庄吉のキヤアと云て倒れる傳次の驚ろいて逃げ掛る處を袈裟掛に切りましたからバツバツ倒れると柳田典蔵の残念に思ひ此亂暴人と自分此亂暴人を忘れ振冠つて切掛る又市の受損し踏取機轉し又市が小聲を

とすつて頭へ少一切込れたが又市の覺への腕前返る刀と典蔵が脇の邊へ刺込みました典蔵の驚ろき抜刀を持あがらバツバツ山から駈下りました傳次の面部へ痛を受けながら太エ奴だ人殺し、と又市の足へ蹴り付處を又「放せエ、ウインと絶息を刺しましたから其絶息の絶ましたと永「惠梅、梅「ハイ何くりしましたヨ又「宜かへ梅「ア、怖い又「お前の喉押つたので有らうれう新様な奴を助けて置て村方を騒がし何様なる事を爲るかも知れぬから土地の助を殺したのだや「有難う御坐いませ命の親で御坐い升、と手を合せておやまの後へ下る是ハ又市が刃物を持って居り升から氣味が悪いから後へ退る又「何も心配の無いからと鮮血を拭つて鞘に納め額の疵へ願陀の中より膏藥を出し貼付け後ろ鉢巻をして又「サア是から家迄送らうとおやまの手を取て白鳥村へ歸らうとす途中中山之助が歸つて伯父に知らせたから村方の百姓二十人許りお山の行術を探し來る者途中で出逢ひ是から家まで送り届けると云ふ是が縁よ成て惠梅と水司又市の二人がおやま山之助の家へ來て永く足を留める是が又一つ仇討し成升る端緒を御坐い升

第三十席

おやまの危い處を助けて水司又市と惠梅比丘尼の彼のおやまの家まで送つて參る途中で出會はまた者ハ舍弟山之助の村方の者でございませ山「姉ハ何處へ擔れて參つたかと伯父多右衛門と大きよ心配し尋ら參る處ろで貴方が助けて下さつたか有難ふ存升皆も大悦びでござい升又「實ハ斯う云ふ譯で圖らずも通り掛つて御助け申したのが實ハ危険事でも有つ併しお怪我もなく幸ひの事で有ましたとが就ての私も止を得ず二人迄殺しよから其届を出

さなければ成まいが多「ハイ」屈けましたも御心配の御座いませぬ重き悪い事は有奴でござい升からと是から名主へ屈けました處が素より悪人と云ふ事ハ村方で大抵圓熟の付て居ります魚屋の傳次なまやまを強姦めやうとした隙があり直に桑名川村へ調べ入るると典蔵の家を急入逐電致しました故此事ハ山村で有り事なく済ましてござ此方ハ急ぐ旅でないから疵の癒る間逗留し下さいと云れや山之助二人暮しの田舎住居又市ハ幸ひよして膏藥を貼て此家へ逗留して居る間ハ惠梅比丘尼ハ諸方へ齋に頼まされて参り種々因縁断しを致しまして梅「私も因縁あつて尼よあり誠よ私の若い時分種々の苦勞も有たが只今でハ佛道に入つて胸の雲も晴て實ハ世の中を氣樂よ渡る是が極樂と申し升杯と尤もらし事を云と田舎の百姓衆ハ此方へ何卒被爲入て私の親類が三里先ハ有升が是へもと往てお布施を買ひ諸方へ参つてお齋を致し升とお布施の外ハ割麥或ハ採粉杯を買つておやまれば家の物を喫て居るから賃ハ何時までも置て買ひ度と思つて居り升うちま疵も癒り或日惠梅比丘尼ハ山之助と隣村まで参りまして又市ハ疵口の膏藥を貼替へまして白布を巻てハ居り升ハ疵も大方癒れたから酒好と云ふ事を知り膳立をして種々の肴を拵らへましてやま「モレ貴方一杯お酒を煩ましたから召上りませぬか醫師様も少し位召上つても障りハ成あいなと教仰升から一口召上りまして又「イヤ誠ハ有難う大した事でハなま一体酒が好で旅をするよハ一杯飲せ氣が晴るから旅店で一杯出せば尼様ハ隠して内所で飲事もある是ハ有難うござい」前ハア姉弟衆二人おが親睦様なさる未明うちから起て糸を繰たり機を織たり又た山之助さんの牛馬を牽て姉弟で新う稼ぐ人の餘り見た事がない賢い感心の事

じややま「イ、エもう二人おが未だ子供のやうでござい升彼が年も往ませぬから屈きません只私を大事にして呉れ升日「ア、遣て御城下へ参りまして荷を置て参ります又彼地から参る物の此地へ積で参り升て少々の貨錢を載き升「ハイ能く稼升が、恰飯山ハ御城下へ参りお酒の美のを買て参りましてお肴ハ何よも御坐いませぬが召上つて被下されし又「イヤ此處等の山村でも御城下近いか便利でござい升一杯頂戴致しませしやう是ハハイ御馳走な成升「一杯酌で下さい、四五日酒を止て居たので酔ハせんかやま「何卒召上つてと痛くどつと素より好きな酒又市二三杯飲うち少し止て居たから顔ハ色ハボーと出ましたけえども櫻色と云ふ譯にハ往きませぬ栗皮茶の様なる色ハ成ましが段々酔が廻り升と元來都控奸智の曲者おやまハ年齢二十二でございが升艶麗盛りで莞爾と笑ひ升顔を餘念なく見て居りましたが又「ア、見惚升子ハ前さんの其品の良ハあつちやナア「ア、最う充分な辨ましたモシおやまさん「やま「ハイ又「アノ何で、此先に伯父さんが有が彼れは貴種の眞實の伯父さんかへやま「ハイ私しの眞實の伯父で御坐います又「前兩親ハあいのかへやま「ハイ兩親ハアない様ナもので御坐います母ハ亡なりましたが親父ハ私しの幼少時分行衛知れず成ましてから未だ音信が御坐いませぬ死だぞ存じまして出た日を命日として居り升が万一して存命で歸つて來たら姉弟で信心して居り升位で又「ハア左様かへ前さんまだ御良人ハ持たずやま「ハイ又「二十二に成て良人を持てよ此、どうも、花なら半開と云ふ處ハどうも露を含める處を拵う遣て霞ハ實ハ惜敷ものシヤア子前さん「ハイ又「お前マア子一杯飲被成ナやま「イ、エ私しの御酒ハ少しも載きませぬ又「

其様な事言んでも宜い私のシヤアは依て半分位ぬ飲て呉れても宜シヤないか

第三十八席

やま「い、エ牛分杯と被仰つて困り升る厭ふれば何卒其處へお戻し遊ばして又「おやま
さん私の最う是四十近い年をしてお前の様ナ若い女子を想ふても是ハ無駄と知て居る
が眞實お前の様ナ柔和、標致と云ひ其どうも進退なり口の利權と云ひ別シヤアて、心よ想
ふて居るも私のまア今迄口は出して言やせぬが如何だへ私の眞實お前も惚れたせ、とるや
まの手を取てツツと引寄る掛りなしたから堅い娘で驚ろきまして振拂つて跡へアと下り
まして呆れて又市の顔を見て居りました又「怖がつて逃んでも宜じやないか やま「アア
ア貴方御申戯許を被仰つて困り升ヨ 又「困る譯はない宜シヤアないかエー只た一度でも
お前私の云ふ事を聴いて呉れたらお前の爲への何様も情合を竭さうと思ふて居る やま
「御申戯で居坐いませう貴方の様ナ方が私しの様ナ者も夫様な事を被仰つても私ハ本當
で思ひません 又「何故私ハ年を取て申戯や胡談に前さん此様な事を言掛る事はない
前さん實ハ疾から眞と思ふても言出し兼て料たが酔た紛れと言ふシヤアないけれども前
さん私の只た一度で諦らめ升せ やま「貴方本當に被仰るのですか 又「本當とつて今迄如何
にも麗娘シヤアと思ふても色氣も何も出やアせぬがけれども朝夕膏藥を貼替へて呉れる其
軟弱い手で頼を斯う押つて呉れ升る其どうも手當私ハ惚れたサア最う斯う言出したら取
も外聞もないシヤア誰も居らぬハ好機會シヤア只た一度で諦めるうら やま「アア呆れら
支様で夫で折角の貴方深切も水の泡に成升伯父も被様お方ない類ハ紙を穿るまで

命掛で助けて下まつたから其恩を忘れてハ濃ないヨと伯父もヤ一升から私しも有難い
方と存て居り升て實は屈らぬながらも世話致を升心得て居座い升其様な事を被仰つ
て下さると實は腹が立たせ 又「腹が立升と言つて恩義掛る譯ではないがけれども宜
ヤアないか私も命掛で彼處へ這入て助け私が通り掛らぬ時ハ惡者も押へ付られて否でも
でも三人の爲め環境が付シヤアないか夫を助け上たから彼處で強姦れと思ふて素性の
知れ私ハ一度位云ふ事を聴ても宜シヤアないか 又「貴方ハ内儀が有なさるで
御座いませんか 又「女房の有やせん やま「アア惠梅様の貴方の内儀で居坐います此丘尼
様に許せんから貴方の側へハ参りません 又「比丘だつて彼れハ女房でない彼れハ山口
の薬師堂に居た時は私の寺男も這入たのを やま「夫でも夜分ハ一處に居座なるシヤア居
いませんか 又「傍寮なるたつて彼奴が薬師堂に居た時私の奉公も這入らぬが彼奴も未だ老
朽る年でもないうら肌寒よつて此夜着の中へ這入て寐ろと云ふので 據ろなく這入て寐
が婆ア比丘尼シヤアから厭でくならんお前がウンと言て呉れば惠梅も別れて私の此處の
家へ這入らぬらぎ男もあり牛馬を牽り山で盞をこなし田畑へ出て鋤取ても随分お前
れ手助け爲様シヤアないか然うして置て下さい 又「夫様な事を被仰つて困り升夫で
明日も直にお發足遊ばして下さい私ハ御思になつて方ゆゑ大事と思ふから手厚く
世話をするのよ居坐い升夫を思ふ掛るされば私しも随分貴方へ恩報じと思つて出来な
がらも看病して居る心得て居坐い升ハイ 又「お前の様も堅く出られて面白くない其様な
事を云いずよと無理遣りよ手を取て引寄ります此時ハ腹が立升から殿打て遣度と思ふが

命を助けられた恩義が有から餘り無下よししても愛想盡一氣の毒と存じましておやまわ
向し様かともぢくし居り升

第三十九席

又市の増長して無理に引付け髷だらけの頬片をおやまは探り付様とする處へ歸つて来たの
惠梅は山之助で御坐い升が山之助の氣の毒だから後へ下る惠梅の腹を立て鹿菜を持って二三
度積けり毆打たらうら膽を潰して又「イヤ歸つるか」梅「臆は呆れ仕舞ておやま様腹が
立まじらう私も憫致ました山之助様も臆はる氣の毒で……お前さん向ををるのよ
おやま様もサ「臆は困つたナア今御馳走が出たれで一抔遣た處ツイ酔て其酒を飲ば若
い女子に申儀をするの酒飲の當然だ突然打チャアがつて擲んでも宜ワ「おやまさん御腹
も立ましたらうが堪忍して被下いヨ私少し云事が有升から彼方へ行て居て被下い餘り
ヤレコレ言て下さると増長するれで御坐いろうら何卒其方へ……又市さん今の舉動はあれ
何とさへ「酔たのだよ酔居るから宥せと云よ……困つた子突然打擲るの奇い、疵が出来
たらどうも成ん不休裁ワ「何だへ今の舉動のヨウお前様才も成たヨ命を助けたの何の
恩義も掛て彼娘が彼様も厭がるものを無理に引寄て強奸了箱かへ呆れた人だ子怖い入
だ子「又「怖い事の有リヤせん若い娘は戯ふの酒飲の當然だ「梅「當然だつて宿屋の女中ヤ
妓ジャアあし一戸の主じやアあし然うして姉弟で堅くして彼ア遣て温和して居る堅人だ
ヨ伯父さんも村方で何と云れらるか彼と云れる人で、失禮でいまいかお前さんを主人の儀は姉弟
二人で私れ事を尼様……と大事云て呉るジャアないか夫に恩を懸くあんな舉動をすれば

今迄れ事の水の泡も成ジャアないか又「已れが悪いから宥せ梅「宥せジャアないお前さん
何だ子彼の娘が若義理引かされて詮方なしと評を言たら彼の娘を淫奸で彼の娘と評し
い中小成と私を見捨る氣だ子「又「イヤ見捨ヤアせんジャア其様ナ心でない梅「お前様
でない虚許吐て越後の山口でお前の處へ還込だ助倍比丘尼と言つたらう又「ア、聞いと
居るナ酔た紛れだ……打擲ナ血が染んで来た梅「私のお前さん故で斯なよ馴ない旅をして
醉を越し……夜中歩いて怖い思ひををるの……お前さん故だヨお前さんも元ハ梅原様の
中で水司又市と云ふ立派な武士でハ有ませんか武士に二言ハない決して見捨ない我も今迄
坊主と違ひ元ハ武士の了簡に成らう見捨ない云ふから本夫よしとけれどもお前さん
何だらう浮氣をし私を見捨る人だと思ふと心細くつて附て居るも何と云うも接じら
れも見捨られら何為様と思ふと此様ナ山の中へ来てと考へると心細く成ヨ「又「見捨ヤア
せん梅「見捨かねないジャアないか見捨られて難儀するも罰と思ふの……遂はハ七兵衛さん
の怨望でも私の身も未始終祿な事ハないと思つてハ居り升けれども子「又「愚痴を言ふナ一
守酔ふと紛ま言たのだ……大きな聲ををるナヨ梅「お前さんも高岡の大工町で永福和備
と云ふ一箇寺の住職の身の上で有ながら亭主のある私ハ無理な事を云ふから否とも云へな
い義理詰まる前さんと斯云ふ小成たのが私ハ因果サ夫で七兵衛さんを斬割で殺して又
コレ馬鹿、大きな聲ををるナ梅「言度もないけれどもサ先刻云ふ事を聞は比丘尼を打捨
つて仕舞てもお前がワンと云ふ事を聽て我ハ此家へ這入て寺男同様な働らきをし牛馬を
牽く百姓もならうと言たが能く夫様事言それ義理だと思つて居るヨ

又「夫の悪いヨ悪いヨ大きな聲をして聞えるを悪いヤアナ梅「言たつて宜よ又「馬鹿言ふ
 ナヨ梅「言たつて宜御坐います又「宜たつて此事が世間よ知れチャア互ひよ梅「互ひ
 出でる前よ連られて飛弾の高山越よ又「其様な事を言ナ已れが悪いヨ梅「唯悪い云へ
 は宜かと思つてお前の見捨る丁箇に成つとメ又「アイヤイヤ痛い捻り上げて痛いわ何
 シヤア梅「痛いてエ餘まで又「又打擲ヤアがるコレ我が悪いうら宥せと云ふよ我が酔と
 のだハツと云ふ機轉ツヤア梅「私のもう厭だ此處よ居るのハ厭とヨ發足ヨ又「我も發足ヨ
 我も悪いから宥せと云ふ客氣を言ふが世間ハ漏てハ成ませんから又市の種よく宥めて其晩ハ
 共は寐りましき事で先づ機嫌も直りましたが翌朝になり又市の此處に長く居てハ都合が恐
 いと心得正午時分までハ何事もなかつて居りましたが晝飯を食て仕舞て急よ出立と成まし
 たるらおやまも機嫌ナ奴だから早く發足と方が宜夫でも義理だから伯父を喚んで請らぬ
 物でも饒別杯羨しまを思を又市が脊負まで暇をいして出立致しました梅案内の通りあれ
 から白鳥村を出まして青倉より横倉へ掛り親摩川の川上を越えまして月岡村へ出ましてあ
 らから城坂畔へ掛ります白鳥村を避く發足よたから月岡へ泊れば少く早いなれども丁度
 宜のを長い峠を越えようと無暗ハ峠へ掛り开ると松栢築茂り下を見ると谷川の流れも木の間
 まり見渡月岡の市街を回顧つて見ると辰屋チカラと時刻又「ア、まだ月が出ぬへで
 真闇よ成るメウ梅「一寸、又市さん私の新巻の暗い處でハおいと想つたが此様よ暗く成

てハ提灯がなくなつてハ歩行ないよ又「揚灯ハ持つて居る梅「燈火をお照さ又「もう些と先へ
 行て梅「先へ行くなつて真暗で仕様がなない全体月岡へ泊れば宜に此峠を夜を越して来たか
 仕様がなないよ又「我も越度も何ともないワ、エ、汝がギヤアノ、騷立るから彼處の家は
 も居られ急ぐ旅を志し彼處よ泊つて彼處の物を喰居てお齋よ出て貰つた物が溜れば
 後の旅をするよも宜い後ハ旅が掛シヤア夫を詰らぬ事は妹好でギヤアノ、云ふから居られ
 ないで、梅「なく發足て来たのハ梅「無據發足たよもし月岡へ泊れを宜のよ夜よ成つて
 峠を越すのハ困るよ又「困つて悪ければ是から別しよう梅「別れて何をするノ又「汝我が横
 面を能くも人中で打擲たナ梅「打たつてお前其様な事を何時までも腹を立て居るがチ私も
 腹を能くも打擲シヤアないか彼の娘が義理づくで命を助けられた恩義が有からお前の云ふ
 事を聴は見捨かねないヨ又「總令見捨ると云たよもせよ何故荷且にも本夫の横面を打と云
 ふ事有るか梅「打擲たのハ悪いが前さんも彼様な事を云ひだから私も打擲たのシヤア
 ないか又「打擲たを濟か殊よ面部の此疵縫と處が縫ひたら何も成ん本夫の横面を打たから眼
 擲てエ事が有るか太エ奴シヤア汝れ、と拳を固めておんと惠梅比丘尼の横面を打たから眼
 から火が出る様梅「ア、痛い何チするのた子何チ打のだヨ又「打たが何した梅「呆れ
 て仕舞ふ腹が立なれば子宿屋へ泊つて落着く言ナ何も如斯夜道の峠へ掛つと人も居ない
 處へ来て打擲さるるハ餘リシヤアないか此處を別れると云ひのハお前見捨る丁箇かへ
 又「己の悪態を盡して厭よ成たマツノ、厭よ成ら坊主天窓を抱へて船い年をして無妬を言や

アがるし、現事許と云ふから腹が立て溜らんわ、人中だから耐へて居た殊、本夫の天窓を
 打擲やアがつてサア是れを別れよう梅「呆れて什舞た私を見捨てる……ア痛い何をするのよ
 何も怖ろしい人イヤアないか腹立粉れ打との、悪いと詫まるシャアないか如斯峠へ来
 て何ぞ子私を見捨て行處のさい様よして何せる氣だチエ又「何も肝もなし、大事の事を
 妬粉れにギヤア、言て二人の首の落るを知らぬか餘まり馬鹿も愛想が盡た梅「愛想が盡
 とつてお前さん又「サア、と行け梅「アレ危険胸を突て谷へでも落たら何せるのだチ木
 當ふ怖いなだ夫前ヤア何だ子私よお前愛想がつきて邪魔も成からる前の身の上を知て居る
 から谷へ突落して殺す了簡かへ又「エ、知れと事だ、と云ひながら道中差の小長いのを引
 被ましたから梅の驚きまして「サア、逃げて掛りましとなれども足場の悪い城坂
 離れよ、夜道をござい升からアレ人殺しと聲を立て掛つたが相手ハ本夫底の情と云ふもの
 が有らう人殺しと云たら人をも出て来て二人ハ難儀に成ひないかと思ひ梅「アレ氣を
 めないか全く別れるなら話合よと、言掛升るが最上居り升から木の根に墮つき倒れ
 る處を此方の下りながら一刀撥せ掛れば惠梅比丘尼の肩先深く切付ま、と「ア、私
 を切と悪徒、お前ハ私を殺して彼おやまさんを又口説かうと云ふ了簡だナ、と足に緊据
 付を又「チ、知れた事だ、と云ながら刀を逆手に持直し肩峯のところにからウリンと力に
 任して突ながら振り廻したから只た一突きで「ブル、と身を保として其れま、息の絶えま
 したは籠矢ら人の來のせぬかを見ました誰れあつて來る様子もないからさ、谷へ死骸を
 突落さうと思ふと又市の裾と紐と付となりて狂ひ死を致しました故中、放事事が出来ませ

んから惠梅の指を二三本切落して非道にも谷川へ「ゴロ、と突落し、餓別、頁
 ひまいた赤豆や稗の邪魔も成升ら谷へ捨血鮮を拭つて鞘に納め是から仕度をし元來た
 道を白鳥村へ歸つて來ました悪い奴ハ見る奴を、おやまの家の軒下へ、で様子を見たとお
 やま山之助ハ何か狐鼠、話をしして居る様子でござい升、トン、と「おやま
 さん山「ハイ誰とへ又「一寸開てお呉ささい又市「シヤア叩てお呉ささい「又來たヨ又
 市「何して來とチー山「ハイ何で御坐い升か晝間お立被成た方でぞか又「一寸開て下さい
 炭難事が有て來たから山「ハイ、と山之助が表口の半戸を開け升とキョト、と「致なが
 ら還入つて又「此方へ惠梅比丘尼ハ來ませんか山「イ、エ御出被成ません又「ハチナ何も
 今、此方へ來るよ相違ないが城坂峠へ掛るとチ全体月岡へ泊せば宜かつたが修行の身の上
 旅費も乏いから一二里ハ踏込さうと思つたから峠の中場まで掛ると四人許り追刺がしまし
 て身ぐるみ脱で置て往けと云ふ故此方の修行者でござい升から旅費の有ませぬる比丘尼を
 助けてと云ふも然うハ往ぬと異くする刀を抜て威を故私がお比丘ニハ眼配せしたら惠梅比丘
 尼ハ林の中へ駈込を逃げたら最宜と思ひ種々云つと透を見て逃儀と思ひ只今上ます些
 と許り旅費も有から差上升から手を放し被成と云ふとホツと手が放れるが否や轉がり落
 て死ぬるか生るかニッ、と一生懸命谷へ駈下り逃げたが比丘尼ハ外へ行處のさいお前さ
 らの處へ來るよ相違ないと思つたが未だ來ませんか

○ 第四 十二 席
 やま「アレシヤ餘まり遅う御立で途中で間違が有くハ往けませんと思ひましたが夫ハ

御比丘様の今も出でせうらふ上り被成て……山之助も草鞋でおぬで被成から足を洗つて又「イヤ怖い目遣はまたア、心持が悪い二三人を兎くするのを扱はした故ナ此方も命がけで切抜けた故紙を受たかも知ぬ着物は血が着て居る様で山「足を洗つてお上りなさい」又「ハイ私の怖くて胸の動氣が止らない何卒度胸定め酒を一杯下さい」と是ら酒を飲で空々敷事を言て寐たまたが此方の眞實と心得伯父に話をすると惠梅比丘尼の行術を尋ね升と月岡村の雪崩法書院と云ふ寺の山清水の流れは尼の死骸が有と云ふので其村の人が氣の毒ナ事と云ふて彼地へ是を葬むりました事と翌日の日尊方分りましたれ山「何とも御氣の毒様で申さう様も御座いません」又「イヤ私も今聞きました山之助さんア情ない事な成ました私ハ盗人ハ胸倉を取られて居る惠梅ハ捕られ胸倉を振切て先へ断下りたあれとナア婦人で足ハ弱し悪い奴取圍まれ切られて死だかと思へば不便じやナア月岡此寺へ葬むり成ましたと知らずに居りましたが左様かへ致し方ない何も情ない事ナ山「誠なる氣の毒様嘆む力落してございませう」又「年を取る女房別れるハ誠ハ厭な心持シヤア大き御苦勞を掛ましたか何も詮方がない不思議の因縁シヤア依て山之助さん前さん方も月岡まで寺参りな往て下さい私も比丘を葬むりました其寺で法事でも爲て貰ひ度よく因縁が悪いと見えてア是れ情けない出家を遂ても御難入遣て死ハ何ぞ前世に約束有ませう實ハ胸が痛うて成ん酒を一杯下さらんう、と夫様な事言てハ酒許り飲で居り升が其夜部屋に入寐升と水司又市ハクウ」と空閑を掻て寐た振をして居ります山之助おやまも寝ました様子も御座い升から情ツと起きましておやまは寐て居ります後

ろの處へ来まして横よコロリと寝ましておやまの枕と襟の間へ手を入りましたかおやまの眼を覺し「何をなさる」又「静にやま」「エー何くり致しました何を被成ので」又「おやまさん私ハ前さんハ面目ないが實ハ命がけで年も愧ずる前さんに惚ました夫故ハ此間醉た粉れな彼様な猥褻事を言かけてお前さんハ腹を立て愛想盡しを云ふとが何と云へれても致し方ない私ハ眞實お前も惚て是から何處へも行處のない身の上シヤア依て私がお前さんの家の厄介者ななりア年も往ぬ若い姉弟衆の力なる心得で何の様に眞實を盡すがなれどもお互ひ此氣の置ぬ様に生涯一處小居る事ハ肌觸て居ないで居られるものハおないナア本が他人シヤアが年を取居るから本夫も成らうと云ハぬが只一度も肌觸て居れば是から先お前が良を持ふともどう成ても其處が義理じや退出もせまい是程まで思ひ詰たから只一度云ふ事を聴て下さい、と云ハれ餘りの事に腹が立升から起上つておやまハ又市の顔を睨つけ「只今出て行て下さい呆れたお方だ怖いお方だ、何ぞと云と命を助けた疵が出来たと思がましい事を被仰て猥褻敷い此間ハ御酒の機嫌と思ひましたお今の様子の御酒も飲ず白々地の狂人其様な事を被仰てハ實ハ困りませ其機嫌お方との存をせんで伯父も見損ました只今出て行て下さい」又「お前、何を私が是程まで惚たよ愛想盡しを云て、年を取て男ハ醜くも夫程まで思ふて呉れるか慰便ナ人と云ふ情がなければ成ぬが何んで其様ハ憎いかへ

○ 第四十三席

やま「ハイおの前さんが情知らずの御人かと存じ升惠梅様と云ふ女房が災難で切殺され

下ノ三十四

明日法事を戒成と云ふ御寺参りに往く身の上じやア有ません其女房が死んで七日も経ぬ中私に其様な猥褻事を言掛るの餘まり情のない怖敷いお方をフツツ貴方よハ愛想が盡きした又「惠梅も憎くはないが實の私が殺したのシヤアやま」「エ……又「サア斯う私

四五寸許り抜掛ました是を見らとみやまの傍ろきましと「アレー人殺し、と云つて出しましと山之助も驚ろき飛上り又市の頭髪を把て「姉さんを伺する、と引ました引れる機轉又斯う脇差が抜ました一方の白刃を見たから「人殺し」と駈出し升のを又市ハ人殺しと云ふの惠梅を殺した事を訴人するを心得ましとから人を殺し又悪事を重ねても己れの罪を隠さうと思ふ淺間敷心からみやまを遣て成ぬと山之助を突除て土間へ駈下り後ろから飛掛つてみやまの肩へ深く切掛ましたみやまの前へガツバと倒れる山之助の切られたのを見て驚ろき迂路して近傍を見廻し升と枕元は合圖の竹法螺が有升からは是を取て切られる迄も「フウー」と竹法螺を吹ました、山村で何方も一木ツ、有まして事が有と必らず是を吹升から山之助が吹出を直隣をフウーと吹く、是ると又向ふの方をフウーと云一軒吹出を離れて居ても山を吹出を川端の家でも吹出すと村中を戸も澤山の有ませんがフウー」と竹法螺を吹出し何事かと獵人も在るから鐵砲を荷擔又ハ鐵或ひハ鐵鍬杯を持って段々村中の者が聚ると云ふ是ら水司又市を取押へ様とする山之助もやま大難のお話で御座います

○ 第四十四席

ホノ三十五

水司又市の十方をフウーと吹く竹螺の音を聞きまして多勢の百姓共に取巻れてハ一大事と思ひまして何處を如何潜つたか筋に川を渡つて逃げた跡へ村方の百姓衆が集まつて來ましたが何分も又物の利し斬人の水司又市で山ハ餘程の深傷で御座い升からモウ虫の氣息も成て居る處へ伯父が参り「ア、情け無い事をした其様を悪人との知らず

恩返しのためだから丹精をして恩を返さんければならぬと云つて直に行かふと云ふのを無理
 に留めたが夫が現在自分と連れて来ると比丘まで殺して其上無理懇請を云ひ掛て此始末小及
 ぶと云ふの悪い奴が山向か思ひ置く事が有らぬと云ふと山之助も涙をかり先立ち胸
 が閉て口を利く事も出来ませんが漸くは氣を取直して「山之助さん、氣丈して呉んなさ
 よ今も醫者様を呼びよ遣りませよから氣丈まで呉んなさいよと云ふ伯父も山の傍へ参
 り耳小口を寄せて「お山やア、氣丈して呉れよと呼びませる其聲が耳に入つたからガク
 リツと心付いて起上つて見ると鼻の先は伯父も居り弟も居り升がモウ目も見えなく成ま
 たかヤツト遣出して山之助の手を握り「山之助、山之助さん氣丈まで呉んなさい
 よ伯父さんも此處へ来て居ますよ村方の百姓衆も大勢来て手分をして又市は跡を追手を掛
 ましたから今も前さんの敵を捕へて置るよして川へ投込むか生理よしと愛き目を見せて
 遣り升、姉さん今にも醫者様が来升から氣丈まで呉んなさいと云ふ伯父さん「アイ此處
 は居やすから心を儘持てナ此位の傷で死なやアしあへりら必き氣を丈夫持たへでハ
 いけさいぞ「アイ伯父さん永く御厄介に成まいて十六年前は父様が屋敷を出て行衛
 知れぬも成てうら親子三人でお前様のお世話となり其中お母様も亡く成てから山之助も
 私もお前様小養育られお蔭で是迄大きく成まいたから山之助に嫁を買つて私のお前様の
 お力となり御恩を送る積りで居りましたが何の因果か悪人の爲に私伯父さんモウ迎も助
 かりません是迄信心をして何卒御無事でお父様が御歸り遊ばす様よと無理を願掛を致しま
 したが一目お目お掛らぬ死に升るの誠は残念で御坐います私の無い跡でハ獨更身寄

便りの無い弟何卒目を掛て可愛がつて遣つて下さい、ヨ伯父さん頼み申し升ヨ「アイ
 ヨ其様を心細い事を云つて、已も娘ばかりを御坐しやすし外は身寄便りの無い身の上娘ハ
 アノ通りの無頼阿魔で力も成りやアしねへから前方二人が實の娘よと優しく呉れたか
 ら力も思つて居るれよ今娘も死なれてハ年を取つた已の何も楽しみが無いたヨ一途者も成て
 親父も逢ふと云ふ心で無くちやアあらまいや「ハイ私ハ何も助かりません……山之
 助や、ハ、ハ、ハ、又市の額よの葉廣山で受た創痕が有し元ハ彼奴も柳原の家来だと云ふが彼
 奴の顔ハ見忘のしまいなア山「アイ見忘れのまません「汝も武士の体だ、心に掛て父
 市の顔を忘れるな山「アイ決まて忘れやしません、姉様氣丈して下さいよ「若しお父
 様が御無事で御歸りが有つたら私ハ災難で悪人の爲め是非業な死を致しました一目お目
 に掛らないのが残念だと云つてお父様も先だつ不幸のお詫をして呉れと跡を云ひ懸して
 カカカカカツと續けて云ふの咽喉が潤くうら水を云ひ度いが口が利けなくなつて手具
 似を致しませ伯父が是を見て「咽喉が潤くのうら水を飲ましたら宜からう、と手具ひよ
 水を興へてのならぬと申す事ハ業より心得て居り升るが伯父ハ心ある者でモウ逆も助から
 ぬから臨終の別れと水を飲ませるのが此世の別れお山ハ夫なと思お絶望した是を見ら山
 之助ハワツと其境に泣倒れな升まとも伯父ハ「何も致し方が無い幾干泣いても姉の歸るも
 のじやアないうら諦めるが宜い若し貴様が頼み事有るハ己が困ると云ひ村方の所
 姓衆も色々と云つて山之助に方を附け漸くの事で村方の寺院へ野邊の送りを致しました

儲お話一兩頭に分れまゝて丁度此年越中の國射水郡高岡の大工町宗延寺と云ふ禪宗寺に和
 備の年六十六歳なる眞實なる方で萬助と云ふ翁を呼び遣ります。和「オ一萬助さんか
 たら此方へ這入りなさい。万「へへ何うも誠無沙汰を致しました一寸上らんければな
 らぬと存じました。が益前の忙がしいと思ひまして夫故小ハア存じながら御無沙汰を致し
 ました夫又た婆アが病氣で足腰が立ちませんで私もマア迎も〜助からぬと思つて居り
 升…ナニ最う取る年で御坐り升から致し方無と思ひ升が私先へ死さうで…イ、エナニ
 女と呉れなければ都合が悪いとへ存じ升が何も婆アの方先へ死さうで…イ、エナニ
 老病で御坐りませうから思ふ様に宜く成ません夫故無沙汰を、エ一只今急よ使ひ
 を急い出ました。が何か御用で和「アイマア此處へ來なさい。万「へへ御免を蒙り升和「サ
 テ萬助さん外の噂ぢやア無いがマア前の頼みよ依つて私が處へ逃込んで來て何う云ふも
 のか夫なまゝオモ〜メツタリよ成つて居るのハ藤屋の娘のお噂ぢやテ万「ハイ〜
 何うも御厄介で御坐りまゝて誠よハア私ガ貧乏な方儲取りで育てる事も出来ませぬなれど
 も私の主人の娘で何様もどの思ひましたがついハヤ好い氣よ成つて和尙様へ押付放しに
 して何ともお氣の毒様へエ誠よ有難い事で御坐りまして若し貴寺が無ければ致し方のあ
 い障で御坐り升和「誠よ彼の伶俐な者でナア此處へ遣込んでから私か手許を離さず小側で
 使ふて居る私ガ加減悪いと夜も寐すも看病をやる兩親が無いと云ひあがら年の行かぬの
 にア、遣つて他人の世話をするのハ實に感心ぢや實に夫りやア立派な者も及ばぬ位わ夫で
 私ハ彼ガ可愛いから少さい時分から袴を看けさせて相家へ往く時ハ必ら申供運れて行く

と彼も中々氣象が勝て居て男の様にメツリサした女の様な事が嫌ひだから今迄ハ男の積と
 で過ぎたがモウ今年ハ十六歳ぢや十六歳と成つてハ若衆天窓でも何處か女と見え様もオア
 大きくなり乳房も段々大きく成つて何様ナ事をして男との見えないうちやオムト中よ
 ハ口の悪い者が有つて和尙様ハマア男の積りにして彼娘を夜さり抱て寐るあど、云ふ者も
 有で誠よ何うも困るテ夫からマア何うか相當に處が有たら縁付け度いと思つて居ると彼
 も方々で可愛がられるから少しづつ、の貰ひ物もある處が小遣や者物の皆私に預けて少まも
 無駄使ひひせんデ私の手許に些少の預かりもあり私も永く使つた事だから給金の心得で貯
 て置いた金も有るぢや夫又た少し足して十兩二十兩と纏まつと金が出来たり支度を支
 と相當の處へ縁付けたいと思つて居るのぢや。万「夫ハハヤ有難い事で御坐り升夫程に思召し
 て下さり升と何と云ふ禮の申し様もあいで御坐り升ハイ〜何うも有難い事で御坐りま
 和「就てハア彼奴ハ何云ふ譯どか知らぬが此高岡も永く居る氣ハ無いと見えてハア遠くへ
 でも行く心か頻りと支度をして草鞋を造る處へ行つと足を噛ぬ様よ何うか五足拵へて呉れ
 せどか昔の笠を買來て来て法達も頼んで同行二人と書いと呉れエと夫から白の脚半も拵へ
 爰も拵へたから何でも西國巡禮にても出ると云ふ様子で万「へへ夫ハ〜何で其様
 な馬鹿ナ事を致さ升へ。和「何云ふ譯か知らぬがマア此處に居るのが厭なのを並の女でハ
 が出来ぬから巡禮に委に成つて故郷の江戸へでも行かふと云ふ心かと思ふが夫も付ても預
 かつて居るのハ心配ぢやから前に此事を話すぢや。万「コレア意外事で何うも此方様の
 御恩を忘れてナイト巡禮に成て一休マア何處へ行く氣で御坐りませう。和「何處と云つてマ

「西國巡禮だらう 五」ハイー大黒巡禮を申し升る。和「ナニ西國巡禮だ西國巡禮と云つて西の國を巡るのぢや 五」成程へ成程を様云へば左様云ふ事を聞き出した。和「ナニ左様云ふ事を聞き出したも無いもの西國巡禮を知らぬ奴が有り升か 五」和尙様何卒一寸お話を此處へお呼被成て下さい。和「アイ呼びませう……様や居るか 五」ハイ……と云つたが次の間を話しを聞いて居りましたから是れ何でも叱られる事かと思ひました。ツカ……出て来て和尙の前へ兩手を突き升……見ると大誓の若衆天窓若衆の木綿物で有り升るが生れ付いての標致好しで劇場です。久松の出た様です。

「お呼遊ばしましたのね……オヤ叔父さん能く万「能くたつてお前急よ人だから来たんだオイお前ナニカ西國巡禮を始めると云ふ事だが何うも意外話したぜ和尙様の御恩を忘れての濟もいぢやア無いか夫で和尙様の預かつて居る者が居なくなると困るから私を呼んだんぞと仰しやるのだ全体お前何だつて巡禮も出るのだ誰か其様な事を言めたのかへ和「マア待なさいお前の様は半ばから突然云ひ出しては誰か其様な事を言めたのかへ和「ひなさい万「私ハ氣が短いもんですから突然出任せに云ひ升の……エーお前何う云ふ様で巡禮も出るのだへ十二の時から涉厄介も成て十六まで和尙様が涉丹精なすつて全体お前ハ兩親が無いぢやアないかソコサ和尙様が涉丹精なすつて下を……誠有難い事だ夫而已ならやモウ年頃も成から永く置いては宜ないから相當な處へ縁付たいと仰しやつてゐる、男の養ひとして有たがモウ十六七も成れば覺がナテ……して来るし乳も段々とボナヤ

くして和「コレ万助さん餘計な事を云はいても宜いわナ 万「デモ貴僧の仰しやつた通りよ云ふので……夫で段々女も見ねるから歸嫁たいと云つて支度の金までも出して下さる夫をお前が無よして行かれぢやア私が中譯が無くと困る何とつて又た、西國と何だへ西國と西の國だ其様を遠い處へヒヨコ……行かうと云ふのハ屹度連れが有る相違ないエー私ハ永い間お祖父さんの時分から勤めたのがお前のお父さんが意氣地なしたから此方へ引込んで来るをつた夫で私ハ錢も何も有りやアしないが大工町ハ世帯を持したが引込む位だから何も出来やアしない夫から和尙様の涉丹精で悪黨の一件の後の始末を附られないのを皆涉丹精下すつた夫を今お前がアイと行つて仕舞つては和尙様は濟ない己も亦方丈様も濟ない、濟ないヨ方丈様もヨ 和「マア……左様小言を云ひなされるな……お前も隠さなくても宜い何云ふ譯で白の脚半や禪衣や柄杓を買つたのだへ大方巡禮もでも出る積りであらうが何の願ひが有て西國巡禮をするのぢやイ巡禮と云へを乞食同様で野山に寝或ひハ地蔵堂觀音堂などお寐て夫りやモウ難行苦行を積まるけりやア中々三十三番の札を打つ事ハ出来ぬもんチャ何云ふものだへ巡禮も出るのハ 和「ハイ然う旦那様が禪衣を拵らへた事も御も御存じで涉坐い升ればお隠し申し致しませぬ叔父さん……万助さんお前さんも永く涉厄介小成まじしとけれども私の親父を殺して逃したのハ永禪和尙と繼母の兩人に相違し坐いませぬ小川様の涉調べでも親を殺したのハ永禪和尙と分つて居り永禪和尙ハ元ハ原橋の家來で水司又市と申す武士と云ふ事も小川様の涉調べで分つて居り升が父上さんが御業も殺され堂の標の下から死骸が御出ましたのを見てから寐ても寐ても今迄一睡も忘れた

事の傍坐いません實は悔しいと思ひまして夜も枕を付けるも胸が塞がり枕紙の濡れぬ
 晩の一晩も傍坐いません夫で何か父上さんの敵を打たうと思ひましても十一や十二の夜
 も打つ事の出來ませんがモウ十六歳も成まじし傍弟子さんのお話しは三十三番札所の
 観音様を巡りさへすれば何の無理も願掛でも屹度叶ふと云ふ事を聞きまして何うせ女の脱
 で敵を打つ事は無理も傍坐い升が三十三番の札を打納めたら観音様の功力で敵が打て様か
 と存じまして夫故私ハ西國巡禮に参り度いので實ハ禪衣も柄杓も草鞋までも造つて御坐
 升から誠永くお世話様成ましたのをフイと出ての恐れ入升が彌く参る時傍坐い
 うと思つて居りまじしところ丁度只今お話しが出ましたから隠さず傍話し申します何卒
 叔父さんから傍暇を頂いて巡禮に傍出しなすつて下さい私ハ江戸兄が一人有まして今で
 ハ音信不通縁が切れての居り升が其兄が達者で居り升れば夫が力で傍坐い升から兄弟二人
 で敵を打ち升る心得何れ無事で歸つて來ましたら傍思返しも致しませうから何卒叔父さん
 和尙様は傍暇を戴いて復讐に遺りおまつて下さいまし方「旦那様エ、敵打、エ、旦那様
 和「イヤハヤ何うも盛氣事を云ひ居るナ何ぢやらう万助方「アウモ意外事を云ひ出しまし
 た……敵打……年の行かぬ身の上で父上さんの敵を打ち度いと云ふのハ能く此子も悔し
 いと見ねます若し旦那様私も何も夫ハ塵を宜いと云ひ懸う傍坐い升が如何したら宜う
 傍坐ませう

○ 第四十七 席

和「是の何うも留る事の出來ぬア思ひ立つたら遣るが宜い方「遣るたつて何うも私ハ主

人の娘が敵打ちをせると云ふなら一所へ行きてエのだが今云ふ通り妾アが死な掛つて居る
 から夫を措いて行く譯もいせませんが一人で行かれますか和「イヤ其處ハ所謂觀音力
 を何ナ山でも何ナ河でも越えられるのが觀音力ぢや敵を打ち度いと云ふ的が有つて信心し
 て札を打てば觀音の功力を見事敵を打終せるだらふコレア望の通り立たせるが宜い方「ハ
 イ……和「チャア斯うしやう是ハ追つて頭かつと小遣ひの買ひ溜め又別ハ私が遣り度
 い物もあり檀家から買ふた物も有ります澤山持て行くのハ危ないから襦袢の襟や腹帯も
 付けてナア旅をせよハ重いから軽い金取換へて左様して私が旅費足して二十兩とし
 て遣らふかへ「有難う存じます方「私も遣てエが錢がチエ此處もある一分二米と二百文
 是を不殘遣つて仕舞ふサ私ハ是れが一生懸命遣るのだ和「有難う存じます……是れか
 ら檀家へ此話しを致し升ると孝行の徳ハ勢力的で彼處此處の檀家から大分錢別が集まつて
 都合三十兩出來ました其内二十兩ハピツマリと腹帯肌襦袢も縫付けて人ハ知れぬ襦袢も我し
 着慣れませぬ新らしい禪衣を引掛け雪卸した菅の笠ハ同行二人と書き白の脚半ハ甲掛草
 鞋と云ふ姿で慣れた大工町を出立致し升る其の時ハ土地の者も慣れよ心得運坂井ま
 で送り出したと申す事で傍坐いす是から先高田へ來まじしハ水司又市ハ以前高田で
 ござい升から若しも隠れて居りハせぬかと高田中を歩行まじしたか少しも心當りが傍坐
 ませんから此處を出立して越後路を探したか頼と手掛りが有ません段々尋ねて新潟へ參る
 と新潟ハ御承知の通り人出入りの多い處で傍坐い升から段々諸方を歩行いて聞き升ると人
 此噂ハ川口ハ不思議な尼がある寺男が經を教へて尼が醫ると云ふ事とが大方アレハ

野合で逃げよ者ぞ有ふ寺男の何でも坊主で女何才位か是と云ふ事かアイと云ふ
 の耳は這入つとから……扱は直川口へ来て尋ねるとツイ先日出立したと云ふ事を聞
 したから扱は山越しをして信州路へ掛つたのでないかと思ひまして信州路へ掛りました
 が更手掛りが御坐いませんから信州路へ這入つて善光寺へ参詣を致し善光寺より松本へ
 掛つて洗馬と云ふ宿へ出ました洗馬から本山へ出本山から新川奈良井へ出て奈良井から
 原へ参り升るに此間鳥居峠が御坐い升其日の洗馬泊りまして翌朝宿を立つてお掛が
 柄杓を持って向ふ側を流して居ると其の向側を流して行く巡禮がある……ト見ると是も同じ
 務装の若衆天窓白い脚半は甲掛草鞋禪衣を肩に掛け柄杓を持つて御詠歌を唄つて巡禮に御
 報謝を……ハテナ彼の人も一人で流して居る私の随分今迄諸方を流して慣れてるからモウ
 此頃の夫様も旅も可憐いと思はぬが彼の人の未だ慣れない様子誰か連れでも有る事か夫と
 も一人で西國へ参詣をするのか矢張三十三番の札を打ち行く人ぞ無いかと思ひました
 此道中の事で氣味が悪いから迂濶と尋ねる事も出来ません其此方側を流して過ると云ふの
 は白鳥山之助が姉の隣を打ち度いと申して無理は伯父も暇を乞ふて出立した者山之助も向
 ふへ巡禮が来るナと思ひましたけれども知らぬ人は言葉掛けて何様な事が有るかも知れぬ
 妾は優しいが油断の成ぬと思つて言葉を掛けません其晩は鳥居峠を越して宮之越へ泊りま
 した丁度八里餘の道程で御坐います翌朝お掛り早く泊りを立出て前中巡禮と兩側を流
 して向ふが此方へ来れば此方が向側と云ふ廻り合せで兩側を流しながら遠く福島を越して
 原と云ふ處は泊りましたが宮之越から此處まで八里半五丁の道程で御坐います其様は

終兩側を流して同じ宿より泊り升るがなれども互ひに可畏くて言葉を掛けません其から
 様御案内の通り福島を離れまして彼の名高い兼登の里を後致し馬籠に掛つて落合へ参る
 間が美濃と信濃の國境ひろ湯座いませ此日の落合泊りの事で少し遅くは成りましたが急ぎ
 定でヌマ……と馬籠の宿を出外れ掛り升ると其處は八重と道が付いて居て此
 方へ往けば十曲峠……ト見ると其處は菱葉張の掛茶屋が有から一少づ物を承まつりた
 う存じ升が是から落合へ参り升る如何参りまら宜う御坐い升かと云ひましたと云ふ
 さんの耳が遠いを見て見返りもせず頻りに土籠の下の火を焚いて居り升り又た
 ナノ是から落合へ行くよ此方へ参つて宜う御坐い升くと云ふと奥の方へ腰を掛けて居た
 武士が深い三度笠を冠り廻し合羽を着て柄袋の掛つた大小を差して盲編の脚半は甲掛草鞋
 と云ふ如何にも旅慣れと掛装「コレ」巡禮落合へ行くなら是を左の方へ付いて行け
 「有難う存じませト是から致へられた通り左へ付いて行くは何處まで行つても時上り
 の山道で見下す下の谷間小の淵を巻いてドツドと落を谷川の水音が凄まじく聞えます日
 ノツツと暮れて四邊の眞暗なるお纏の氣味が悪いから誰れか人が来れば宜いと思ふと
 後ろの方からバラ……」巡禮、巡禮暫らく待てト云はれとが眞闇で誰だか分
 りません

○第四十八席

典「コレ巡禮」ハ「ハイ」……典「思ひ掛ねへ手前久瀬で逢つたなア」ハ「ハイ誰様で御坐
 りませ」誰様もねエもんだ丹公の乗名川村へ居た柳田典藏だが汝の姉の御座で青い目

逢つてあまを道丹精しと桑名川村へ居られぬ。成たのた其時の家財や田地を賣つて逃
 げる間も無いから漸く有合せれ金を持と逃げて再び桑名川村へ歸る事も出来ぬ様な時だ其
 上右の手の裏へ傷を受け其疵を繕つて養生するも永く掛つたが先刻乃公が察覺を通り掛
 ると汝が通るから是の妙と何云ふ譯で巡禮に成と出るかと思つて跡を尾て来たんだ。其
 難儀を逢坐い升か人違ひで逢坐いませう。私に左様な者で逢坐いませう。其
 本事を云つて隠しともしいけねへ先刻乃公が神衣を見たら信州水内郡白鳥村白鳥山之助と書
 いと有た。其
 典「サ其通り替いて有から仕方だね。」「イ、エ私に左様な者で逢
 坐いませぬ。私に越中高岡の者で。」「典「何程汝が隠したつても役に立ねエ姿の巡禮とが
 汝が餘程金を持てる事ア知てるサ乃公が汝の姉の爲に斯う云ふ姿よなつた代りよ金を強奪
 つて汝を殺すのたが金を出しやア命の宥して遣らう乃公の追刺をするのぢやアねエけれ
 も此頃で盗人仲間へ入つた身の上斯う成たのも實に云ふと汝兄弟のお蔭なんどサア
 金を山せ。」「私しに左様な者で逢坐いませぬ。私に其山之助と云ふ者で逢坐いませ
 ん。私に越中高岡の宗延寺と云ふ寺から参りました者で。」「典「何と隠してもいけねエや
 愚頭。」「云とんでサッサと出せ若し強情を張れば撲殺仕舞ふぞ。」「イ、エ私に夫様も人ぢ
 やア。」「典「打斬つて仕舞ふぞと柳田典藏が抜刀だから光りよ驚いて。」「ア、レエと一生
 懸命に逃び掛るのを後ろから。」「典「待てと手を延して笠の端を捉つとが夫でも振拂つて
 逃げ掛る機は笠の紐がアツリと切れる一生懸命に逃びる途端道を踏外して谷間へツウ
 ン。」「可愛さうよお精の人違ひをされて谷へ落ち升るヌルト是を知らぬ山之助の是も落

合まで行く積りで山道へ掛つて來升ると後からバスマ。」「勇「乃公ハ汝と須原で合宿はなり宮之越
 勇治と云ふ念袂。」「勇「オ、イ、巡禮。」「山「ア、イ、勇「乃公ハ汝と須原で合宿はなり宮之越
 でも合宿は成つと者だ。」「山「左様ですか。」「勇「左様でガスカぢやアねエこれ道中をするよハ
 男の姿で荷けりやア成ぬと云ふので其様云ふ姿よ成てるが汝ハ女だ。」「山「イ、エ私ハ男子
 でげそ。」「隠したつてもいけねエや修行者でも商人でも能く巡禮の姿よ成て來る事有が
 汝ハ手入らぬ處の女に違へねエ口の利き様から濶歩よ歩行く處ハ何見ても男の様だが無理
 以男の姿に成て居ても乳が大きいから仕方だね。」「山「何を仰しやるのだへ私ハ其様な者
 逢坐いませぬ。」「勇「男で逢坐います。」「勇「いけねエ何ぞも女に違へねエ今夜乃公が落合へ連
 れて行つて一處は抱て寝やうと思つて來たんだ。」「山「申藏を云つちやアいけません。」「勇「申藏
 ぢやアねエ汝を宿屋へ連れて行つてからキヤアバア云とれちやア面倒臭いから茲で乃公の
 云ふ事を聞いたら得心の上で宿屋へ泊つて可愛かつて遣るのだ愚明ツカする宿場へ遣つ
 て永く苦しませるぞサア此處のモウ誰も通りやアしねへ其横へ遣入ると觀音堂が有て堂の
 縁が廣いから。」「山「申藏もぢやアいけません。」「私ハ其様な事
 を云つちやアいけぬ。」「勇「前が宿よ泊つて湯も遣入る時に大騒ぎをするから肌襦袢に縫付
 けて金を持てる事もチヤンと承知さ。」「山「何をなさる。」「勇「何を云つて何せ此方ハ盗みか商
 賣さから。」「山「無暗な事をなさるな。」「勇「無暗が何する斯うだぞ。」「山「何もいけません。」「何を被成
 のぞき山之助ハ勇治の頬片をボンと打ちました處が山之助ハ白鳥村小居る時分よ牛を牽い
 たり粗朶を獲いたりして中力のある者其力のある手で横ッ面を打たれたからコレア女で

もいふ力がある法よ力のあつた女だと思つて、再「何をすつたがキヤアバア云やア、嫌な
く叩き斬るやと本當に斬る氣を有せせんが威嚇して抱いて寝る積りで念袂の勇治がスワ
リ抜くと山之助も背負て居る道から脇差を出さうかと思つたがイヤ、怪我でもしてはな
らぬ大事の身體と考へ直して、山「人殺し……泥坊……ト横道へハア、

○第四十九席

勇「ゴノ頭女めと追掛られて逃途がないが山之助の年十七で身が軽いから谷間でも何でも
足掛とれある處へ無茶苦茶逃げて萬難なごよ手を掛けチヨイ、と逃げる殊も
出坂を歩行き慣れて居るから木根が、に足を掛け歩行く事の上手で弄あれども始めて
の處で様子を知りませぬから一生懸命死者狂ひも成て逃げると細手は勇治の「勇「ナニ此頭
女との云つても谷間を歩行けた下手で追掛る事出来ません如何しと事か山之助が足掛
りを踏外しとからツツと萬が切れと見えて両手は握まつたな谷底へ落ちると下よハ
草が生へた谷地も成つて居る前ハドツと淵を巻いて細谷川が流れませ、山「ハア何も可
畏い事伯父さんが左様云つた汝一人を縦令敵打を弄る心でも大膽だ逆も西國巡禮の出来ぬ
道中ハ可畏いもので昔コレノ事の有つたと云つて異見を被成つた夫をも云つて覺悟
なまはが可畏いなア是れアいけぬ柄杓を落し仕舞つた……ダガ彼奴ハア何だらう私
しを女と思つて居やアがつて無暗と人の頬片へ髭面をこすり附けやアがつて……オヤ笠を
落して仕舞つた仕様が無いア……オヤ笠ハ此處へ落ちて先刻落ちる途端柄杓を……
オヤ柄杓も此處へオヤ、巡禮も此處に落ちて……ト谷地を渡つて向ふへ行き升ると草

の上は仰向反も成り倒れ居る巡禮が有から山「オー、可愛さうに此人ハ洗馬
で向側を流して居る宮の越で合宿なつた巡禮だ此時ハ可畏いと思つたから言葉も掛たか
つたが何うも意外災難ぢやアないか此人ハ如何しとんだらう目を廻して居るオヤ巡禮さ
ん何處に巡禮さんハ氣丈一なさいよ此處ハ谷の中で御座い升ヨ可憐さうよ如何したんだ
らう此笠も柄杓も此人のた己のぢやアないダガア如何したんだらうオヤ藥が有つたつて
時への藥を出して飲ませやうと思ひましたがシツカリ齒を切はつて居りますら自分ハ
碎いて漸く齒の間から藥を入れ谷川の流れる水を掬つて来て口移しにして飲ませると藥
が通つた様子深切山之助が摩つて遣升ると山「有難う、山「お前さん氣丈なさいよ
馬から流しと来た巡禮で御座い升ヨ、山「ハイ有難う……可畏い事で御座いました、山「成程
お前さんハ如何成之の、山「如何したんで御座い升かハ違ひで御座いませうが私が山路
掛つて来ると後から大きな武士が追掛け来まして左様と私ハチエ汝ハ白鳥の山之助と
か何と云て誠久敷達となかつたが汝の姉のお山ゆゑに斯んな浪人な成たから汝は持て
る金を取つて意返返をせると云ふから私ハ左様な者で無いと云ひ升と突然脇差を抜いた
から一生懸命逃げやうと思つて足を踏外し此處へ落まて御座いませ、山「夫ハ氣丈
毒機夫チヤア私と間違へられたのだと白鳥の山之助と云ひましたか、山「ハイ其男ハ何と
云ふ奴、山「アノ柳田與藏と云ひました、山「夫ハ夫變何も氣の毒機お前さんを私と間違
はつたので御座いませ、山「左様で御座い升か私ハ其様な者でないと思ひ障を云つても聞き



十五ノ下

下ませんて山「ソレア全たく私の間違ひでせ……お前さん女で御座い升子エ山「イイエ山「夫でも今私が抱いて起した時に乳が大きい口は利き様も女に違ひないと思ひます山「左様で御座い升か私の本當の女で御座います山「左様でせう夫ぢやア私のお前さんと間違へられたら私山道へ掛ると念袂が来て汝の女だらうと云ふかといエ私の女をいはないと云ふと其様も事を云とも乳を見よから女は違ひない金も持つてるから出せんと云つて私の類片を管めやアがつさから其奴の横面を打つと處が脇差を抜いよから私ハ一生懸命な泥坊と云つて逃げる途端足踏外えて此處へ落ちよんだ山「オヤアアお氣の毒様山「私の方がお氣の毒様だ山「お前さん何處へ御出なさるの山「私ハ西國巡禮山「オヤ私も西國へ能く似て居升子エ山「エー能く似て居ますチエ山「お前さん何處へ泊り山「山道へ掛つて落合と思つて何も能く似て居升子エ山「エー何も能く似て居升子エ山「貴方私を連れて行つて下さいまわんか山「エー一處も参りませう山「夫ぢやア何卒山「一生懸命に獲まつて御出なさい山「何卒お運ま被成さ下さいト互ひよ信心参りの事を御座い升から互ひよ力よ思ひ思はれまして山「何か落すといひませんヨ山「ハハ柄杓も此處よ有と笠を片手よ提げて山之助の案内で漸く往來まき這登りまして是ら落合の宿に泊つたのが山之助と云ふお氣の毒様初めの合宿で互ひよ同行二人力に思ひ合つて是から二人で西國三十三番の札を打ち升と云ふ巡禮打の始まりで御座います

○ 第五十席

十五ノ下

山之助お氣の毒様其晩遅く落合よ泊り翌朝に成まして落合を出立致して大井と云ふ處へ出ました是から大久手細久手へ掛り傍伏水と云ふ處を通りまして太田の渡しを渡つて太田の宿の加納屋と云ふ木錢宿よ泊りまき度落合からは是迄ハ十二里餘の道で坐い升が只今この連つて開けぬ往來其頃馬方が唄よも唄ひましたのハ木曾の掛橋太田の渡し確氷峠が無けりやア宜いと申す唄で馬士おどが綱を牽ながら大聲で唄ひましたもので御座いま是頃時候ハ未と秋の末で坐い升が此年の寒さも早く殊に山國のならひでチアリと云ふ雪が降つて坐い升る由之助お氣の毒様も致し方が坐いませんら無理も出立致さうと思ひ升るが段々雪の上よ雪が積りまして山又山の九十九折の道が絶升るから心ならずも先此處に逗留致さんければ相成ませんナレとも修行程の上で御座い升から雪も恐れずよ立たうを思ふと山之助が慣ぬ旅の心配を致しました故か初めて病と云ふもれを覺てド一と枕を就き升る加納屋の亭主も種々心配致し升るが連の者が居るから手當ハ出来やうと醫者を連れて来て藥を買ひ種々手當を致し升が何分も山之助の病氣ハ容易に全快致しません此中の介抱ハ皆お氣の毒様致して遣り升が女で親の敵を打たふと云ふ位な真心な娘で御座い升が赤の他人の山之助をば親身の兄を勞る様小寐目も寐や親切に介抱を致しません山之助ハ心配を致して種々申し升ると山「ナニ縦令半年一年の長煩らひを被成ても私が山道歌を唄つて報謝を受けて來れよお前さん一人位よ不自由のさせません夫よ私も少しハ儲けが有からマア一決して心配を被成ると云つて山之助よ力を附けます又時と鐘を買つて石を當る夫ハ實に親切なもので、是るを俗に申す通り一は看病二は藥を當るの親切が屬い

て其年の暮に追々と全快致し床の上よ坐つて味噌汁位が食へる様よ成ましたから
 悉く悦んで或日のと「山之助さん今日之餘程か加減が宜う侍坐い升チエ」
 有難う私ハマア斯んなよお前さんの介抱を受け様と思ひませんかつとが不思議な縁で運
 れよ成されも矢張禪衣を存負たる蔭全く観音様の利益だと思ひ升實よ此御恩の死んでも
 忘れやア致いません「何致しまして斯んを事ハ互ひで侍坐い升お前さんも西國巡禮私
 も西國を巡るのそ一人で何だか心細う御坐い升が一緒へ行けば何處を流しても同行二人
 でお互ひよ力よ成升から「誠よ有難いことぞ」山之助さん誠よ寒くていけませんし斯う
 遣つて別よ長く泊つて居り升と浦團の代をかりでも高く付き升から私の考へで浦團を
 返して仕舞て下へのお前さんと私の着物などを敷い左様して上に一枚蒲團を掛けて一緒
 よ寐る方が宜いかと思ひ升がお前さん服を御座い升か山「エー寐ても宜う侍坐い升けれど
 お前さんが男なら宜いが女だからチエ私ハ向も一緒よ寐るのハ悪う侍坐い升から「何
 も宜いちやア有ませんかお前さんの長い煩らひの中よ私ガ足を摩つて居ながらツイ轉り
 どお前さんの床の中へ寝た事も侍坐い升ヨ山「左様ですかチエ」本當よ貴でハ有ません
 か是からも未だ長い旅をするのに銘々蒲團の代を拂ふのハ馬鹿くしう御座い升ヨ却てて
 一人寝るより二人の方が温かいかも知れません山「チャアお前さん春中合せに寝ませうけ
 れどもチエ女と男と一つ寝をするのハ向さか私ハ極りが悪いし観音様も濟ませんから
 茲よ洗つた草鞋の紐が有升からは是を仕切よ入まで置いて是から其力かお前さん足から此方
 ハ私としてお互ひよ此仕切の外へ手でも足でも出したら大丈夫の地代を取る事よ致しませう

「夫ぢやア春中合せが温かいがらと云ふのを途々春中合せ成り寝ましと處が本曾殿と春中
 合せの寒さ哉で何處こなくスー／＼風が這入て寒う御座い升から枕の間へ脚半も入れませ
 う股引も入れませうと云て種々な物を肩よ當て、毎晩／＼二人で寝る事よ成ましたが斯う
 云う事よ決して遊ばさぬが宜い何様よ堅いお方でも其處ハ男女の情合で毛もくチャアの男
 ども寝惚れば滑つこい手足なごが肌ハ觸れば氣の變るものナレ共山之助お繼ハ互ひに大事
 を禱る者一方ハ親の敵一方ハ姉の敵を打よと云ふ二人で固より堅い氣象で御座い升から
 決して怪しい事なごハ御座いませんが段々親しく成て來ると「山之助さん山「アイ私
 ハマア不思議な御縁で毎晩斯う遣つてマアお前さんと一つ夜具の中を寝ると云ふのハ實よ
 をかした縁で御座い升チエ山「エー餘程をかした縁をまねエ」私ハお前さんよ少しお願ひ
 が有升がお前さん叶へて下さい升か山「何の事で御座い升か私ハ病氣ハ時ふお前さんが寝
 る目も寝ずハ心配して看病して下まつた其御恩ハ決して忘れませんから私の出来る丈の事
 ハ仕升がチエ何をせへ」私ハ只斯う遣つてお前さんと共よ洗して巡禮をして西國を巡り
 升ので三十三番の札を打つ迄ハお前さんも御信心で御座い升から決して間違つと心ハ出升
 まいし候も大丈夫が方ハ思ひ升な氣が置きてチエ何か打明けてお話しをする事も出来ま
 せんけれども私も身寄兄弟ハ無し江戸よ兄が一人有升が是も絶えて音信が無いから今でハ
 死んだか生たか分りません若も兄が亡い後ハ私ハ全く一粒種で山「何も能く似と事ハ有升
 チエ私ハ一人の姉が有ましたが姉が亡く成てからの私ハ一粒種を親ハ有と云つても十六七
 年も音信が無いから死たか生たか分らぬから眞よ私も一人同様の身の上だチエ

第五十一

「ア何も然うで御座い升か夫ぢやア三十三番の札を打て仕舞つて互ひに大願成就の
 願きよの生涯私しの様な者でも力も成つて下さいますせんか本當よ前さんの志しの優しい
 の見抜ましたら山「私も前さんよ力も成つて貰ひ度いと思つてチエ私ハ彼様な煩ひ
 などが有てお前さんが無かつたら大變な所を眞實よ介抱して下さつたのをお前さんの眞實
 ハ見貫さから其眞實にハ本當よ感心して惚る…と云ふ譯ぢやア無いが眞よ前さんハ好い
 人と思つて繼「エー山「だらう私ハ眞よ力も思つて居升チエ繼「然して斯う男と女と二人で
 一所よ癢升と肌を觸ると云つて縱令訝しな事ハ無かつてもをうまい事有て同じと云ふ譯ハありやアしませ
 升とチエ山「ナニ其様な事ハ有ませんをかしい事無くて同じと云ふ譯ハありやアしませ
 ん…たからいけさい互ひに親音様へ参る身の上だから先に私ハ別小癢やうと云つたんだ
 繼「其様な無理な事を云つちやア濟みませんがお前さんも身が定まれば何時までも一人を
 ハ居られないから内儀さんを持ちませう山「エー夫りやア是非持ちます「不思議な縁で
 斯う遣つて一所よ成りましたが三十三番の札を打つてお互ひに大願成就してから私の様な
 者でも内儀さん…にハ厭で御座いませうけれど可憐さうな奴だから力もなつて遣る
 と被仰つて置けて下されば誠私ハ有難いと思ひ升が山「左様成つて下されば私ハ方も有
 難い本當よ左様成つて呉れ…と有難いチエ繼「本當よ前さんが左様仰一やれば眞實生涯
 見兼ね末ハ夫婦と云ふ觀音様よ誓ひを立つ…貴方も私も外ハ身寄ハ有りませんが故め
 て仲人を頼んで…斯うと云ふ事も成り升れば私ハ江戸の葛西に伯父さんが有から其伯父

下十番

さんだ壯健で居れば其人がチヤンと身を堅める時の力もならうと思ひます勿論夫れを居
 して始終一所に居る譯でも有りませんが…左様なれば私も一大事を打明けて云ひ升から
 お前さんも身の上を隠さず互ひに話を致したいと思ひ升が山「左様親音様よ誓ひを立
 つて私ハ様な者を亭主小持て呉れるから私ハ本當よ前さん打明けて云ふ事が有けれども若
 し途中でヒヨツと別れる様な事も成つて饒舌られると大變だから迂闊を打明けて云これな
 いチエ繼「私も打明けて云ひ度いが一大事の事だから…若し男の變り易い心で氣が變つ
 た後で他ハ此の話しをささると望みを遂げる事が出来ぬと思つて隠して居り升が本當よ私
 ハ大事のある身の上山「私も一大事が有るのよ山「左様…能く似て居ますチエ山「本當よ
 能く似てるチエ繼「アお前さん云つて傍覽山「アお前から云ひなさい山「アお前さん
 から云ひなさいナ打明けて云やア私を見棄れいと云ふ證據も成から山「デモ一大事を云
 つて仕舞つてからお前が夫ぢやア汚免を蒙ると云つて逃げられると仕様が無いからチエ
 繼「私ハ女の口から斯う云ふ事を云ひ出す位だから其様な事ハ有りませんヨ本當よ前さん
 んを力も思へバこそ死身も成つて亭主と思つてお前さんの看病をいたしました山「誠よ有難う
 然う云ふ譯なら私から云ひませうがチエ…實ハチエ…アお前から云つて傍覽山「ア
 アお前さんから仰しやいな山「迂闊云とれません…全体其お前ハ何だへ山「私ハ元ハ江
 戸の生れで越中高岡へ引籠る母よ育らされた身の上で御座い升…誰か合宿が有アしま
 せんか山「アノ可畏い顔の六部が居ましたが彼奴が立て行て誰も居ないヨ山「實ハ山之助
 さん私ハ敵打で御座い升よ山「エー敵打だと妙事有るものだねハお前さん私も實ハ敵打

よ出た者だヨ。アアア能く似て居ませぬ。山「本當に能く似てるが何云ふ敵を打つのだへ。私の子父上さんの敵を打ちよ出ましよ其毒を云ふの越中高岡の火丁町に居升時繼母のお梅と云ふのが前の宗慈寺といふ真言寺の和尚と姦通をしやうして父上さんを毒割で殺して逃げました其時私十二とつたが何卒敵を打ち度いと心よ掛けて居る中よモウ十六よも成たから止めるのを無理に暇乞をして出て来ました三十三番の札を打納めさへをれば大願成就すると云ふ事へ兼て聞て居ませし観音様の利益を無理な事も叶ふと云ふ事で御座い升から目差を敵へ打て様と思つて居升けきやも貴方の男だから夫婦は成す下すつたら助大刀もして下さるとらうと力よ思つて居升のを。山「夫の妙だ私も敵打を致度いと思つてチエ私姉さん敵だ夫ぢやアお前の敵の越中高岡の坊さんか。一イ、エ坊さん成たのどが其前の榊原様の家來を誘座い升。山「ウん榊原の家來……私の親父も榊原藩で可なり高も取る身の上よ成つたのどが何云ふ譯か私と姉を置いと行衛知れよ成ましたから賢い姉と私と神佛に信心をして行衛を探したのどが今よ死だう生だか生死の程も分らさよ居るが私の姉を殺した奴も元の榊原藩で水司又市と云ふ奴……其名の分つとの姉を口説いと時よ恵梅と云ふ比丘尼が嫉妬をやいて身の上を云ふ時よ次の間で聞いて知てるので。アア何うも希代な事私のチエ父上さんを殺して逃げた奴も永禪和尚と申し升ので。盲寺の住持よ成たが元の水司又市と云ふ者で矢張私の尋ねる謎敵だワ。山「夫の妙な事有もんどチエ能く似てるチエ。似て居升チエ。

○第五十二節

山「何も不思議な事も有ものだ夫ぢやア何とチお前の母親さんの坊さんか。一イ、エ私の繼母の元の根津の女郎をしたお梅と云ふ者で女郎の時の名の何と云とか知ませんが又市と逃げるよの姿を變へて比丘尼よ成つたりも知れません。山「是の何も不思議とアノ十曲峠で私と間違てお前を追つ駈けたアノ柳田典藏と云ふ奴が私の家の姉さんよ恩慕を仕掛けた所が姉さんの堅い氣象で中よ云ふ事を肯りぬから遂に葉廣山へ連れて行て手込めに仕掛けと云ふ所へ通り掛つたのが今の水司又市と云ふ者で是が親切な姉さんを助けて家へ送つて呉れたから兎も角も恩人の事だからと云つて家に留めて置く中よ水司又市が又姉さんよ恩慕をしかけるから姉さんハ厭がつて早く何卒して突き出さうと思つたが中よ出て行かない其中に宜い鹽梅の家を出立したと思ふとお前さんれ繼母か知らぬいが恵梅比丘尼を山中で殺して家へ歸つて来て又姉さんハ厭な事を云ひ掛けらうら一生懸命よ逃げ様とする長いのを引抜いて姉さんを切た夫で私ハ竹標を吹いて村方の人を集め村の者が大勢出たけれども遂に又市よ逃げられ姉さんの臨終よ云つた事も有から始終心よ掛けて漸之巡禮の姿よ成て旅立をしよ所が私の尋ねる謎をお前も尋ねる互ひよ合宿よ成て私よ看病をして貰ふと云ふのハ餘程不思議な事よ是ハ互ひに道れぬ縁だ。一ア、嬉しい事何卒私の助太刀をして下さいヨ。山「助太刀をよろぢやアない私に謎を討つたのだから。一イ、エ私が親の謎を討つたうらち前さん一人で討ちやアいけません私の助太刀をして仕舞つてから姉さんの謎をお討ち下さい。山「其様な事が出来るものか何せ私も討つたのだから夫婦で一緒に斬りさへれば宜い。山「本當にア嬉しいこと。山「私も斬んな嬉しい事アない是も親衛様の誘引合せたらうか。

「本當小親音様のお引合せは違ひない……南無大慈大悲観世音菩薩と悦びまじく山」
 斯う打明けた上の縦令見棄ても連れぬ不思議な縁ト是から山之助の氣が弱んで思つたより
 早く病氣が全快致しましたから未と雪も解けぬ中を遠く出立致し追々旅を重ねました翌年
 三月の月末に紀州へ参りました紀州へ参りまゝたが一向向も存せませんから人に效はつて
 西國巡りの帳面を見ると三月十七日から打初めるのが本當だと云ふ事で少く日數の掛り升
 るが縦令月日が立とうが敵を尋ねる身の上で御座い升から又市の隠れて居さうな處へ参つ
 て此處等に潜んで居ないかと疑の行衛を探しながら三十三番の札所を巡ります先一番始
 まりが純州の那智次ふ二番が同國紀三井寺三番が同じく粉川寺四番が和泉の檜の尾寺五番
 少河内の藤井寺六番が大和の壺坂七番が岡寺八番が長谷寺九番が奈良の南園堂十番が山城
 宇治の三室十一番が上の醍醐寺十二番が近江の岩間寺十三番が石山寺十四番が大津の三井
 寺と段々打巡りまして三十三番美濃の谷汲まで打納め升る其年も暮れ翌年よ成と疑を授し
 ながら段々と東海道筋を下つて参り旅ををるると丁度足掛三年目の二月廿五日に江戸へ着
 致しましたが是を云つて外は使る處も御座いませんら先葛西の小岩井村百姓文吉の處に
 兎が居りの一まいかと思つて村の入口を聞き升ると大ハアノ櫃のある處から曲つて行く
 前より大きな木の木が有らと致へられて其通り参つて見ると百姓家の土間が廣くしてある
 其日當りの好い處に焚火が何かして居り升から「御免なさいませし」男「ハイ何だへ」
 「アノ百姓の文吉さんのお宅の此方で御座いませし」男「ハイ文吉さん此方だ何だへ」
 「アノ御座いませし」男「御座い升か若しお婆さん亡くなつて伯母さんで御座い升か」男

婆さま「巡禮ごんが二人来て婆さまに逢ひ度と云て立てるだ婆」
 巡禮ごんかへ修行者が錢を貰ひよ來たら錢を上るが宜い、知つてる人が尋ねて來たかへ
 御免なさいまし貴方が此方のお婆さんで御座い升か婆「ハイ私が此の婆を御座い升よ貴方
 へ誰だかチエ」
 貴方御座い升か私ハ湯島六丁目藤屋七兵衛の娘と申す者で御
 座い升婆「ア、何れも魂消たとも何も成長く成たアアア能く尋ねて來たアアア巡禮ご
 成て來たさかへ」
 「ハイお婆さん逢ひ度いと思つて遠隔の處を参りました婆」
 ねて來たヨ是やア誰か井戸へ行て水を汲んで來て……是イ洗つて上りなヨ……オ、草
 鞋をきで……汝話しい聞いた事ア無かつキアが是ア私の孫だヨ、ソラ江戸へ縁付て出來し
 た娘だ……サア是イ洗つて上がるが宜いと云はさから巡禮二人の安心し上へ上り罷」
 御機嫌宜うと挨拶を致し升ると「お前の全く藤屋七兵衛の娘かへ」
 御座い升兄の縁切で此方へ預けられた事ハ承知して居り升が只今でも達者を居り升か
 ハアエ彼の親父の心得違ひで女郎を呼ばつと中たもんだら苛遇られるのが可憐
 さうでならさへから跡目相續の相領の正太郎だアけれを私シイ方へ引取り音信不通なつ
 て……アアアアア家イ焼けてから跡目破産れて麻布へ引込んだと云ふ行通ひしさい、跡を聞け
 る遠い國へ引込んだと云ふ事七兵衛の悪いから心も掛あエけれでも己ア爲よの眞實の孫
 だアア娘が親母の手を掛つて居るか心配して汝が事ハ忘まご日ハ無いだ……ナエ十八と
 どエバアはア七十の坂を越して斯う遣つて居るとけとでもマア用の無い老翁婆だから早く
 死なたい厄介のない御座いと思つてもと斯うやつてマア孫が尋ねて來て顔が見ら

「立派な好い嫁を買つて来た孫が出来ないだチエ婆」未だ出来ないよ貴方ア子供ハ幾人有
 だかナア百「私ア二人でナア總領の娘ヲ養子を取らうが養子の堅い人間だからマア宜いで
 がすが弟の野郎が十三なり奉公をする云ふので夫らマア深川に菓子屋へ奉公へ行つ
 てるだ婆」ハエー然うかへモウ十三だつテ早いもんだのう百「夫で何々深川の猿子橋の隅の
 田月と云ふ大かい菓子屋の家ヲ奉公をしてるだが時々マアソレ親が惡く成と見て来て
 呉れと云ふので私も野郎が厄介な成と思つて菜の有時の菜を抜いて持てつたり又茄子や胡
 瓜をきつて賣に持つて行く時やア折々店へも行くもスルトマア私が歸らうと云ふと歸ら
 ち悴が出て来て是ハ菓子屋の屑だから父さま歸つたら母親は食はせて呉れ是ハ江戸ナア菓子
 だ云つて贈すから盗み物でア悪いと云ふとナニ菓子屋ぢやア屑ハ無暗に食ふのどが己
 ア食ひ度くないから取つといて遣るのどと云つて己が又呉れる己も心痛しいうら持て来て
 婆ア「斯ういふだ云ふとナア婆さま家の婆アが悦びやアがつて江戸ナア菓子ハ奇く甘
 めエツて悦ぶだア婆」ハエーい感心な子だれう親の爲に食ひ物を贈る様な心ぢやア本が
 樂しみだアのう百「所がのう親さま忘れもしねエ去年中意外目見逢つた」ハエーい何う
 来た」ハエーい何うしただつて婆さまは押込が遣入つた」ハエーい何處へナア百「悴が行つ
 てる菓子屋へ遣入つたナア是ハ何も怖なかつたつてモウ少しの事で殺される所だつてエ
 婆」ハエーい

○ 第五十四席

百「未だ宵の事と云ふは商人の店の在家と違つて戸を締めても潜りの障子が有からぬ光が

表から見るだスルト婆さま其處をガツキ明けて二人は強盗が遣入つて菓子呉れと云ひあ
 がら跡をヒツタリメて栓を鎖つて仕舞つた店ふの悴と十七八の若い者と二人居る處へ來
 て聲を立てるとぶち斬つて仕舞ふと云ふから怖も若い者も口が利けぬスルト神妙しう亭
 主ハ何處に居る金ハ何處に有かぬへる聲を出るとぶち斬つて仕舞ふと云ふから何も魂消さ
 ぞエ夫からナエ婆さま遣入つた奴ハ泥坊で自分が縛られつけてるから人を縛る事が上手で
 スツカリ縛つて出らさない様にして中の間の柱に繫つて置て然うして奥の間へ遣入るも且
 那が奥の間で按摩取を呼んで横に成と揉せて居る其處へソツと遣入つて来てサア金エ出せ
 汝が家の大かい掛への菓子屋で金の有事の知つてるサア出せ愚頭」しやアがると據るな
 く斬つて仕舞ふぞサア金エ出せと云ふから旦那ハ魂消たの魂消ないの丸で旦那ハ口イ利かま
 ない只今上げませ」命ハ助け命丈ハ勘忍して呉と云ふと命までの取らぬ金さへ出せば
 歸るから金エ出せと云ふので其處へ躊躇で仕舞つたスルト旦那前旦那を揉で居た按摩取が
 豪傑者で其處に有た火鉢を取つて強盗の顔へソツと投つた婆」ハエーい怖ないナア、マア、ソ
 ぶつ投つて火事イ出来したかへ百「ナエ火事でナエ灰が眼小遣入つて是はオオナイと騒ぐ所
 へ按摩取が一人で二人の強盗を押へて遂に町の奉行所へ突出しと云ふのどがナニト剛い技
 摩取ぢやアないか是を前旦那も助かす悴も助かつた」夫らら前誠は有難いお禮の仕儀
 がなしと云ふ譯で物も取られぬ怪我もせぬ斯んな嬉しい事アないが前ハ何處ナア按摩取
 だと云ふと私の是から五六町先の富川町に居て按摩取を致し升旅へ出てる中ハ眼悪くて旅
 按摩取成まじと云ふから何か禮を致度もんだが何か欲しい物のないか金を遣ませませと

四十六ノ下

云ふと金入りません隠儲を救ふ人聞か當然で私ハ何と云ふ物ハ有ませんが富川町へ引越してから家内が干物ををる處が無いま因つて私も草花が好だから草花でも植て樂み度いと思ふ夫ハ少し許りの地面と井戸が欲しいと思つて居り升と云ふので旦那金持だから夫ちやア地面を買つて遣らうと云つて井戸も掘て茄子の二十本許りも植る様にして充行つたが何も彼の按摩取ハ只の人でナエ彼の強盗を押へる塩梅が只ハナエと思つて旦那が聞いたら元ハ武士だが仔細有て坊様も成まして夫から私ハ眼潰れましたが段々又罷く成まして只今でハ按摩取を致し升と云ふから何も然うさんペエ何をも只の人でナエと思つたつて私もマア一寸年始へ行つた時見とが立派な武士で成程只の按摩取でナエ黒の羽織を着て短刀を差して然うして按摩をえたり針をしり何かするつて針も中々エライもんだつて大變ハ流行るだ何でも其按摩の名ハ一徳とか何とか云つたつて「ハエー元ハ武士だつて何様な人だへ」百「何とか云つたつて忘れたン、何元ハ柳原様の家來を一旦坊さまも成て又還俗えたと云何が何ともハア年ハ四十二三を立派な男と婆「ハエー然うかナエ……ト話しをして居ると都屋も居つたが突然飛出して來ま……」大爺さんお出なさい只今承まつりませた元ハ武士で一旦出家も成まして又還俗致して按摩取も成たと云ふの名前の何と云し升か其人の顔ハ瘡痕が有り升か」百「ハイ……オヤ巡禮どんが出掛けた來た婆「ナニ是ア已が孫とよ」百「へ婆さま新んを孫が有るかへ婆「少さい時から遠方へ往つてたから貴方ア知んナエが」百「然うかねエ……額ハ瘡痕が有升よ」婆「ぢやア年ハ何で坐い升が四十位に成升か」百「エー然うさ四十モウ一二位であらうか」元ハ柳原の家來も相

五十六ノ下

應有ませんか」百「エー然う云ふ話しとナエ……之を聞くと山之助が出て來て」山「只今産で承まつりませたが其男ハ面部ハ瘡痕が御坐いまして元ハ武士で一旦出家致して其還俗した者と云ふお話しで御坐いませたが其名前の水司又市と云し升か」百「オヤ……又た巡禮どんが婆「是も己がの孫だよ」婆「婆さま前ハマア大層孫が幾人も有なア……然うだ已アもう忘れとが貴方ア云ふ通り名前だつて貴方ア能く知つてゐナア」婆「夫だヨお婆さん」婆「マア然うかへ」婆「本當だよ觀音様の御利益ハ有難いもの本當よ灼然もんだ子エ」百「エー夫ア實ハ素勇もんでモウ少しで悴もぶち斬られる所だつたが……跡で強盗を捕へ成たら一人ハ涙人者も極悪い奴だ何とか云つと元ハ櫻井の家來で夫からが化物の様な名前前で柳の木の前細細い手の團圓イヤ柳の木ハ天水桶か、然ぢやない涙人者ハ柳田典藏で細い手と云ふのは勇治とか云ふ念秧と云ふ事が分つて修處刑も成と云話した婆「……オイ是エ待て……是エ待たねへか汝か二人駈出して文吉が歸つて來ないば向ふハ泥坊を生捕る位な又市だら汝が駈ん出しても蚊細い腕で遣りそこ成てハ成ナエり是く待つちろ文吉が歸つたら相談ぶつて三人を往けよ……と云つたが難ハ逃られてハ成ぬと云ふのを富川町のコレ……と聞くや否や飛立つ許りの喜びを是から直ぐハ巡禮の姿も成て苞の中へ脇差を仕込み之を小脇に抱へ込んで飛出し深川富川町に按摩の家へ山之助ハ橋が飛込みまして愈々橋の敵討も相成升ると云ふお話しも成升一寸一ふく

第五十五席

引續き升る巡禮討のお話しで十八歳に成升るお繼十九歳に相成り升る白鳥山之助が

互ひよ姉は親の難を討ち度いと三年の間諸方を尋ねて艱難苦勞を致しましたる甲斐有て思はずも只今も百姓が來ての物語り既兩人の飛立程も嬉しく思ひ升るから妾アの留るものも聞入れぬ見相を換へ振拂つて深川富川町へ駈出し升ヌルト暫らく立て歸つこの伯父の文吉を涉坐い升婆アハ兩人が駈出してから立つ居つ心配して泣いて騒いても七十を越した婆様で御坐い升から只騒いで心配するをうら何うする事も出来ません 文「婆さま今歸りました婆」オ一文吉歸つたり已ア婆ア心配ばかりして居たが何もマア意外譯小成たやよ 文「何うしよ」へ何時でも婆様の仰山を事を云つて已ア本當小魂消るよマア静かに 婆「静かよたつてお前時刻茂左衛門が家へ來ての話しに難の水司又市が深川の富川町を接摩取も成てると云ふ事を話しよ」ヌルトお前も難も山之助も飛上つてサア是から直ぐに難を討ち行くとも云ふから待てエ向ふの強盜を取て押へる様な豪勇武士だから軟弱い汝等二人で駈ん出しても仕様がな返り討でも成てアならなエから待つちろと云ふのよ聞かないで駈ん出すから已ア出て押へ様と思つたら突轉して駈出をた追掛る事も出来なへから早く汝が歸らば宜いと心配ぶつて居たよ早く何彼しよ追つ掛けて呉んなヨ 文「是ア困つたナア夫だから已が不斷ら然う云つて置くだ二人で行ても屹度對敵も斬られもんだよしんば斬られんでも怪我アするハ受合だアから何様な事が有ても已を待つてる様よと云ふだ婆さま何故遣つたマへ婆「何故遣るたつても遣らない様よ仕様と思ふと突除て行つて留ても留らぬから仕様がよいと 文「夫ア困つたナア……コレ嘉十手前も一緒に行け二人よ怪我をさしてハ成ねへから已も直ぐも行たうら手前長く奉公して世話も成たから一緒に行け 嘉「難討ち行くたか

ら一緒に行けツ私イ参りませうナニ死んだつて構ひませんよ参りませう……ト富舎の人の正直で親切で涉坐い升から本當死ぬ量見と見えて藻刈鎌を擔いで出掛升る文吉も小長のいのを一本差しませうササと跡から飛出して餘程急ぎましたが間合せ山之助も富川町へ駈けて参り升ると其頃ハ彼處よ土屋様の下屋敷があり此方よハ松疎小人家が有ハあり升るが只今と違つて至つて人家の少ない時分で涉坐いませう成程來て見ると茂左衛門の云つた通り入口が門形ちに成まして竹の打付の開戸が片方明いて居て其處よ接摩接摩拾と云ふ標札が打つて涉坐い升是から中へ這入ると左右が少し許り島も成と其標が生垣も成て居り升夫から凡そ七八間奥の方小家が建つて居まして表の方の小さい立間様で踏込みが一間ばかり土間も成て居り升又式臺と云ふ程でハ有ませんが上り口の板間で障子が二枚立つ居り此方の方の竹の打附窓で涉坐いませう彼邊の四月二十七日頃でもモウ蚊が出るよ見ね夕景も蚊遣を焚て居る様子庭の方を見るよくだらぬ花壇が出来て居りまして其所に芥子や紫陽花などが植て有つて隣家も遠い所の蕭然い住居で涉坐い升二人ハ窮と藪邊の中から脇差を出して腰差し顔へる足元を踏んで此家の表も立ちましたの丁度日の暮掛り升る時 山「御免成りませう頼み申し升 太「ハイ誰殿へ山「アノ揉療治をなさる一徳さんハ此方で御坐い升か 太「ハイ一徳の宅と手前だが誰殿だハ此方へお這入りなさい 山「少く承まつり度う存じ升が一徳さんのお年の幾歳で御坐い升へ 太「何だ障子越しよ己の年を聞くと云ふの何だ……御申儀や調離でハ困りませ此方へお這入りなさい 山「ハイ貴方ハ何で御坐い升か頼り癒痕が涉坐い升か 太「何々……左様で涉坐る手前の頼り癒痕も有升が誰殿で

そへ山「エー元ハ橋原様の侍家来でお年の四十一入つてやい升り太「ナンヤ……ハイ私の
 年まで知つて居る面部ハ疵痕が有と仰しやるのハ何方のお方を御坐い升へ山「お前の水
 司父市で侍坐い升か太「ハイ誰殿だへ……ト水司父市と云ふ名を聞くや否や山之助ハ一刀
 を抜くより早くガラリ障子を明けながら山「姉の敵イ……と一聲一生懸命の聲を出して無
 茶苦茶切込んで来る續いてお繼が繼「己れ親覺悟をしろト鐵切聲を出した時ハ不意を
 打たれて驚きました太「コレ何を致さん人違ひをやるなど云ひながら傍ら有ました今戸焼
 の蚊遣火鉢を取つて投付ると火鉢ハ山之助と繼の肩の間をそれて向ふの柱に當つて砕け
 灰ハ八方に散亂する又山之助の突掛る所を引外して釣瓶形の烟草盆を投付け續いて湯呑茶
 碗を打付け小さい土瓶を取つて投る所を横合からお繼が親に敵覺悟をしろと突掛るのを身
 を轉して利腕を打つとバラリ持つて居た刃物を落しコレハと取らうとする所をお繼を取
 つて膝の下へ引摺寄る山之助ハ此所ぞと切込みました此方ハ何分手ぶらで付つた所幸ひ
 お繼が取落した小刀が有たらら夫を取つて太「コレ怪我を致さん人違ひを致すな能く心を
 静めよ面体を見る人違ひト二三度打流したが相手の方から無二無三打て掛るから
 太「コレ人違ひを致すなと拂ひ除きました其切尖が山之助の肩先入當ると腕が利い居る餘
 程深く斬込ました山「アアドンと山之助が臂もちを撞いたなり起上る事が出来ません山之
 助が斬らされたのを見よとお繼がワーツと其場は泣倒れました太「コレ何處へ參つて居るか
 否コレ照や狼籍者が這入つとが何處へ參つて居るかコレ早く燈光を持って參せ燈光を……此
 時女房ハ裏の井戸端で米を磨いで居りました……ジャ……と米を磨て居り餘程家

から離れて居り升るから右の驛の間にませんぞつと大聲を呼びましたから何事かと思
 つて周章家へ這入て見ると右の始末照「オヤ何う太「何うたつて今狼籍者が這入とのど何
 分間くつて分らぬから早く燈光を點けて來ト云されて女房ハ周章ながら火打箱をカタク

第五十六席

お照ハ火を打つ所が周章から中々點かないのを漸のことで蠟燭を點して照「何したのト
 見ると若い男が一人血染つて倒れて居り又一人の娘を膝の下へ引敷て居り升から照「是
 アまア何を侍坐います太「何だつて今此狼籍者が這入つたのだ……サコレ能く面体を見る
 人違ひを致すな己ハ人を過殺と覺えも無し敵と呼れて打たれる覺えも無いコレ面体を見ろ
 必を静めて面部を見ろト云それとから山之助が漸々起上つて燈光で顔を見ると成程年齢ハ
 四十一二にして色白く鼻筋通り口元が締つて眉毛の濃い散髪の撫付けで顔から小鬚が掛け
 て瘡痕が有升ナレも能く見ると顔形が違つて居り升る故山「アハ是人違ひをしたト思
 ふと太「何うじや違つて居らうナ山「ハイ誠ハ申譯が御坐いません全く人違ひで御座い升
 照「人違ひで敵と云つて斬込むとハ人違ひも程がある何程年が行かぬと云つて斬く
 仕舞つと跡で人違ひで済升か良人ハ怪我ハ有ませんか太「其様な事を云はんでも宜い早
 く其處等ハ散亂して居る火を消せト云はれて傍新造が柄杓水を汲んで蚊遣火が落ち
 處ろへ注けるとチナーと云ふ大騒ぎの時まで只泣いて居て口は利けぬれハお繼でい燈
 光の影で山之助が血に染つて居る姿を見よ繼「山之助さん氣丈して下さいよ……全く人違

の己が誤つて殺したのぢや、依つて後々愈々又市を討つ時、己が力に成て助太力をして討たせるが何か貴様や置く事があらを遠慮なく云へヨ 山「ハイ有難う有難う私の不調法から貴方、斬られて死ぬのハ決してお怒りませぬ存心せんが、只水司又市に一刀も怒りぬのが残念で、座い私親を申し升る者の元ハ御原藩で貴方も御同藩から存存じて入つしやいませうが十七年跡、家出を致しましてモウ國を出まして十九年を私が未だ生れぬ前に江戸屋敷詰り成まして夫から江戸屋敷うら行衛知れせに成ましたので段々姉と兩人で神佛を祈念して行衛を探しましたとが未だは行衛も知れず生死の程も分りませぬコレハ私の父様と事もお前小話して有若し存存生でお目よ掛る事が有たらば私のコレハの程で不覺を取つたが何卒一目お目に掛り度と云て居たと云て下さい 綱「ハイ氣丈までお呉なさいヨ 太「貴様が側を泣き手負ひが氣力が落ちておかん……コレお前の親ハ御原藩で何と云ふ名前の入だへ 山「ハイ私の祖父様が抱へて成りましたのださうで御座い升が足輕から段々御取立も成ましてお目見得近く迄成りました名ハ白島山平と申し升る者で御座い升 太「エ、何んだ貴様の親ハ白島山平……何か貴様の白島山平の倅か 山「ハイ白島山之助と申し升る者、太「オ、是ハ何も宥して呉れコレ倅貴様の親ハ山平ハ此水島太一で有るが

第五十七席

山「エ、お父様アノ貴方がと云つて二人とも膝の上で細り付く手を取つて、太「ア、面目次第も無い己が貴様の親だと云つて名乗て逢はれべき者でない實ハ非義非道の親である其方が懐妊中は江戸詰を仰付られ、江戸屋敷に居る間ハ若氣の心得違ひも屋敷を斷落する程

の心得違ひの親實ハ情けなしい事だ親らしい事も致さぬ親を悪いと恨まんぞ能く臨終に至るまで拙者も逢ひ度い懐かーいと遺言まで致しお呉れたア、面目ないが母も泣いた、ハ、ハ、ハ、姉お山も又市に討たれた、山「ハイ、有難う存じませぬ懐しう御座い升、お懐しう御座います、父上よお目に掛り度いと云つて姉さんも何様も待てお出被成つたり知れませぬ、父土が家出を被成しても屋敷に居られぬ事ハ御座いませぬが、母さんの心配まで三年目に亡きりまして私ハ幼少し姉さんも年が往まじ外ハ致方が御座いませぬ伯父さん此方へ引取らうと云つて信州白嶋の伯父さんの厄介も成て居り升る中ハ姉さんが又市の爲に斬殺されましと姉さんが死なすときにも父上様は逢はず死ぬのハ残念と一目逢ひしと云ふと、太「左様か實ハ夫程まで私を慕つて今思ひ掛なく而會致したが現在親の手で子を殺すと云ふのハ如何なる事か皆是まで非道な行ひを致した天罰主罰が罰に来つて斯様な譯ア、親として手前を己が殺すと云ふのハ實ハ情けなしい手前己を親と思はずに一方でも怒んで呉れ 山「イ、エ勿体ない事を、一人具様も事を仰しやつても仕様が御座いませぬ……アノお前さん初めてお目に掛りましたお前さんハ定めて父上さんを悪いとお恨みで御座いませうが、父上さんの悪いのでハ御座いませぬ、悉皆私が悪いので御座い升、申すハ據ころない譯で私しがお前さんの父上様を慕ひ升る故ハ父上様が御座いませぬ事も成りました夫も私の養子が得心で二人とも御座いませぬ、御座いませぬ事を出したけれど、永い旅を致して宿へ着いた、何となく、残してお出被成た御新造やお前さん方、御座いませぬと云つて私も神佛小心中お願ひと云つて、居りました何本港忍してお呉んなさい、父上様を恨まゆ小私を辱い書と

恨たてゝ呉ん成成まし太一コレ山之助今更悔を致そ譯でも無いが餘儀なく屋敷を山に
 ればあらぬに成たの武田より来た養子の重次郎と同衾を致さぬと云ふ情を……立
 る其間告口を致さる者も有る表向になれど名跡が穢れるから重次郎の情を旅費を買ふて家
 出を致した丁度懐妊中の子を生落して夏と云ふ娘を得たから漸やく十五歳まで育つて樂
 しみ致しと所が三年前信州の鳥居峠へ掛る時悪者に出逢ひ拐帯されんとする時一刃
 を抜いて切結んだが向ふ二人此方一人其時受けた瘡が新様も只今でも残つて居る娘の
 其時谷合へ落ちて遂に其儘に相果たから私も此照も實一月計りの間の愁傷して泣てば
 かり居つと終ふの眼病と相成ふかと致さなく按摩に成る揉療治を覺え迎も生涯世に出る事
 出来ぬと心得て居つた所が追々眼病も快く成て段々見える様も相成つたから同去死ぬな
 ら故郷懐かしく此江戸へ立歸つて富川町へ昨幸世帯を持ち相變らず按摩を致して居る内
 漸々の事で眼病も癒る様な事ナレども揉療治を致す様を身の上と成たから若し屋敷に者
 現られと相成らぬと思ふて屋敷近くへ参る事も出来ず如何致さうかと照も心配致して又
 旅立を致さうか但し謝罪して信州の親族の處へ参らうかと思つて居つと所が有が一人の
 娘を谷合へ落して殺したのも是も皆罰で兩人は者へ歎きを掛る様な事が身に報つたのだ今
 又其方を我手で殺すぞハアア意外事是も皆天の罰コレア頭髪を剃毀つて罪滅ぼしを致さ
 んければ世も居られぬ照一誠は傍光もて御座います山一お父様エ貴方も水司又市を捜身
 上と仰しやいました何が故貴方へ水司又市に似た様な名を附け遊せしと太一手前何も
 存せんがお祖父様元信州の者で故有て越後高田へ近き山村へ奉公アみを致して居ると成

日柳原公が山獵よみ出遊はして鳥を追て段々山の奥に入り道も迷つと御難儀の處へお祖父
 様が通り掛つて御案内をして城中へ御歸りに成たから殊敷勝と仰しやつて先君が御取立
 成た是が私の先代で其時白島太一と云ふ名前も有たが山を平らま歩行せたと云ふ所から
 山平と云ふ名を下すつた夫故先君から頂戴の名を大切に心得て名を汚すなと云ふ遺言
 が有たナレども私の實は家名を汚す不孝不義の山平ゆえ先代が頂戴の名を附けて居て成
 らぬと云ふので信州水内郡の水と白島村の島の字を取つて苗字と致し是は父の舊名太一を
 各乗て水島太一と致したが今と成て見ると此水島太一と云ふ姓名を附けなければ新様な間
 違ひも有るは是も昔若い時分から罪を斯う成のであらうアア恐るべき事であるコレ梓
 手前ナア何彼しと助け度いざ實の逆も助からぬ事も存じ居らうが後々の事ハハ心を殘さ
 ず往生致せ縁有て手前の家内も成て居るお様と云ふ此娘の私が引取つて劍術を仕込み手前
 の爲にハハ敵に當る水司又市を探して峠度敵を討たせるから心を殘さず往生致せヨ山一
 ハハハハ有難う逢ひ度いと思ふお父様も目も掛りお父様の手も掛つて死
 ませれば何も心を殘す事ハ御座いませんコレお少しの間でも何厄介も成た伯父さんや
 婆さん何卒宜しくお前云つてお呉れよハハ山之助さん氣丈しと下さいヨお前さんが
 死ねば私ハ此世も生きて居らませんト山之助も取替つて泣けるから堪へ兼ねる照も伏す
 まま水島太一も膝の上で手を置かすアアハハと膝へ頭が落ちる……エト墓所の方から
 大きな聲で「伊豆屋成まし」

六十七ノ下

本「何だへ文」へエー、眞平侍免を棄り升太「何も喫驚る誰さへ文」私に此處も居るお嬢の
 實の伯父を百姓文吉と申さまは私に今日餘處へ行つて先刻家へ歸ると敵討へ行つたと云ひ
 升がら家の男を連れて駈けて参りまゝが容子が知らぬ其處等でも聞くと此家だと云ふか
 ら濟まぬ様だが病と這入つて裏へ廻つて容子を聞いて居り升と人違ひだ〜と云ふ聲が毛
 るからハテと思つて聞いて居りまゝたが間違ひとの云ひながら幼少時分に別れと云ふ前様の
 見方を貴方が知らぬいと云ひながらハア斬て殺せと云ふの若い時分の罪と懺悔する其
 の心持を考へ升と我慢一様と思ひまゝたがツイ泣たでぐんを何も意外間違ひも成りました
 コレ嘉十モウ録さんさアぶつ放つて仕舞へ太「何も恥かしいことかお聞入つて面目大
 第も御座いません文」何うか助かり様か有ませうか太「逆も助かり升まいとの存じ升が此處
 へ生憎療治を致す者も御座らぬ手前少々の傷を縫ふ事も心得て居りましたがツイ歌き小粉
 れて…何しろ焼酎で傷口を洗ひませう山「伯父様能く来て下さつと云ふ聲も絶えず脚
 座い升から太「氣丈しろ今傷口を洗ふぞよト云ふり山「此の財の最う目も眩く成升から片方
 山平は手を振り片方のお嬢の手を握つて其儘山之助の呼吸の絶えましたからお嬢も文吉
 も聲を擧げて泣倒れまゝたが太「幾ら歎いても致し方が無い私が親と知れてハパツとして
 上屋敷へ知れての相成らぬから何ぞ親で無い事致し度い夫よの前方が確かな人ども
 依つて隣と間違へて新様〜ふ成ると云ふ事を細かよ訴へて検視を受けんければ成らぬ
 たらト是から百姓文吉山之助の女房お嬢が證人で直ぐに細かに認めて訴へ出ましたから早
 速検視が出張も成て傷口を収めましたが現在殺された山之助の女房と伯父兩人が證人で全

七十七ノ下

たぐ入道ひで新様な事相成ましたと云ふからさしたる御咎も御座いませんで許しました
 其跡の遺骸の文吉が引取りまじし別よ寺もありませんから小岩川村の菩提所へ葬り又山平
 の伯父と相談して兎も角もお嬢を引取り剣術を仕込み草を分るも水司又市を授け出して親
 の隣を討たせんじんば成らぬと深川の富川町へお嬢を連れて参り是から山平の手許に置い
 て剣術を仕込み升る所が親の隣を討つと云ふ志の好い娘で御座い升から兩親仕へて賦
 又奉行に致しませ又お照も山平も實の子の如くお嬢を愛しまは是から竹刀を買つて來
 圓は有れば前の畑げは廷を敷きまゝて剣術を教へ升るが親の隣は隣夫の隣を探して水司
 又市を討たんければ成らぬと云ふ一心を御座い升から教へ様も教へ様覺ゆる方も尋常で無
 いから段々〜と劍術が出来て腕も宜くなり、若し貴方を又市と心得まして斬斬と込んど
 ら何うも受被成と云ふ位、人の精神の恐ろしいものを段々山平でも受け兼る程の腕に成ま
 したから山平も喜びまじし山「先づ退く腕も出来て来たが未熟兵法の敗れを取るを云ふ聲
 も有から万一途中で水司又市も出遇つても一人で敵と名乗つて斬掛る事ハ決して成らぬ相
 手の水司又市ハ今の何様な身の上か知れんが何をも腕の優れた奴と云ふ依つて決して一人で行
 乗掛る事ハ成ぬぞと際て云付て有升毎日朝の早く巡禮の姿で家を出して淺草に御音
 へ参詣を致し市中も立て御詠歌を唄つての報酬を受けて歸り月夜に時々に夜返り成ても裏の
 畑に廷を敷いて一生懸命に劍術に稽古を致し升スルト近處でハ不思議に思ひまして「ア
 ノ按摩の家ハ餘程變つてるぜ巡禮の娘を買つたとなア妙な者を買やアがったナアでも腕ハ
 餘程宜いよ違ひ無い無暗に劍術を教へるんだが夫も夜中もドン〜初めやアがる彼奴ハ

下 八十七

修行人出て家も居りません山平も別は用事が無いから休息を居る所へ這入つて来ましたの
の土屋様の足輕中村久治と申す人久「先生」山「誰殿ですへ久」エ！中村久治でござりませ
先日の大きき山「エ！貴方の先日急に汚用で揉掛に成て未だ腰の方丈が残つて居りました
久イヤモウ私の酒の飲ませ外は樂みも無いのでマア甘い物でも食ひ茶の一杯も飲む位が何
まりの樂み夫も私のマア此疝氣が有るので疝氣を揉れる心持の堪へられぬ湯は這入つて
から横に成て疝氣を揉れるのが何より樂みだが先生の様の者さからと思つて安く揉ん
で下さるんで……先生は柔術劍術も餘程上達と云ふ事を聞て居り升が何も普通の先生で無
い儘が去年でござしたか田月と云ふ菓子屋で盜賊を押へ爲成たつて私の屋敷でも苛い評判で
チエ山「ナエ出来ア致しませんが幸ひも盜賊が弱かつたから……コレ照や湯茶を上げる……
……是やア話らぬ菓子ですが丁度買ひましたから召し取るなら久「イヤ是は有難い、先生の處の
……茶の宜ま菓子までも下さる、有難いと云つて毎度噂を致し升何卒又少し療治を願ひませ
うか山「エ！御屋敷も御大層でござりかち御家來衆も噂多い事で御座いませうが湯指南番の
難殿でござへ久「ナニ杉村内膳を云つて一月流るハマア隨分上達者と云ふ事で山「エ成
程杉村内膳柔術の……成程流川流の小江田と云ふのが湯指南番で成程アレハ老人だか餘
程流川流は名人と云ふ事を聞きました……成程して強い御家來衆も有事でござりナア 久「澤
山ある上ふ其上も……抱へるのハ全体様様武張つて被爲入のハ武藝の道が何より
お好みなア先年此常陸の土浦の城内へ御抱へ成ました者が有りました是ハ元修行人と云ふ

ずす事だが餘移力量の勝れた者で何位力量が有か分らぬと云ふ事と山「ハ、ア大しと力量
は有者を抱へ成ましたり

第五十九席

下 八十七

久「エ！抱へ成ましたと云ふのハ字陀の淺間山に北條彦五郎といふ泥棒が隠れて居て
是ハ二十五人も手下に有るのハ合力と云ふ名を附け居廻りの豪家や寺院へ強盜歩行
き澤山な金を奪取の何れも是ハ水戸笠間邊までも暴走から助けて置いて成ぬと云ふので
城中の者が評議をした所が何れも八州ハ役も立たぬから早川様を押へ懸と云ふ事に成て就き
かしてハ凡そ二百人も人敷が押出しました押出し淺間山を十分取巻いて見た所が北條
彦五郎ハ岩穴の中に住んで居る其穴の入口が小さくて中へ這入るとズツと廣くて其處に家
を掃へて住居として居り又筑波口の方も小さい岩穴が有る是からは脱ける様も成て居
るから此方の方を固めて居ても此方の方から谷へ下りて水を汲んだり或ハ百姓家で挽割を
竊み米其外の食物を選んで隠れて居り升、サ是でハ成ぬと鎗鐵砲を持って向つた所が穴の中
が斯う成る、鐵砲丸が通らぬから何様な事をして往かぬ所でもツア水攻めするより外
ハ仕方が無いと云つてドン／＼水を入れて見ると下へ脱て落る處が有るから遠く水攻めも無
駄も成て如何したら宜からうと只淺間山を多勢で取巻居る丈チャが肝腎の彦五郎ハ裏穴
から脱けて相變らぬ人を殺したり追劍を爲の是ハ殆ど重役が困つて居る所一人の修
行人が來て貴君方ハ幾ら此處を取巻居ても北條彦五郎を取押へる事ハ出来ません殊ハ北
條彦五郎ハ大に無雙で二十五人方も有と云ふ事だから迎も往けぬ依て御引揚なさい

十八ノ下

と云ふから引揚ら知何するを云ふを私し一人は盗賊取押へ方を仰付けられ、ば有難いと云ふのゝ然らば修行者の何位な方が者かと云ふを私し、力があり升何卒盗取押へを仰付けられたいと云ふうら段々評議をいた所が何せ今迄の様は眼張て居ても出るか出ないか知れぬから番人が取押へると云ふなら遣らして見ろと居ふ被仰り付て是から其修行者に取押へを云ひ付けた所が其奴れ云ふよ、手前の脊負つた筈よ目方が無くて、成ぬから鐵の棒を入れる丈の手當を呉れと云ふから多分の手當を遣ると全く金を取つて逃げる者でも無く夫から手當の金で鐵の重い棒を買ひ筈の中へ入れて彼の北條彦五郎の隠れて居ると云ふ穴の側へ行つて其處へ筈を放り出して勢れた振をして修行者が居ると或月夜の晩彦五郎の手下が穴の側へ見張り出て見ると修行者が居るから「コレ何うし」私し「歩行けません」「何う云ふ譯で歩行けぬ」「道は勞れて歩行けませんらか寐て居りませと云ふと」「此處は居て成ぬから行け」「行くは行かないにも荷物が脊負へません」「脊負へぬら脊負せて遣らうと云ふので手下の奴が動かさうとしたら中々動かぬから是は何云ふ重い物だか是を脊負の剛勇者だと云つて手下の者が皆寄つたが持てぬから「手前は脊負て歩行か」「歩行け升か此通り足を踵らしたから仕様が有ませんと云ふので足を出して見せると巧く拵へて膏藥を貼つて居る」「是だから擔げませんと云ふうら」「手前の何位ぬ力がある」「私し五十人力あると云ふと手下の奴が「夫ア處だらう」「ナニ處ぢやア無い」「イヤ處と處の泥坊は初まりどが是ア手前が處と「イヤ決して處が無いと云ふ争ひも成と北條彦五郎がナニ此位の物を脊負て馳けぬ事が有ものかと云ふので連尺を附けて脊負つて立チヤアどつと大力無雙の奴だから

十八ノ下

脊負つて立ちの立つた所が歩行けあいでヤツト踰限五六足歩行くと修行者が後から突飛したからグシヤツと彦五郎が倒れるとあそろしい目方の物が上へ載つたから動きも引きも出さないスルト修行者は首領がたれたと云ふから夫ヤアと鉦太鼓で捕人が行つて手下の奴を押へて吟味せると何處から這入つて何處から脱けると云ふ事はスツバヤ白狀は及んぞか漸々の事で淺間山の盜賊を掃除したと云ふので是から其修行者の劍術も心得て居るとらうから當家へ抱へると云ふ事も成て是まで櫻川の庵室小居つとから苗字を櫻川と云つと五十石ふか抱ふ成たが知恵もあり劍術も出来て餘程伶俐い奴だ其荷を拵へて工合の旨いもので動けない様にする工夫が巧いものぢやアないか山「へエ夫の全く修行者で六都でげすか久「イヤ段々聞いたら何でも尋常な奴で無い人の噂でも何も尋常漢で無い大かた長崎邊を無いかと云ふ評判を立たら當人が夫ならお話しを致し升が實に私し元ハ武士で御原齋で居坐い升と云つたさうだが面部は瘡痕を受けた總髮の剛勇奴を山「夫の何でげすか名いなんど久「名ハ櫻川と云ふ處は居つた者で櫻川又市と云ふ山「へエ櫻川と云ふ處の者で久「イヤエ櫻川の庵室に居つたから夫を姓として櫻川又市と云ふので面部に瘡痕がありエ一年ハ四十一二で立派な逞しい骨太の剛勇奴で山「左様でげすか夫ア立派な者をげすなア何も其才智も由る敷者だが私ハ何卒去て其方を見度いものをげすナ久「ナニ時々下屋敷へも来升よ山「只今の何方よ久「今の小川町の上屋敷に居り升山「若し下屋敷へも出成たら一寸教へて下さいませんか、何れ夫ア尋常漢で有ませんナア是ア見度いな何云ふ男か一度ハ見て置度いが何卒一寸キエ久「夫ア造作も無い事だから知らせませう山「チャア一寸知ら

せて下さい別よの禮の致し方無いが貴方の非番は時無代療治をして好い茶を煎れ菓子を上る位の事致し升から久「夫ハハヤ其様な旨い事無い是ア有難いが夫ハ茶と菓子ばかりで療治の代を取らぬと云ふことア有ませ今度來たら急度知らせ升が滅多此方へ來ません山「何卒知らせて久「エー宜しい山「サア御療治と云ふので療治を致して旨い菓子などを食させて歸しました跡で山平ハ山「急度夫と相違ない何卒して見届して遣り度いもの中村頼んで櫻川の來るのを待つて居ると天命免れ難く十月十五日に猿子橋を渡ると水司又市と出遇ひ升ると云ふ是から急巡禮敵討のお話しで居ります

○第六十席

借圖ら愛も白島山平が難の手掛りを開ましうらら難が歸つて來るのを待つて話しを致すと飛立程は悦び「少しも早く土屋様の小屋敷へ参つてと云ふを山「イヤ未だ確と認めも付ぬうち先の様人違をして成ぬ人ハ随分似た者もあり面部は疵の有者も有から先達てめ人違ひも感て是から能く心を沈着確と面休を認めてから静かに討んければ成ぬ殊も汝の術が出来てもまた年効がなし年も往かぬから其瘦腕でハ逆も又市ハ及さぬ私も共討んで成ぬ殊に照れ爲小ハ兄イ様仇であり年頃心掛て居る事ゆゑ前一人で討つ譯ハ往かぬに依つて能く心を静めて又市が下屋敷へ参る時認めて私が討せるからと首聞て置ましとが難ハ是を聞てからの何卒早く又市を見出し度と心得土屋様の長屋下を御詠歌を唄つて日々窓より首を出る者容子を窺ひます所が恰も十月の十五日の日で御坐います淺草の觀音へ參詣を致して彼處から下谷へ出まし本郷へ上り夫れうら白山へ出

て白山を流して湯殿坂を下り小石川極樂水自願院の和尚小逢つて恰も親父の祥月命日聊か寸志を出して何卒御經を上て下さいと云ふ和尚も巡禮の身上も脚でも錢を出して佛の回向をまて呉れと云ふのハ感心な志と思ひましたから懇切佛様へ回向を致します御經の問待つて居り升ると和尚が茶を點たり菓子を出したり又精進料理で旨い合で馳走も成まして是から極樂水を出まして彼處うら登岐坂の下へ出て参り水道橋を渡り小川町へ來て土屋様の下屋敷の長屋下を御詠歌を唄つて方一して窓より報謝を首を出す者が又首の有たら如何致さうと八方へ眼を着て窓下を歩行と十月十五日の小春風で暖いのみスツリ環巾を面部を隠しと武士と外も二人都合三人連の武士が通用門を出まして小川町へ掛るから顔を隠して居るが方一また彼が又市でハあいかと段々見え隠れし跡を追て参り弁本れども頼と容子が分りませんスルト伊賀裏迄來ると一人の武士ハ別れ跡ハ二人も成りして土「ア、大きに熱う御坐いましたと云ふ是ハ成程熱い譯で氣候がホカク暖かいハ頭巾を冠つて居ての堪らん譯で居ります、頼て頭巾を取ると總髮の撫付で頼ハ新う紙がある色黒く丈高く頬から頬へ一杯又鬚が生て居る逞しい顔色の粉れもない水司又市で居るは升から、親の難と直し討掛らうと思つたがまだ連の武士が一人居り升るから段々見え隠れに付て参ると濱町へ出まして彼處から大橋を渡り升ると又一人ハ武士ハ挨拶を致して別れ御船藏前へ掛つて六間堀の方へ曲り升ると水司又市ハ一人も成まて深川の元町へ掛つて来たから最う耐忍ハ出來ません先へ通り抜ると浅草内の通り片側ハ粗倉で片側町へ成て居りまして竹細工屋瀬戸物屋烟草屋が軒を並べて居り其頃田月堂と云ふ菓子屋があら御座

出抜て猿子橋に掛り升ると此方の猿子橋の際に不潔い足代を掛て管が掛つて居て粉倉の壁直し其下は粘土が有つて一方小の芥が切てあり職人も大勢這入つて居るがモウ日が西に傾むきましたから職人も仕事を仕舞かけて居り升なれども夕日の一ぱい映す其中は空の時雨で曇つて少し暗く成ました所で笠を取て刃除小刀を引抜ながら「親の舞、と名乗りながらヒッパリ振冠つた時ハ水司又市も驚いたの驚かないの喫驚致して少し後へ退る往來の者も驚きまゝた人中で始まつたから、ハア、と皆跡へ下りました。恰も此時白鳥山平の少も心奪ませんから療治を致して一人は客を歸しと跡で茶を點て一服遣て居り升ると入口から年四十二三の色の淺黒い女が半天を着て居りましたが暖かいから脱まゝて包へ入れて置し女「少しの頼みで御座い升が雪隠を拜借致し度う御坐い升照「ハイ其處の不潔御坐い升が何あらふ上り被成つて女「イ、エ不潔處が心配が無くつて宜敷御坐い升、とツカ／＼と雪隠へ這入り頓て出て參つて女「アノ少しの冷水を頂き度いもんで御坐い升此處は有のを買いても宜しう御坐いませうか照「其處にも有升が不潔御坐い升うら是で……サア水を、と柄杓を水を出すから女「有難う御坐い升、と手は水を受ながら顔を見て女「チャ照「チャアアの前へ金かへ金「アア誠なる嬢様照「ナニを嬢様處でございぬ婆ア機だヨ「誠は暫く照「ア思掛けない……アノ旦那様金が山「ナニ照「アノ夫れ團子屋の金が金「さや／＼アノ山平機誠は何もマア貴方向遊をしたかと存じて居りましたが能くまア夫きでも……私何うも見る掛申した方だと考へて居りましたが貴方の方がお忘れ遊とさすは金と波仰つて下をつと照「私の彼の時の元服前で見忘れたらうが私の何うも見と機だと思ひお前が口を利く

聲がらで早く知れましとヨ金「誠小何うも思ひ掛ないマア／＼旦那様機嫌宜敷何うもて子此處に居らつしやるので御坐い升へ山「ハイ長い間旅をして久しく播州の方へ參つて少しの間世帯を持って居り種々流浪致し眼病も成てから故郷懐しく實の去年から此處へ來り世帯を持って居る金「何うも些とも存じませぬヨ尤も此邊の方へハ減多の參りませんけれども子ハ嬢様アツイハ嬢様と云てアノ新造様へ私の亭主の傳次と申し升者の旅魚屋で御座い升が商賣も出ても博奕が好きで蕩樂許として女房を置去り同僚音も沙汰も爲せ居ましたが旅魚屋の仲間の者が歸つて來り聞きましたら三年跡に信州の葉廣山とか村とか云ふ處で悪い事をして切殺されたと聞きました夫れ知らぬ一旦亭主にしましたから私の馬鹿が夫れを待と云ふ諺の通りモウ踊るかど待て居りましたが三年立ても音沙汰が無い所へ夫れを聞てから日ハ分りませぬが私もマア出た日を命日として猿江のお寺へ今日お墓參りをして其處に埋めた譯も有ませんけとせもマア志しの御經を上げて歸つて來る道で貴方にお目に掛るとい本當にマア思ひ掛ない事で子「照「眞實にチエだがお前の矢張アノ上野町に居るのかへ

○第六十一席

金「ハイ上野町に居りましたが彼の近邊の家がゴチャ／＼して居て往けませんし恰も白山の懸念なものが居りまして白山の方の團子坂の方から染井ヤ王子へ行人で人通りも有り升し……夫れ店賃も賤いと申すので御坐い升から只今でハ白山へ引越しまして矢張團子茶屋をして居り升がチエ何れも何で御坐い升子何れも此邊の方へお参りませぬ山「サヤ

ア何か屋敷の様子を前御存ぞたらうが武田ヤ何か無事か、照「親父様や阿母様の御社
 健かへ……今以て歸る事も出来ない身の上で、金「ア、新造様も大旦那様も亡れ小成
 した夫に御養子の未だよる獨身で御新造も持て、貴嬢が御出遊としてから跡で書置が御
 造様の手箱の抽斗から出ましたので是の親不孝だ縦令兄の敵を討と云うも女一人を討る物
 ぢや無殊小良人を置か家出をしそへ養子に重二郎も濟ない不埒ことと云つて新造の一
 着御心配遊して御神圖を取つたり御祈禱を被成たりしました夫から二年半許を經まして
 御新造が亡れなす夫から恰と四年程經て大旦那様も亡れ照「オヤマア然かへ心得違
 せの云ながら親の死際も逢れぬのい若く不幸の罰だ子……私も家を出る時よの身重だ
 つたが翌年正月分婉にんだヨ金「然う……懐妊でしと子照「夫が女の子で旅で難儀をして
 がちも小兒を樂み何うしてと思つて播州の知己の處へ行て身を隠し少々の内職をして
 世帯を持居た所が其處も思ふ様に行かゆ夫から又長い旅をして其娘も十五才まで育てた
 が亡なつたヨ金「ヘエーお十五まで夫の嘸マア落胆遊ばしたで御坐いませうか力落して御
 坐いませう御丹精甲斐も無い事でチエ照「マア種々話しも聞度うら少し……山「何とか表が
 難敷がなんだ、と云つて開いて居るとマラ……と人通りがして甲乙「ナニ今敵討が
 初まつた巡禮の娘と大兵な武士と切合が初まつとワーン……と云つと人が駈けて通るから
 山平ハ驚きまして山「コレ何を、ソレ大小を出しな金「何を御坐い升へ山「何でも宜敷から大
 小を……さんや前此處に居て……お前居てお呉さ二人で往きければあらんから留守居を
 きて金「何う被成さんで御坐い升へ山「何をきつと所ぢヤア無い何事も宜しいら早く、と

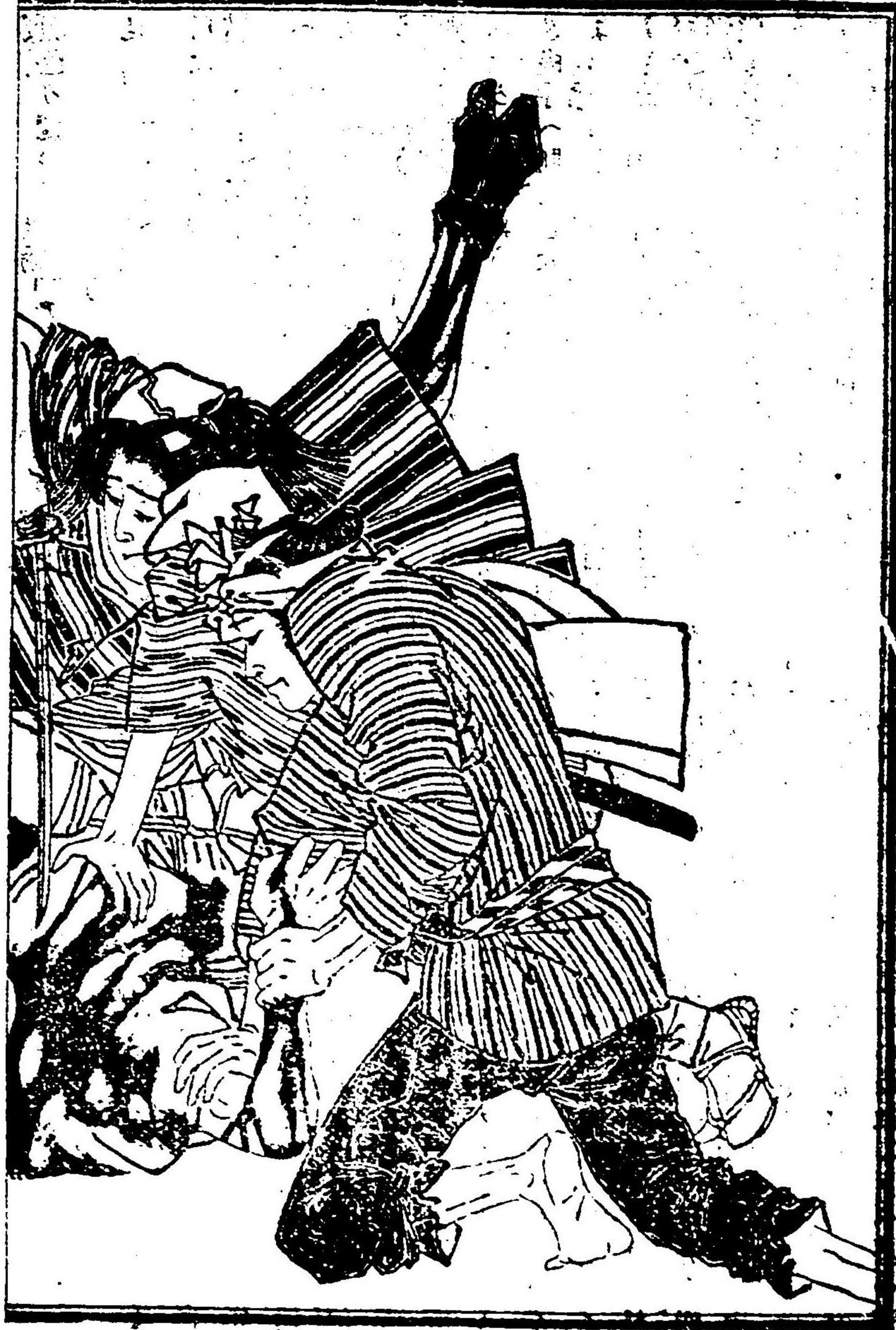
是から裾を端折つて飛出したが此方の餘程刻限が過れて居り升。お話し元へ戻りまして
 お親が親の敵と切かけました時の水司又市も驚いて一間許り飛退つて長いのを引抜き又「
 狼藉者め、と云ふと往來の者ハドヤドヤ後へ退る商人家でハドカ……と奥居たものが
 見世の鼻ッ先へ駈出して見とが少し怖いから事よ依たら再び奥へ遁込ふと云ふのを拾
 隠病を犬が魚を狙らふ様にして見て居る四邊の肅然として水を撒いた様お親ハ鐵切聲親の
 敵と呼んで振冠つたなり面体も唇の色も變つて来る然うなる女でも男でも變り無いも
 のぞ「私を見忘れのたまひ藤屋七兵衛ハ娘お繼と汝ハ永禪和尚で今の櫻川又市と云ふ
 おな、と云ふ其聲がヒンと響く其時少し跡へ下つて又市が「何と覺わぬないワ左様な者
 でもない、と云つても覺わぬが有るもの御坐い升から其所の相手が女ながら心は憶さる來て
 段々跡へ下るマルチ段々見物の人が群集つて甲「何んでびす乙「今私ハ陶器屋へ買物よ來て
 見て居ると突然に親の敵と云ふからハツと跡へ下らうと思ふとハツと土瓶を放したから
 の通り石の上へ落ちて毀れてしまひましたア驚きまよと何うも彼の娘をばすナ甲「ヘエ
 彼の娘が敵討だと云つて立派な武士を狙ふのですか感心な娘でまだ十七八で美しい女だ今
 一生懸命よ成つて居るから顔付が可畏いが彼れが笑へば美女だ乙「ヘエ夫ハ感心ア云ふ
 難の姿よ成つて居るが矢張旗本の御姫様か何かで劍術を知らんでハ彼の大兵を武士よ切
 ちれアしないダが女一人チヤア危ないア誰か出れ宜なア丙「危ないら無暗よ出る奴
 ハ有リアしません甲「だつて敵人の大兵な武士此方の頼弱い娘で……ア、危険だ、と見物
 ツイノ、と云ふ丙「オイ早く差配人へ告せろ丁「己まの差配人での間よ合はない何處の差配

人さんへ然う云ふのだ丙「差配人さんが問ふ合てぬちら自身番へ知らせる…アアア！
 ねへ〜…敵討の何とか云ましたか甲「何を云つたか聞かやアしない乙「向とか云つたつ
 け汝を討んと十八年甲「何を云やアがる騒ぐ敷雑言チャア往けねへ乙「ア！危ねへ〜、と
 拳を握つて見て居る人へ人情で御坐い升うら何ぞして娘よ勝せたい娘よ怪我をさし度ない
 と見ず知らずの者も心配し橋の袂一杯人が溜つて居り升が中々助太刀も出る者有りま
 せん甲「向ふよ武士が二人立て見て居るが彼奴が助太刀も出さうなもんだ何と覗いて居や
 アがる本當よ不人情な武士だアノ畜生打擲、とワイ〜云ふうちよ「親れ敵思ひ知つた
 か〜と一足踏込で切下ぎのをチャリ〜と二三度合せとが一步下つて相上段に成ました、能
 く上段は構へると正眼小若るとか申し升が中々劔術は替古との違つて真劔で敵を討ふと云
 ふ時よ成と只斬らうと云ふ念よ外へ御座いませんうら決して青眼だの中段杯と云ふ事ハ
 ない唯双方相上段よ振上と斬らう〜と云ふ心で透を覘ふ水司又市も眼ハ血走つて此小娘
 只一撃と思ひましたが一心疑た孝女の太刀筋此の年四月から十月まで習つたのだが一生懸
 命と云ふもの強いもので少まも斬込も透がないうら、此奴中々劔術が出来ぬ奴だナと思
 ひ又市も油断をまませんで透が有ら逃げ様かあると云ふ横着な根生が出来まして脚へ段々
 下る此方も油断のあいなれども年効がないのいかぬもので段々呼吸遣ひが荒々なつて勢
 れて来るから最早死もの狂ひで「思ひ知つたか又市、と飛込んで切込のをすを受け引く所
 を附け入つて来るから一足二足後へ下ると傍の粘土よ片足踏かけたから危ふひりな仰向よ
 る膠が粘土の上よ倒れる所を得とと又市が振冠つて一打よ切らうとする時大勢の見物れ

顔色が變つて見物「ア、と思はせ聲を上げました

○第六十二席

見物「ア、危へ誰か助太刀か出さうなものどと云て居が誰も出る者ハ無いスルト倒よ立て
 居たのハ泥工の宰取で筒袖の長い半天を片端折にきて二重廻りの三尺をソめ洗ひ酒えた首
 筋の股引を手繰上げて既足で泥さらけの宰取棒を持って可畏いから跡へ下つて居たが今鼻の先
 へ巡禮が倒れ大兵の武士が振冠つて切らうとをるから人情で怖いのを忘れて宰取棒で水司
 又市の横ッ面をポント打た見物「ア、ソラ出た〜助太刀が出た誰か出すよハ居ないア何
 うも有難う御座い升イ、エ中々一人を討る譯がないアレハ姿を變して居ても急度旗本の
 殿様だ有難い〜、と喜こびワア〜と云ふ又市の横ッ面を打れるとベツマ〜顔よ泥が着
 いたがヨモヤ斯う云ふ様が出様とハ思ひぬ所だから是非轉動したと見ねバア〜
 と横手へ駈出したすると宰取の追駈て行つて足を一ツ打拂ふとバマ〜倒ましました直ぐ
 よ起上ろうとをる處を又た打ますと眉間先からドットと血が流れるスルト見物の尙ワイ
 云ふ見物「ソラ逃げた殿打〜と云ふ奴が又石を投る彌次馬が有るので又市ハ眼が
 眩で田月堂と云ふ菓子屋へ駈込だから菓子屋でハ驚ろきまた見世の起則へ出て旦那も内
 儀も見て居る處へ白刃を提た泥だらけの武士が駈込だからワツと驚いて奥へ逃込まうとを
 る機轉に蒸しよとの饅頭の蒸籠を轉す煎餅の壺が落ちて今坂が轉がり出ると云ふ大騒ぎ商
 人の見世先ハ揚板よ成て居て薄縁が敷てある夫へ踏掛ると天命と云ひながら何う云ふ機
 轉か揚板はぞれ踏外して薄縁を天窓の上から冠つとよりドツと又市の揚板の下へ落ち



下へ得たりと云ふは、天念思ひ知らず、を上り力に任し、コナツマからウーンと苦む
ルト嬉しがつて左官の宰相が来まして、宰相「此野郎、と無暗ふ擲る處へ人を分て駈て來
十九ノ下 十たの白島山平山「巡禮の娘を繼とや娘の何處に居り升か、ア一親父様山「オー、

無いか、繼「イー、怪我の致せぬ首尾能討留りした山「ア一夫の感服録の又市の何處に居る
「標の下に居りませ山「標の下に……チャア標の下へ隠れたか、繼「イー、エ只今落ちまじ
から其處を上から突ましたれ山「然らう、ヤイ出る、と頭髪を取て、と引出し升
と今コナられたの急處の深手、ウーン、と云ふと田月堂の主人のベタ、と腰が抜て奥
へ逃る事も出来ません山平が是を見る、と地面まで買て呉れた田月堂の主人が鼻の先は居る
から山「是の何うも御見世を汚しまして何とも御迷惑で御座いませうが、是の手前娘で先達
て鳥渡を話しを致し、ナ、が全く親の仇討に相違御座いません、委しい事、跡で御話しを致
し升が決して御迷惑の懸ませんから御心配なくと云つと、田月堂の主人の中口が利けませ
ん、田月の主「エ……ア……ン……ン……ン御立派な事で御座い升ト泣聲を出してヤット云ひまし
と山「サア是れへ出るは參れ……コレ見忘のせぬ大分、汝も年を取たが此不屈者め汝が
今ま活居るの神佛が思いかと思つて居た此惡人め汝の能くも乃公の娘のおやまを先
年信州白島村に於て殺害して逐電致したナ夫、汝の屋敷を出ると七軒町の曲り角で中根
善之進を討て立退る、汝は相違ない其方の常々持て居た落着の扇子が落ちて居たから、繼
其方を知て居れどなれども確かな證がないうら其儘打捨置れのであるが小女は討たれ

一十九ノ下

る位の事だから最早ドウも其方助かりはしないサア汝も武士だから隠さず善之進を討つた
ら討つたと云へ云とぬ時、於て五分試しふしても言せざるサア云はんか、と面を土ま
付けられ苦しいから又「手前殺した相違御座らんと云ふのがヤット云へた山「兼て一
人で手出しをしての成らぬと云つて置い、が前一人を此奴を能く討たナ、ハハ此處よ
る居で被成まを方様が私が轉倒ましてモウ殺されるばかりの處へ助太刀を被成て下すつ
たので何卒此方様も親父様の禮を被仰て山「此方様が……何うもア宰相「ハア誠は何
も御芽出度御座い升ナニ私の側へ立居る見兼ねもんをからボカリ一つ極るを驚いて逃
げる所を又毆打たんだかア宜い塩梅で……お前さんの此方の親父で山「エー何うも恐入
ました只今、然らう云ふ御身形だが前、の然るべき御身の上の御方を存じ升左もなく腕が
あけれ、中、又市を一撃する討被成事の出来ぬ事、なエー御尊名、何と被仰か必也然るべ
き御方で御坐いませり宰相「ウーン、ナニ私の彌次馬で山「矢島様と仰しやい升か宰相「ンナ
エ矢島様ぢやアね、只私の見兼ねたからボカリを極るので……お前さんの親の隣だつて親が
在るチャアね、か山「イヤ、是の手前養女で御座る實父の湯島六丁目の糸問屋藤屋七兵衛と
申す其親が討れた故、親の隣と申ので只今、手前の娘を致して居り升宰相「エー藤屋七
兵衛、アイ夫ぢやア何か妹の繼か繼「ア、レ、ア何もお前、兄さんの正太郎様を御座い升か

大團圓

正「サ、正太郎だ……何も大きくあつた此畜生親父の殺されたか……エー、ナニ高
岡で然うか、己ア九才の特別れ、仕舞たから顔も碌そつばう覺わやアしね、位だから手前の

下度親父を殺した奴を殺すぞ云ふナア是れが本當の佛様の引合せで敵討をするてエレハ
 ……何う云ふ譯をいふぞ山一譯を申せよ長い事で御座る兼て噂も聞きましたたが貴方が正太郎
 ……で葛西の文吉殿の方へ御厄介に成て被爲入た正……彼れの叔父で……お探向か小岩
 ……川のお婆アさんの處へ行てエからお婆アさんよ己の詫言して呉んねへ親父の敵を討つ助太
 ……刀をしたら云ふ廉で詫言をして呉ねへ、己アモウ腹一杯借盡して婆アさんも愛想が盡て寄
 ……附ねへと云ふので己も行ける義理の無からナア土浦へ行て隠ふつて居たが其中一箇の吹出
 ……す歸る事も出来ぬ夫れからマア漸どの事々因幡町の棟梁の處へ轉がり込んだが一人前出
 ……た仕事も身体が利かねへから宰取りを去て今日始めて手傳ふ出て然うして妹も遇て云ふ
 ……ナア不思議だ星ア神様の御引合せよ道へ無へ向も大きく成やアがつたナア此畜生幼少時分
 ……別れて知れやアしねへ本當に藤屋の娘ウチイテ見ヤ……是をふ前さんの處の子よまごの
 ……か……一廻り廻れ、杯と云ふ山一誠は是の思掛けない事で向も其死んだ七兵衛殿れお引御
 ……せと被仰るの御尤もなと實の私之助と申す者を三年跡から巡禮を致して長い間旅路
 ……の憂苦勞を重ね漸く今日仇を討ました山一之助の先達仔細有て亡くなりました夫故も手前
 ……杯の縁故引取り娘を致して手前が御術を仕込まして何やら斯うやら小太刀持持も電に
 ……大第願入思ひ掛ない事で葛西の文吉様にもお世話お成ましたから手前同道致してお詫言
 ……参りませうがマア兎も角も敵の……エ一人が立つて成ぬナア正……私一本刀山一イヤ貴方
 ……の不兄イもでも初太刀の成ませんお婆の七年以來親の仇を討度と心に掛升たから

大刀で貴方の兄様でも跡ですヨ正「兄でもカアモウ面目次第もねへ、マアア跡で遣つ付けや
 ……せう此様を嬉し事ア御座エヤせん……何でエ然う立て見やアおんナ彼地へ行け何と笠持
 ……めエ乃公の親爺で泣のじやアねへ此畜生……早く遣付て山一ナア早と違つ付てお婆
 ……でも長く苦痛をさして殺と殺が宜い」コレ又市見忘のすまひお婆だ能も私の親父様を新
 ……割で打殺て本當の縁の下へ隠し利へ機軸を運て立退き又其機軸私を殺さうとて追駈ナ
 ……と續て切升山一「サア、照やお前も照」ハイ、兄の隣父市覺悟をしろと切る山一「サア、今
 ……度ハ私に遺して呉れ、可愛い怪が憫然の死を遂たも此奴の爲又娘を斬殺たのも此奴の業此
 ……奴め、と四角で鮪を屠を標で山一「サア兄様だ正」今度ア私の番だ、此畜生め親父を殺や
 ……アがつて此畜生めへと泥饅で以て籠の繕ひ直しをする標よサン、隙て是から立派な絶息
 ……を刺す其中、諸方うち人か出て捨て置かれぬからと標と山平の直機自身番へ参り升て夫
 ……を細やかま町奉行へ訴へよ成升とが全く親れ敵討と云ふ事が分り升て殊も悪事を重ね升と
 ……る水司又市で御座い升から別段よお咎も無く此事か神原様のお屋敷へ聞け升た所りら白鳥
 ……山平并よお照の召歸しの上彼のお隣の白鳥の家へ養女に之後小養子を養て白鳥の名跡を立
 ……升と云ふ又泥工の正太郎ハ白鳥山平の故縁うら正道の者で有と神原様へお抱よと後よハ立
 ……派な棟梁と云ふ正太郎左官と云はれ下谷茅町の横池の端へ出標と云ふ處よ十一二年
 ……前よ家も残て居り升た目出度親の仇を討升て家業を升ると云ふ巡禮敵討の物語ハ是
 ……結局で御座い升

敵討札所の靈驗下之卷

終



月詠萩江一節

第一席

一名萩江の傳

三遊亭 圓朝口述
小相 英太郎筆記

一席お聴入れ升るの萩江露友の傳と云まして長唄から萩江節と云ふものが其昔し一派分れま
 してツイ先頃迄四代目が存生で居りました元祖が萩江露友二代目が名人東治三代目が喜三郎と
 れるら吉原よ家元の判が御座りましたが二代目露友が家元の判を兩國米澤町に江崎喜左衛門と
 された人が居りましたが是の元北川町様と云て大したものでお大名へ御金御用をつとめお出入を
 致しまして結構お暮しを致した人で其家に萩江の焼印を預けて置ました縁で四代目を相續致し
 ましたと云升り付て傳を調べてくれると頼まれましたが風と聴出しまして段々これを調べて見升
 ると萩江露友と云者の元津輕様の藩中でおさいまして只今本所よ草苅庄五と云ふ馬の先生がご
 さい升此先生の家の過去帳に萩江露友と云ふ名が書て御座い升から先生よ承はり升と全たく草
 苅の家い萩江露友の家で津輕藩で森庄五郎と云ふので森庄五郎が本姓であつたけれども草苅の
 家へ養子よ參つて今で草苅庄五と名のりました、森の家い庄五郎とあると必らず津輕公のお
 屋敷を出ることがある先祖の左様で庄之進や庄太郎や庄兵衛杯と云す他の名前での津輕公の
 お屋敷を出ることのさいが庄五郎と必らず其者だけの森の家を出るとあると、妙々
 のものだらうと草苅先生のお話して發端を今日から始め升がはじめの些とお堅うござい升が返
 々お話しもお屋敷から外へ出升るとお和かまあり升丁度發端の寛延二年己巳年れ九月四日の洪



水で御座いますして此時の本所邊の感しい出水でござりました横網近邊の船でなければならぬ
 ません様など此時の猿ヶ股が断れる萬西領の下白井の渡と砂村の間の土手が断れる柳崎井
 戸邊の一面の水もありましたと云ことで其頃津輕侯の津輕岩松信幸と仰られて未だお年若の殿
 様で御座居の出羽守と被仰つて柳崎のお下屋敷は御在でござり升る洪水のことでござい升から
 貴お徒士の衆が船を漕ぎまして奥様老女中老お側の次ぎのお女中衆が皆出迎ひまして船にお乗
 番せて二ツ目のお上屋敷へお連れ申傳馬船杯を出して之れへ荷物を積んで運び升様おこと若士
 衆がお船を漕いで今二人許り女中を助けて漕ぎ出さうとする時砂村の渡口下白井の口二ツ所と
 も一度は断れました。水位陰気さのものございませぬ地震雷火事親父と申升が火事の聲を
 まのでござい升が何だり陽氣でデヤン／＼半鐘を打たしてアヤリヤン龍吐で其所の所が断し
 るあり升が水の圓朝も田舎親類がございまして萬西へ參つて居るうちと恰ど出水も遣ひまし
 たが土手へお百姓衆が灯提を點て魚味を焼りかへつた弓張を點けまして皆錫杖を持って土手へ積
 み升材木を運び升土手が断れると早鐘をゴン／＼竹藪をブウ／＼お百姓衆が断れた日
 断れると忽ちに満水に寄りました水の濁を卷て押流れ升家のグラ／＼と忽ち震き出して流れ
 升大樹の根こぎにあつて流れ升井戸も雪隠も一ツにありまして流れ實に地獄の責で、左様する
 と角の河野六郎と申三百石頂戴致し升人が在り升が此六郎がお國詰で御新造はお腰櫛が在で
 今ツラ／＼と震れたかと思ふうち此家の轆轤りました素より彼の邊の濕地のことでござい升
 おらぬ家が流れ升とキョ／＼と娘と御新造の泣き叫ぶ聲が致しましたか夫も沈んだと見え

して遂にの聲も聞へなくありましたが何所かへ掴つて浮上つて 女「助けて下さい日ウーと言ふ
 聲が、又水の中へスーと沈むと聲が無くなりました若士衆が是を見て、若「彼の長家の誰れ
 が住居か」河野六郎殿の住居で六郎どののお國詰で若「何うかして助けられんかア誰の飛込
 で誰れも飛込む者があひ飛込めば大樹が流れて来るから助腹へでも當れば共に死ななければ
 らん何卒ぞと思ふ深切の有つても逆巻水の中へ飛込み助ける者のございませぬ、所へ乗合した
 者の森庄五郎と申年二十三才で色の白い口元の締つた鼻筋の通つた眉の濃い好い男で水鏡
 が流して居るからものも言はず上へ着たものを脱ぐが早いか逆巻水の中へ飛込み板手を切て
 ギン／＼と泳ぐ肩の所が出ましてナ上手十人の泳ぎの違つたもので、只今での大分水鏡が出
 来まして夫／＼教師が出て教へ升のよ水の中での軽いものと見へまして人間を掌へ乗せまして
 泳がして龜の子のやうに手足をガナヤ／＼遣て少しの水を呑みければ上手な杯と申升乳
 當り迄出なければ上手でないと云ひ升、モン／＼と水も逆らつて泳ぐと他の士衆が、士「森氏
 が飛込だが若し怪我をしようと往かん入を助けやうとして怪我をして往かんヨ／＼と言ふも森
 の見もかへらすスツ／＼と泳いで四十才に亦る御新造と十三もあるおのの云ふお嬢さんを雨
 方に抱込んで立泳ぎで早く助けやうと思ふが二人を抱て居るから何うも思ふ様な体が動かせん
 ドツ／＼と流され升、早く船も泳ぎつけ様としても勿々問合せん其の中身体も疲れるから
 運々体も沈んで来る何分二人を抱て居るから當然で時々水をブウ／＼と吹て 庄「助け船を
 船を持って来イヤア、と言ふ其聲の美しいこと、後にの森江節の家元にある位だから船で大
 聲で、其聲が水音に逆つて何うも遠く迄響きますると奴い御梅に此所を小松川の方から肥船の

上へお婆さんに子供も道具杯を乗せてお百姓が二人許りで酒で来る所へ流れて助け船ユ一と百
 姓に 百姓ソレ助けろと深切ナお百姓で手を持つて三人を漸く引上げて先づ無事で親子の者
 を森庄五郎が助けました是からお上屋敷へ連れて参るやうもあり其のうち出水だから十日も経
 升と穩かもあり命の親だの森さんの所へお禮に往きければ済むと言ッてをりました娘
 が氣落をして薬を服み体が悪いので大きき日も遅れまじたが結構な鯉節の折は白羽二重の反物
 を包んで母おすみ下男を伴れて娘と共に森の家へ参り立關から案内を乞ひ 女「へいお頼みナ
 升 傳助の居りませんか 母「傳助の居りません 庄「イヤ私が出迎ひませうとツカ／＼と森庄
 五郎が立關の三疊の所へ出まして 庄「これの宜うこそ 女「誠は御無沙汰を致しまして早速お禮
 又上りませんければありません所を少々娘が氣落を致しまして不快で存じながらお禮が延引に
 ありまして 庄「マア／＼御無事で喜ばしうござい升祖母アもお案じや上て居り升マア此方へお
 通り遊ばせ 女「御免遊ばしませ 庄「誠は見苦敷ございまして此の通り掃除が届きませんで 女
 何う致しまして何とも今度のことのお禮の上様もございません早速國表へ手紙を出した所の
 彼地からも喜びまして能くお面は掛ッてお禮を上げる様に何分主用が多端で詳細書面の出せお
 いから貴公様へ宜しき御傳言致す様にと六郎から書面も参りまじたソレも御覽に入れたし實
 に此度の妻も其後の大方悪い水でも呑ましたのだからうとお醫者も升が快氣ございませんで
 御無沙汰を致しました何ともヤソウ様もございません 庄「何う致しまして誠は宜いマア御運の
 強いので實に此度の洪水の思ひがけおいこと祖母アも聞き升と斯う云ふ洪水の覺はがきいと
 ナ升……お祖母アさん／＼ 聖「ハイと出ましたのの隠居お種とヤン庄五郎の兩親が早く死去ま

して此老母も育られ六十九もあり升人て其所へ出てまありまして其時女房の老母に向ひまして
 女「御老母様御機嫌宜敷う 母「誠は御無沙汰を致しました此度の怪しからん洪水でございまし
 てモウチあきた様私も此年迄覺はません事て、イヤ、エ最う何う致しまして能くお助けやしたト
 庄五郎も申聞けました、マア／＼御運強い事で殊にお留守中でのあり嘸お國表でもお案じ被
 成つたらう、マア／＼何方でも一ツ御屋敷中にお怪我の無のの此上も幸ひのこととござい
 升、何う致しまして、ハイお互様の事でチあきた様泳ハチ庄五郎の幼年の折のら上手でござ
 いましてチハア……ソレ故水練の家柄で血脉を引て居るのら習ハチして上手だと森川さん杯が
 仰るので 女「有難いこととござい升 母「何う致しましてナせ左様ナ御心配をささい升 女「イヤ
 エこれの到来合せでござい升些少物でござい升が何卒ホンの志計りで御笑納下されば有難う
 存じ升 母「イヤ戴きません此事は就てのお禮を戴く道理のございません一ツ御屋敷に居まして
 のお互の事で左様ナ事ありません、戦争でも有まして怪我があれば共陣中おあつて手當を
 致するの當然のこと 女「何卒左様な事を被仰す 母「イヤ／＼戴きません、此マア結構ナお反
 物を頂戴致しまして却て庄五郎の深切が無あり上へ聞ねても宜い……チヤ／＼おかの様大
 層お身大くお成遊ばし誠にお評判の宜お娘で御孝心で毎度お噂をやて居り升近頃のお快うござ
 い升か嘸マアお驚きでございまじたらう誠に長いお娘様で只今生憎ナカ……しげやアノお茶
 を 女「何うぞお構ひ被上す、左様仰つて困り升折角の何で何か 母「イヤ夫の戴きません
 お助けナ事不思議ナことで是が因縁とでもやませうか人の助けて置度ものでございまして
 私共の庄五郎が貴女様をお助けやたのの不思議ナ事で私共の先祖の森庄五郎が洪水のとさき

貴女方の先祖の河野六郎様お助け頂きましたことが有り升 女「ハイそれ何う云ふ 母「私
 存じませんが恰と此年から百三十年前寛永四年八月洪水のとき素と猿樂町はお屋敷がござい
 ました頃貴女権現堂が切れまして九段の下迄水が参りましたと其時の洪水のト通りナラン
 水で人家を押し流しました事の夥たいしい事で、其時に先代の森庄五郎が片方の手に大小と系圖
 書を持ち片方の手に年取った母を抱へまして泳が達者でございまして泳ぎましたところが
 段々／＼身体が疲れて最う仕方がないから大小と系圖を捨て母を助けたいと思ふと系圖大小と捨
 ますれば家が絶え升あれども系圖大小を厭ひ升ればたつた一人の母を見殺ししければならぬ
 何うも致し方がないと思ひ系圖と大小を捨て母を抱て漸く九段の上へ泳ぎまましてそれであ
 た母の助りましたがお屋敷を暇ありました不慮の至りとすて暫く浪人して居りました時貴
 女様の御先代の河野六郎様がそれの孝心者人命の代へられぬ母を助けたい爲に系圖と大小
 を捨てたの孝心でござい升お役立べき武士だから取立を願ふと云ふので召し返しよあつて
 新知百石を頂戴致しました固の三百石でござりました只今百石取りの身上で居られ升の貴女
 様の御先代河野六郎様の庇蔭様夫が百三十年の後の又水で貴女様をお助けすと云ふのは是
 れの事に不思議と庄五郎も申す聴け升これが固の御恩を報す應報とやらでございませう六郎の
 要房も始めて聞かして 女「ハイ、始めて承はりましたが夫のあつた様命をお助けしたので
 ない殿様へ御執成を致してお召返しを願ひましたので現在其場へ已に流される所をお助け下
 すつ御恩は實に何とも申上様のございませんそれと是れとの違ひ升 母「イニ何ナ事があつ
 てもそれの歳させませんが夫れ程のあつたと思召ナラ 女「私 がひとつ願ひがござい升がおかの様

何方かへ御縁組がござい升か 女「ハイ未だ年も参りませんし、何方へも相談の致しません 母「
 そんから願ひたいもので何うせ他家へ御縁付きに在る嬢さまから庄五郎の誠と幼年の時分の
 ら兩親も分かれて親おし子で婆アの丹精ではせいで致しました何うか良い嫁を娶りたいと存じ
 ますがおかのさまが来て下されば私 も安心致し升早く極ませんと私しも來年の七十より心
 配でござい升から何卒あつた少祿者で御意の入り升まいがおかの様を庄五郎の嫁に下さる
 事でのござい升が縁付のことでござい升から當人の胸も聞きませんでい今がいま御挨拶も出来
 ません 母「何の其所におかの様よ聞遊して……チへおかの様 私共の庄五郎の二十三才で
 んかに成る男でもおの意目か知れんが世間様で好男／＼と言ひ升し劍術の可成り出来升
 の御上手でござい升殊にあつた子柳島の御隠居様の遊藝が御好で爲入つて私共の本夫杯
 時々御對手で三味線位の彈升し横綱は坂田仙四郎と中長唄の名人がございまして夫は稽古を致
 升のを自分で聴て覺て眞似を致升が習ませずとも節も申すし聲も宜ござい升婆アがボツ／＼三
 味線で時々小聲で遣升が美聲でござい升……左様お事の何でも宜いがかかか様の宜
 しやア有ませんか貴嬢さへ宜いと仰やれば直極り升 女「誠は彼の通り顔を赤くして居り升六
 郎が國語で居り升から歸宅の上一應六郎に聞け、否とやす氣遣の有ません其の上確を取極を
 致し升 母「左様被成つて下されば私死んで浮み上り升 女「最う遠からず歸りませうア今
 甘ん是で暇致し升 母「夫でいはいお歸り迄結納代りとして頂戴致し升 女「左様先へ極め遊
 びての 母「イニ私しの方で結納の積りで、と老母の喜び、御新道も娘と共に命を助け候は

庄五郎の家へ嫁も遣つても宜いと喜んで宅へ歸りました、是から折々庄五郎の宅へ娘も来る
庄五郎もおかの手引を引いて龜井戸方へ連立て歩行升此方も言号けの本夫と思つて子心よも思
ひの替らぬものでこれから三年めの六月中旬に六郎の江戸お屋敷へ歸りましたが歸り早々御用
多でございまして其中へこれと老母が達ての頼み共言兼て居ッテが然のみ悪くもあいな
と心得ましたから六郎歸宅の上聞様と妾し言延て置きました如何致しませうと云ふと
れに至極長い縁だ早々取極るが宜いとの挨拶がわつたから御新造の喜びまして老母へ返答を致
しましたら老母も喜びまして早く結納の取替せを致度と申して居り升

第一一席

其翌年の寶曆二年でござりましたが殆ど三月十八日晩方六郎が御殿から歸りまして 六ハイ
只今歸りました 女「大層お遅うござい升から心配を致しました 六ハお番引一寸笠原殿の所へ
呼ばれましたが、幸ひのことと斯う云ふ譯で笠原殿の親類が奥様の里方の大和公の重臣で福永忠
太夫といふ者だが其長男の忠之丞と云ふ此年二十六才だと申すが中へ選しい武士何事も年よ
似合す秀であるが彼の者が此の春とかうのが羽根をついて居るとき笠原殿へ年頭に來て見て良
い娘だ賞い度と伯父の笠原殿へ左様言たさうだ、夫で實ッて遣らうと受合つたとかいふので重
臣の笠原が手を下して娘を遣て呉んかとのこと、良縁であるしすれに國へ居る左七郎の爲も
宜敷から左七郎も於ても否のあまの、確とお受を仕たら向ふでも急ぐ容子早く結納の取換
せをせんでいあらぬ相當の扮装もさせなければならぬが此上もあいな實は何も忝あいなことか
のを呼んで驚と申した方が宜からう 女「夫の和郎いけません 六ハナセ 女「ナセだつて和郎森庄

五郎殿方へお遣り遊ばす約束もあつて居り升 六ハナンテ森庄五郎も 女「を御意遊ばすお國の
らお歸り遊ばした時は洪水のとき助けられた恩義があるし向うでも懸望致し升から娘を遣りま
せうか如何致しませうと伺ひましたら貴郎に至極宜い縁談だから取極るが宜いと仰つて森庄
五郎方へ直ぐ其足で參て約束しましたものを今もあつて他へ縁付まして森へ濟みません 六ハ
森の方を斷つて仕舞へ何も私「が極た譯でいあし女同志の口約束結納を取換した譯でもあし
福永方へ遣るが宜い小祿の森へ縁付ることのあいな確とお斷ンさい 女「そんな無理を仰やう
ても斷り様いございません六郎確と承諾致しましたと老母へ申聴け同人も喜びまして私も安堵
して死なれ升と申して居るに今もあつて六郎が不服でござるとい申せません 六ハやされん事いあ
い結納を取換せた譯でいあし手 女「アハござい升が命を助けられました恩人へのございません
か「命を助けたと言ても言ても先方が勝手に飛込で助けたので殊も先代が森の家を助けた
事もある恩報を向うで申たのだ其れで義理の差引と申すもの 女「左様お事を御意遊ばしても
私「い参られません 六ハ参られぬ事ありません、實に其時六郎が歸宅は節一すやた所六郎も
歸り早々混雑で居ッて申誤つたと言へば宜い、小祿者の所へ遣りません。次の間も今年十六
もあるおかの情けい父親様の思召だと發明を娘でござい升から其所へ出て参りましたか
の「父親様お歸り遊ばし 六ハ「運くありました、今母親様も申聴たがナお前を江戸見成の
福永へ縁付る積りマヨ尤も笠原の頼みで當家の重臣笠原がナお前の日頃行狀の正しい所から望
まるので此上もあいな縁談殊も兄さんの爲めにもある事實に有難い譯早速母親様と相談して若
物や何の歸入の仕度をおおければならぬ かの「父親様妾の福永へ縁升の否でござい升

へ来るは約束を破りましたら何卒森様の方へお遣り遊をして下さい 六左様が事言つて困り升左様云ふ辭に往させん先方へ確と承知したとお受を爲ましたら是非笠原へ往かなければなりません かの「父親様へは辭を返しての済みませんが他の事と違つて縁談の事を約束遊ばすのよ妾しに一應のお話しおきくは一存でお取極め遊ばすとの如何に父親様でも些の爲に實に何も先祖へ對してもお前の孝道にもある實は此方の家の爲めで かの「妾しのお家の爲との存じません、一端お約束して置きながら森様の方を斷つて福永とやらへ嫁り升と福永の千石森庄五郎様の小祿だから約束を違へて他へ縁付た怨の深い武士だと父上を世間の人々笑はせる様おこと却つて先祖の苗字を穢し妾しお父親様へ却つて不孝な當るかと思ひます 六今それの左様だが困り升左様お事を言つて、森の方へまだ確と約束した譯でない、左様じやアないか かの「い、エお約束被成ました、先きのお祖母様もお喜びでございまして、安心したと云ふお言葉を母親様も妾しお伺ひました夫に父上もそれの良縁だから早速取極るが宜いと存意遊ばした事がござい升子 六「それの左様言ひましたヨ言たからつてその内話の事で縁と何も取極た譯でない其證據にのまだ結納を取換した譯でもない かの「それで武士は三言さしと申す事の嘘のこととござい升か 六「何サ かの「父上が良縁だから早速取極るが宜いと存意遊ばした父上の内話の嘘をば意遊ばしても表向計りでござい升か、常々父上がば意遊ばすお前が成人の後他へ縁付るが縁付て子供を設けても小兒に偽りを言つて賣ると其子の必らず嘘のさああるから親の子供を偽り欺くものでない偽ると其子が慣れて

必らず偽りにあると御意遊ばしましたことを妾しお覺へて居り升 六「それの左様サ かの「家上が良縁談だから早速取極る様にと御意遊ばして置てその嘘だ福永へ嫁入と仰やるのの父上の子をおだまし遊ばすと申す者左様致すと妾しお騙着す事を覺えてハハ福永へ嫁入と父上をおだまし申す森様へ參るかも知れません父上が嘘をば吐遊ばすのだから喉とお断り申す置き 六「困り升子何うも誠におとうも、ダガサ、是が子能く考へて御覽お前の爲を思ひ此家の爲をも思ひサ かの「私しの爲又家の爲を思召すあらサ森様の方へ行けと父上の仰やいません 六「森へ行くのの爲にあらぬワアアいか かの「偽り武士と人に言はれませう 六「何を かの「河野六郎の役柄をも勤めながら人を欺き慙み迷つて森を變換して福永へ遣つたと人に言はれ升と父上の御耻ばかりでなく殿様のお耻も亦あり升から私しの死でも福永への参りません何卒森へお遣り遊ばして下さい。と十六にある娘が浮涙で親の心得違ひを責て異見を述べたから六郎の茫然と致しまして 六「困り升子 女「何を和郎お困り遊ばし升ト女房と十六もある娘は遣り込められ 六「頼へ筋を出し鼻の頭へ汗を出して 六「何うか先方へ話しの致様のいかのウ、と六郎の少しもゆかず頭是がございませんから耻かしがつて居るからと申すと笠原もア「急ぐ譯でもあ いから當人の得心の参るやうは薦めて下さいと言つて居りました然るも六郎が不圖悪心を出し 六「是から森庄五郎を憎むと云ふ夫が爲めに森庄五郎が大難のお話し其年八月十五夜は江戸見坂の松平大和公が奥方と御同道で柳島ある津輕公の下屋敷へ御客來にて恰と月見の催しあ 六「是れは秋陣の花燈を出來へ大和公の御供は召遣られし福永忠之丞親子早川左中甲田主家

杯といふ何れも重役の人々事主方の津輕岩根御夫婦笠原主膳河野六郎源田義右衛門近侍若侍の銘く、スラリと居並らび大和様を慶應で多勢出でられまして老女中老お備お次小姓お使番御仲居お末までが皆出ましてお賑やかさごとくで畫の中のお慰みは横綱の坂田仙四郎富士田百次杯とすす長唄うたひもお招きあり夜に入て月の上る遊樂で居りました、すると河野六郎が思ふよ様の森庄五郎の長唄を遣るそうだ彼れを殿様よりお好とて、欺て彼奴好だからに前庭で長唄を歌はして赤恥を搔して遣らうと考へて笠原主膳とコソコソと主膳の苦笑ひして居りましたが其頃の御大名様の只今の華族様と違つて重臣の言ふあり次第で殊は津輕岩根公のお年若だから笠原の言ふとい能お採用であり升から上へやあげます庄五郎儀の長唄が至つて上手と云ふとで武士も似合ぬこと殊は美聲で勿々商賣人も及べぬ位で就ての坂田仙四郎も盡つて居りますすが仙四郎の門人にあつて居る左様で御座ればお客來のお慰みもどうか一段長唄をお聴に入れ度とす當人達てのお願で御座いますすがお慰みも飛んだ宜敷やうと思ひます殿、ウソ宜左様か庄五郎の長唄が上手か其れい宜からうと被仰是から六郎も囁くと河野六郎點頭て森庄五郎の居る所へ参つて、森氏今日の大さよお骨折で就ての足下が長唄を遣ることを誰云ふと云ふ疾まお上の御存知で大ぶ長唄が得意と云ふから却て藝人よりも武骨の武士が遣るの面白と云ふ疾で笠原へお言葉が掛りお好みであれは長唄を一段唄へといふ被仰付だから支度を被成い、森、何うも願ふ赤面の至りで上の御意でいあり升が其儀の何うか夫の人の癖で左様あることい存せんとお願を願ます、六、左様の往ノ御意で御座るぞ、森、ハッ、と重役の言事は無理でも辭の運せません下役の悲さ。何う致さうと十方に暮れたが遣らなければ尙更不興にあると云ので

舞のさい顔をして坂田仙四郎に相談すると、仙、お遣り遊ばせ貴郎のお聲から大受でござい升と藝人社會の癖で、レ合ませうと、三味線を合して居る詮方があく庄五郎が厭々出ますと、大和公、妙だ、チンテ彼者の名の何とすぞ、士、森庄五郎とア升る、大和公、ハチ、武士が長唄を歌ふとい面白に至極宜からう、杯と仰せられ升と又女中衆の罵々致します男が美つて常々相だから奥向の評判の宜い其庄五郎が御前へ於て長唄を歌ふと云ふので女中衆の大騒ぎで中々お末杯が屏風の蔭で、ウ、鼠あきをする、轉、覆るやうな騒ぎでござり升其時、藝娘を一段唄ひますと如何にも聲が能く節が上手で天然に備ひる藝で御坐い升大和様を始め奥方并び津輕君松様も實に感心しました自然の藝で佳いものだと大層御意に入て一段、とお好みが出ました跡の七福神杯をやると大して評判が宜いので大きよ六郎の當が違ひましたから尙々残念に必得彼奴われ丈け藝が出来るから武藝の方へ不熟だらう幸ひひお供に福永忠之丞が居るうら試合して御前へ於て彼奴が素首を打破らして赤恥を搔して遣らうと考へた悪い人の悪い人であり升又笠原の言ふと直に殿様へやあげ、笠、庄五郎義遊藝をお聴に入れまして恥入る養でございす願はくは、武士の持前武藝を御前へ於て御覽入れ度就ての御客様の御供も奉られた方の恰好年頃も似合であると思之丞と試合たいと當人より達での望みお慰みも相ありませうかと存じますか如何致しませうと言ふと、殿、それの却つて宜からうと主膳の言あり次第で六郎も告ると六郎の懸て庄五郎の側へまわり、六、何んとも感服實に驚ろき入りまして商賣人も及べぬ位で、森、實は何んとも恥ぢ入った儀で油汗が出ました、六、唯今お客様があつしやるよ、彼の位の武士として遊藝が出来る位ので、万藝も達して居らうから武藝の尙更だらう却つて勇ましく御

置入れる方が宜からうか武蔵を見度と被仰る又お供の福永忠之丞殿おれは忠太夫殿の御子
 通で可なり又出来ると云ふがやんのお興で一才木刀の試合をと仰られたら早速仕度をする様
 に、森、何か其儀の平は何卒御免を、六、アレ、夫の往、遊藝計りで武藝の心掛けが無ければ當家
 の恥外聞で御座るこれを辭退致す事ありませぬ取急いで支度を被成上意あり升を、森、ハッ
 合として向ふを打負す時の御不興ありのせぬかあれども自分の負る時の御當家殿様の恥辱も
 あるとであるが初めての試合で位も取らぬけれどもせめて合打位かの事で済様に致度もの
 を思ひ實層時分迄の表面素甲手の立合がありましたさふで御座り升木刀を持って只今の形のやう
 あるものですが是の位も取が互ひに同じ様で無ければボカリ返る踏込ボヤンズンボヤと云ふ譯
 みの往かぬ勿々口で舌ふ様譯でいありませんから双方何れも頼に筋を出しまして森、御前で
 費し、見物み出ると云ふ下役の乗の赴産を敷て家中の御新造や殿様も皆拜見に出まして殿様
 奥様のい喜まびでお大名でも我々でも變りいございませぬ長唄の跡で御術ですから演劇の跡で
 角力を観るやうさ譯で面白から進み出て見て居る折から御免を蒙て双方とも譯を被どつて
 袴の股立を高くとりわけ小短木刀を取て福永忠之丞と森庄五郎が庭先へ出さすると、何と
 か下役の乗のい願と分りませぬから種々の評を致して居り升、士、杉山、杉、士、何々云ふ譯
 で試合にまつたか、杉、何々云ふ譯か御前のお好みだとすのさ、士、イヤお好みでない左様、何
 か深い譯があるに違ひない何でも御前のお好みでない何う云ふ譯の全体何も宜敷いお供と
 當家の家来と立合をする、の、何の道何か譯があるに違ひない長唄も森氏の遣り度いあやと

云ふのを殿様が是非お聽被成度と強て出さしたのだから長唄で御意に入てお慰みの濟んで居る
 ふ又御術ナメ、何々云ふ譯と、堅過ぎて宜敷いお慰みが濟たら彼れで宜、ヤア、あいか、杉
 「そんな事と言つても我々共の自由にはあらぬ昔重臣方が附て入らッしやるから、士、重臣
 平で彼の空原の意地の要の顔付の悪々敷と下役と見るとけん突で空原を見ると何とも厭ふ心
 持がする同じ空原でも銀座の藝種屋と大違ひだ、杉、其、ナ、事、を、言、て、宜、敷、ナ、イ、士、森、氏、の、遊、
 藝の彼の位の出来るが武藝の手前どもの考へで、些と拙たらうと心得る森が負れば當家の恥辱
 だから止た方が宜敷福永の大きナ奴で真黒で肥満して居るから強い違ひない向ウの流儀のあ
 んでせう、杉、今、井、田、流、だ、と、事、さ、宜、敷、い、こ、と、だ、杯、と、い、る、く、又、傍、觀、の、も、の、が、心、配、し、て、居、り、
 ます、其、う、ち、も、特、心、配、致、し、て、居、り、ま、し、た、河、野、六、郎、の、娘、お、ら、の、で、御、座、り、升、る、ア、情、か、い、父、上、
 様が縁談の事を私が不承知で福永へ縁付あいのを遺恨に思ひ何も御存知ない森様を空原や父上
 様が巧みの眼を落し入るといお氣の毒、森様に何うかお怪我があければ宜いが簡様を事にあ
 るも皆妻、おる御恩人の森様に怪我をさせてい濟さないとト、し、か、が、ら、涙、浮、で、赴、の、敷、て、あ、る、
 御新造様方や下役の人が居る所へ見へない様、踏、で、居、り、ま、す、と、其、中、双、方、御、前、庭、へ、出、ま、し、た、福、
 永忠之丞の仄、聞、た、が、此、奴、が、河、野、六、郎、の、娘、を、貰、う、と、云、ふ、約、束、が、あ、つ、て、此、奴、が、あ、る、か、ら、縁、談、も、御、
 前との事情の奴と最どうもナン、く、が、餘、や、と、逆、上、懸、の、遺、恨、の、い、ど、い、物、で、素、首、を、打、碎、了、見、で、木、
 刀を取つて、ヤア、上、段、に、構、へ、る、と、森、の、ヒ、マ、リ、ッ、と、正、眼、に、つ、け、ま、し、た、位、の、取、が、分、ら、ぬ、か、互、
 又、容、易、に、打、込、こ、と、が、出、来、ぬ、で、ヤ、ッ、ナ、只、双、方、合、合、て、居、り、升、懸、て、呼、吸、が、一、ッ、に、あ、る、位、で、見、物、の、一、
 綱、に、セ、リ、ト、氣、を、入、ま、さ、る、妙、な、の、で、情、合、で、御、座、り、ま、す、か、ら、岩、松、様、の、何、か、庄、五、郎、に、應、た、し、度、と

思召され自然あり開事で扇を廻らして見て居ります大和様の何うしても福永忠之丞に勝し度
 と思召されの君臣の情で御敷物から膝の進むのを覚ゆるのさい容子只心配さの津輕様の奥様
 の大和公より御縁付にあつたから何方等が負ても宜心持でいから何うか兩方勝てば宜と思
 召。さういさく往きません互に意氣を張り詰ました時の眞は蕭然として見物して居ります下
 役の者の分別もさくお饒舌が多いから 下役「何だ貴様氏 士」また出て来たヨ 殿々敷ヤナ 下役
 さまいものメ森の威服ナものだ 士「何ナ 下役」森の威服ナものだ遊藝が出来て其上此位に武
 藝が出来ヤウとい思ひあかつたヨ 携ひが良いから打込ぬ腕の宜に相違ない間隙のありませんが
 何も向うの如何も力がありませす彼の肥満でどうもポイント打込と受る木刀がギキツと折ヤア
 身がいら 士「そんなことを言たつて勝負の時の運で 下役」何かスツカリ森を勝たし度いが色の
 白い細りした華奢だからなんだり太のがぶつかつて居るがアツかけは森だから勝まい 士「
 そんなことを言ておぞといろくお事をやて居るうち間隙があつたか福永が打下す所をギキ
 ヲギキと二ツ三ツ打合と氣合の機會でヒタリツと切さが擦り合ふありませす少しくさつ
 た忠之丞庄五郎の兩人の互ひは唯々遠を窺ふのみ是の左様でございませす六ヶ敷もので向ふを
 打と思ふと打たれる又退うと思ふと打れる押うとしても打たれる向ふの氣合が緩んだ所を
 打と打込ませければならん双方ウツとサア左様成ると何うも殿様もお梅の半をお送り遊をし
 て老女様の心配致して芋蟲コロコロ見体は段々前へ出升る下役の向の事だ 下役「油らの杯と
 油のり杯を握つて居りまして油が出まして 士」油のり杯の持で拭奴があるものか 下役「油のり

を何うしたつてどうもグツといさを呑み込より仕様が御座らんで 士「左様どうも饒舌で御座
 る事が出来ません 下役」何地を退させませう 士「何方々退升る小遣子と種々の難言をして居る心配
 事の河野六郎の娘おかの何も森の危険を見て居るうち森の方の劍術の年効が足りあいから
 何うも少し斯う踏へ退る様子で退るのが弱いか押切の強いのか頼ど分りませんスル
 家老の心配して涙組ンで思はず知す足をいざらして下役の衆が居る所を押分て薄縁うら
 老生の所へスルといとスリ出して行ました何も文金の高麗に朱鹿子と金絲を房々と掛コツテ
 お白粉を着て美麗姿で段々前へ出ましたから 士「アレ、誰だ彼所へ出たの河野様のおかの様
 様の姿が宜敷きいな 士「浮雲」おかの様前へ廻つて見ての相撲や劍術の機會だから浮雲此
 前肥田が前へ廻つて見て機會で頭上を張飛されて打裂た事があり升よ浮雲」 士「おかの様
 前のお御座いますと言ふ中サリ、くく森の方の少し押れる容子すると思はず知すスーとおか
 のが起て平骨の女扇を持って見兼ましたから福永忠之丞の横面をギカツと打ましたからハツと思
 へ所も遠くおつたから森庄五郎扇の所をギカツ 忠「マイツツ、福永の負ふ成りましたが合手が三
 人に成りませしたら殿様を始め皆どうも實は驚きませして蕭然として仕舞ました福永忠太夫憤た
 のチツのと自分の子が打たれたのでありませすから 忠太夫「今日忠之丞負を取たので御座らん
 後の如く横合から出せしメ婦人が面部を打ましたから驚きませした所を森が打ましたので邪魔を
 大れたものが御座ります、福永忠太夫の河野六郎が娘との存じませんスルと大和様の何うも
 邪魔は障つて重役に言られると直ぐ其氣にあつて 大和公「アレ、何者か彼の婦人め折角の立
 合、邪魔を入られへ出たの何ものかとの御意でござり升すると御座様の被仰る事で津輕岩

かぬは感服した難が娘が宜い娘じや、盃を遣れ能く南家の爲兩人の爲に邪魔を入れた至極有爲の娘と御盃をつらはされる奥様の又、奥方「能く邪魔を入れて呉れた私も心配して居つた六郎重山ア、誠に可愛い者との御言葉にておかの幸ひの事もありましたが話さらぬけの忠之丞惚れた女は横面を打たれ其上向ふの長刀を賞ひ此方のヌゴく歸る是も付ても悪いの森庄五郎何うして彼奴を無者として斯うされぬ飽迄もおかの嫁は賞はあければあらぬと夫が昔しの人野凡ナもので刀あかけてもと云ふ事もある是ら森庄五郎が大難逢ふの話をしつた次ぎも申あげます

第三席

別荘までして茨江の傳で福永忠之丞の宅へ歸つて親共の叱を言われ頼りあ考へて残念ガツア居りましたが飽迄もありのを賞ひ度と云ふので伯父笠原主膳の所へ来て縁組の事を言入れまして歸り升其日の恰と九月の十三夜の事で重少々前より雨が降り出して秋の雨の晴間の無いものやとささい升忠之丞其日の形りの藪の長合羽は朝袋を掛けた大小遊蛇の目の傘は爪掛けの掛つた大遊蛇の高足駄で恰と未刻のお下りに笠原主膳が歸つて来て達まして暫時話して歸へるので御坐い升から申の刻と云ふので只今あれは四時半彼は五時と云ふ時間と御馬場口まで歸つて来るとスツボリと爪掛けが抜きましたたが重役の事での御坐い升が忍んで参り升事故供も連や自分でも爪掛けを嵌る譯も往りす片方は爪掛けを歩行のも極りの悪いものでスルと向ふうら御坐い升は御坐い升でビッポク、仲間が参りました忠「これく小者」仲間「へい忠、氣の毒か

がらソコへ服ヲ爪がけを掛て呉れンカ 仲間「へい、長よりましたと姿を見ると宗十郎頭中を目深は被て居る扮装が立派だから屋敷の重役と思ひましたから 仲間「お穿悪ければまた詰ます忠「思ひ掛けない事を頼ンダ待々コレハ少さいが取て置けヨと紐を包んで二朱遣りました其頃の二朱の大したもので 仲間「へい、有難頂戴致します多分のお手當有難う御坐い升 何所の家来た 仲間「へい、森庄五郎家来た傳藏と申す忠「フウー森の家来たか左様の何所へ使ひで行く 仲間「へい、池邊小藤太様へお使ひは参ります忠「ハ、左様の使は行て来たのか 仲間「へい、是から参りますので 忠「何の用で行 仲間「へい、今晩藤井戸の巴屋は越中節の順講が御坐い升ので主人が参りますので恰と明日の非番でい升から池邊様と御同伴で晩景から参るお約束の手紙を御届け申に参るのでい升 忠「フ、一寸拙者と同伴は来て呉ンか縁町は堅川と云賃席があるノカ 仲間「へい、待合茶屋でい升か 忠「あれへ一寸来て呉んか使が遅く成て氣の毒だが若しソナナ手紙を置て夫れから来て呉れんか 仲間「使と致しまして跡から参じ升御尊名の誰方様でい升忠「ソリヤア行てから名もいはんが訖度来いヨ最くつと多分に禮と遣つたらから 傳「へい、何う致しまして有難う御坐い升 忠「酒も飲せるぞ 傳「へい、有難う御坐い升、と仲間の大喜びで直ぐ池邊小藤太の所へ手紙を投込と早速夕景から罷り出ると云ふ返辭があるから立歸つて右の手紙を主人に見せましてそれから 傳「一寸近邊まで往て参り升と、屋敷を出てみどり町の堅川と申賃席まで参りましたた此堅川の家の庭を廣くとりまして所々に八疊に六疊四疊半杯小間ノと所々出来てあり升の密談杯をするよの宜席で御坐い升女中の案内で傳藏が参り升と 忠「ア、是へ参れ難儀しての往んよこれへ還入れ 傳「へい、何う致しまして先刻の有難う御坐い升多分お

手邊を置敷きして却てお高直直ノ屋よつぎ升有難う御坐い升殿様の御方様で御坐い升殿
 夫、遠慮しての往ノ今飯を取らせらる傳「有難う御坐い升女へいお茶を忠「コレ」女中少し話
 ちがあるから此方へ参らぬ様と致せ茶の其所へ置て菓子も置て往け跡で食の仕度をして置けよ
 忠「貴様ノ森の所へ何年をり奉公をするへ傳「へい私ノ今年で八年程奉公致します 忠「大分長
 年居るのウ 傳「へい誠ニ主人が良ウ御坐いまして萬事柔和うござい升のらら暇が出来れば何
 時迄も居りませうと思ひ升ア、いふ主人の掛ウ御坐い升此迄小言を一つ申た事ハ御坐いませ
 夫に御慮心々の祖母様に御孝行で實ニ隠居様を大事にする事ハ忍入ツタものでござい升ア
 升方ハ御坐いません誠ニ私ハ良い所へ奉公に行當ましたから失策ぬ様ハ心掛けて大事ニ勤
 升何時迄も置て遣ると被仰て斯ナ有難い事ハ御坐いませんから醫來居ります 忠「左様か庄五郎
 が宿の行状ハ何ウか傳「へいお三日ハ十二宛で平生ハ三ツ宛で忠「ナニナ 傳「お備で御坐升か
 「イヤ行状ハ傳「へい行状ハ誠と云良ウ御坐ます 忠「何ウ云ことを言に爲るナ 傳「お心掛け
 の良方でそれに長唄が好で御坐いましてコレハ今迄ハ内密で遊むしたので祖母さまが三味線を
 奉てお心ア様が遣れと被仰と御孝心だから厭でも御隠居の對手ハ御諾ハ被成升が此間も好で
 柳島の御下屋敷へ御客來があつて殿様のお好で御前で遣つて大層お上の御意ハ遠く夫からハ少
 しの大きき聲で遣つても宜い位で時々奥様のお招に與ります位でムい升 忠「左様か傳「一中節の
 相違ハあると御出りけにあり升今宵も池邊様を御一所に被爲い升 忠「フウウーシテ常ハ他に何
 かして居るへ 傳「イヤ他ハイヤナアすか歌も御上手で御儀も達してお在マツウで御坐い升が

事ハ被成らぬから出来ぬと思つたが御幼少時分から餘程の習ひ込と見えて先日柳島の屋敷
 で御儀の試合があつて私ハ存じませんがお客様のお供で向ふさまの逞ましひデクム、肥滿つ
 た大きき奴で有ツマツウで腕自慢で庄五郎を負ツウといふ了見で出かけました私ハ主人の方
 が上手で負しましたさうで平生聞え何でも懸の遺恨だと升が人の噂さハ河野六郎様のお儀
 横の主人の言号けで賞ウ積りあのを親の六郎様が不承知であんでも他へ縁付け様とするのを
 かの様が否だとか何とかで其向ふの惚て居奴と申のハお嬢様が行度おいとア升さうで誰でも好
 男の方へ行度と云ふのハ當然で御坐い升向ふの奴てへのハデクム、肥滿て厭を男で御坐い升か
 ら行度おいと云のをツレが間違の種で御儀の試合と成ツタのですが向ふの奴を主人が散く
 殿打ツさうで信ハ快い譯で御坐い升 忠「成程と言あがらツツと癩癩が込上たあれども夫ハ自
 己マども言へませんから 忠「今晩ハ何時頃ハ森の歸るナ 傳「へい主人の子の刻前ハ是非歸りま
 す尤も出る時の御門へ頼まして出ますが大抵戌刻頃ハ歸らうと存じます 忠「歸り道の何處
 を通るナ供ハあるか 傳「私が供に参るので御坐い升が私ハ参つて待て居るのでするが唄ハ聞へ
 ませんし腹が減から恰どお歸り時分ハ迎に参ります 忠「何所ナ 傳「矢張龜井戸から合羽干場を
 出まして錦糸堀から仲の橋へ出ます 忠「左様か少し待よ、と床の間ハありません硯箱を取て中の
 巻紙ハ詳細ハ書て紙を堅うして 忠「貴様誠ニ些少がこれハ使ひ賃だ 傳「どうも再度恐入ます 忠「
 心配おい此手紙を池邊小藤太の所へ持て行く呉れ 傳「へい、忠「此所ハ己れが居ることハそれ
 ハア書面ハ認てあるが貴様ハ此所で達たと云てのからぬ只これハ池邊方へ投げ込ッ放して宜
 から主人を汝ガ龜井戸の巴屋へ送つてから又迎に行時の此所へ来て呉れ己れが馳走して遣り度